

蛇は刃と翼と共に天を
翔る

花極四季

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

蛇は笑う。その鋭い瞳を隠す為に。

蛇は音もなく這い寄る。誰かの心の隙間に入り込むように。

蛇は翼を得る。自らの理想に準ずるための道具として利用する為に。

蛇は望む。歪みに歪んだ世界の更なる混沌を。

人は笑う。純粹に楽しいが故に。

人は音もなく這い寄る。それこそ日常の1ページであるだけの話。

人は翼を得る。本人にとって予想外の形で。

人は望む。舞台の主役を一流に仕立て上げること。

目次

プロローグ

第一話

第二話

第三話

第四話

第五話

第六話

第七話

第八話

第九話

第十話

第十一話

1

27

45

60

72

88

105

133

149

166

182

201

プロローグ

白騎士事件。

ミサイル2341発。日本に向けて発射可能状態で待機されていたそれら全てが、一切の予兆なくハッキングされ、日本に向けて発射された。

日本に向けて発射された。

そして、それらを一発残らず破壊した、究極の機動兵器 インフィニット・ストラトス”。

その後そのあまりの異常性、危険性から各国から向けられた戦闘機207機、巡洋艦7隻、空母5隻、果ては監視衛星8基までもを、一切の死傷者なしで無力化させた。たった一機での戦果である。

その事実の世界を震撼させ、ISは既存の兵器の遙か上に行くポテンシャルを秘めていることを知れ渡らせた。

ISと略称される本来それは、科学者である”篠ノ之束”により開発された本来ならば宇宙進出の足がかりとして作られたパスワード・スーツらしい。

ISは女性にしか起動することが出来ず、その結果女尊男卑という風潮が世間に蔓延

することになった。

まるでそれを否定した世界に対して反逆するように、世界の法則を一瞬にしてねじ曲げたIS。

その体の良い舞台として選ばれた日本、そして都合良くそんな日本を破滅させる攻撃が向けられ、都合良くそれを撃退することが出来た。

証拠はないが、間違いなくマッチポンプ——自作自演である。

何から何まで、篠ノ之束の望む形へと進んでいく。いや、彼女の考えることなど及びもつかないが、それでも彼女にとって一切の不利が出ていないのは事実であり、それ以上の結果を叩き出していた。

その流れるような顛末はまるで、自分の思い通りにならないからと癪癪を上げる子供のように、私は感じている。

そして、彼女が偶然か必然か、その我が儘を通せる能力があったというだけの話だ。

まあ、そんなことはどうでもいい。彼女の思惑など関心もないし、そもそも雲の上の存在に自分のような凡人が関わることなど金輪際ないだろうし、考えるだけ無駄だ。

それより自分にとって重要なこと、それは——

「改めて考えれば、まるでファンタジー……いや、SFのような現実ですね。”前世”とは比べものにならない」

今を生きる自分が、まるで漫画やゲームの世界に入り込んでいると錯覚するほどの、
”前世”との差異。

”前世”でもあと百年かそこから未来に行けば、車のひとつやふたつ空を飛んでいた
だろうが、”今世”は以前とは比べものにならないほど科学技術が進歩している。

それもこれも、篠ノ之東というイレギュラーの存在あってこそ。

ISという究極の”欠陥兵器”が紛れ込んだだけで、世界はこんなにも変化した。

バタフライ・エフェクトというには直接的すぎるが、たったあれっぽっちの変化で、
”前世”とは比べものにならない程世界は変化した。

「面白い、実に面白いですねえ。また当たり障りのない人生を送るかと思いましたが、そ
うはいかなさそうです」

誰もいない部屋の中、パソコンの電源を閉じて呟く。

私、狭間祐一（はざま ゆういち）は前世の記憶がある。

ネット小説で言うところの、転生者という奴である。

だけど、そんな物語の主人公のような体験をしたにも関わらず、神様にも会っていな
いし何か優れた力を得たという訳でもない。

別段それに不満があるわけではないし、そもそもそんな過分な力は不要だ。

私の描く未来予想図を思えば、そんなものは無用の長物。そもそも、そんなものを手

に入れずとも、実現できる。”前世”だつてそうだったのだから、世界の流れは違えど今だつて無理なことではない。

そんな自分は、成人を過ぎていた身体からは離別し、高校生としての生活を満喫している。私の理想を実現する、良い舞台として機能してくれている。

「こんな所に居たか、狭間」

「おや、赤鋼会長。どうなされたのですか？」

一人だけの部屋に堂々と侵入する、赤鋼鬼隆（あかがね きりゆう）生徒会長。

その大柄な体格とは真逆の小さな丸眼鏡が特徴の彼がこの学校の生徒会長で、そして自分は副会長であつたりする。

「いや、何でも凄いことがテレビで流れたらしくてな。放課後だから残っている奴だけでも、その情報を伝えたいつてことで今から校内放送を流すらしいんだが……」

「ほう、それで何故私を捜していたのですか？」

「校長がその話をお前が一番聞きたいんじゃないかと言つていたのだ。俺を直接呼び出して何事かと思つたが、理由を聞くのはお前が来てからでも」

「分かりました。こちらの用事も済んだことですし、行きましようか」

会長に連れられる形で校長室へと向かう。

会長はリーダーシップに優れていて、その人徳故に会長の座に上り詰めたまさに上に

立ち存在だ。

以前に会長候補選が行われる際、会長から「お前の方が会長に相応しい」と太鼓判を押されたことがあったが、まかり間違ってもそれは有り得ないと断言した。

”前世”でもリーダー的役割を担ったことがない自分が、何をどうすればその素養に目覚めるというのか。

当然、やんわりと断らせてもらったのだが、どうしてもということでの今の副会長の地位に落ち着いている。

せいぜい書記長が関の山だと思っていたのだが、ままならないものである。

「良く来たな、二人とも。まあ、掛けるが良い」

校長に促され、高級そうなソファアに座る。

異常なまでに若々しい外見の目の前の女性が、校長である。

個性的な生徒の揃うこの学園でも、一際異質なのが彼女である。

少なくとも、同じ生徒として紛れていても不思議ではない外見をしているが、果たして何歳なのだろうか。

「校長先生、それで私に話とは？」

「その前に、狭間よ。そなたは大学に進学せずに、倉持技術研究所”に入るとして相違ないな？」

「ええ、それがどうかしましたか？もしかして、あちら側から再試験でもやると言い出したのですか？」

「そうではない。そなたの能力はあちらからも高い評価を受けている故な、それに関しては憂う必要はないぞ」

「では、どうして？」

「これを見れば分かる」

おもむろに校長がモニターに電源をつけると、ニュースが映されていた。

『——はい、世界初のＩＳ男性操縦者の名前は織斑一夏。あの“ブリュンヒルデ”である織斑千冬の弟であるらしく、その存在は全世界で注目されることになるでしょう。以上で中継を終わります』

ニュースキャスターの台詞と、テロップに書かれた『世界初のＩＳ男性操縦者、発見される』という文字が、校長の意図を如実に語る。

「校長、これは……」

赤鋼会長が呆然とした様子で最早関係のないニュースを眺める。

「俄には信じられんだろうが、これは紛れもない現実である。ＩＳに関わっていく未来が確定しているそなたには、いち早く伝えてやろうと気を利かせてやったのだ。感謝するがいいぞ」

校長の言葉は、あまり耳に入らない。

それ程までに、今の自分は高揚していた。

そうだ、これだ。自分はこれを待っていたのだ。

目まぐるしい世界の変化、常識の逆転、そこから投入される新たな起爆剤。

間違いない。彼は——私が望んでいた至高の存在である。

無意識の内に、私の口元は愉悦で歪んでいた。

織斑一夏がIS操縦者として世界的に認知されてから、数週間が過ぎた。

世間的には大波乱のようだが、この学校では元より女尊男卑という風潮に流されない人達ばかりが通うので、話題にこそ上がれどそれによつて何かが変わったとか、そういうことはなかった。

「IS簡易適性試験……ですか?」

「以前より女性に対してのみ大々的に執り行われてきたそれだが、男性に対しても細々とだが行われていたのは、そなたなら知っているであろう?」

「はい。そして、織斑一夏の登場によつて、男性にも大々的に行われるようになった、と」
「流石に察しが良いな。それで、この学校の男子生徒も、その試験を受けるように指示さ

れたのだ」

「因みにいつから？」

「明日だ」

「唐突すぎませんか？」

「この学校ではそうではないが、世間では男子への風当たりが強い。如何に織斑一夏が男子でISを使えるようになったからと——いや、だからこそだな。女尊男卑を象徴しているISを使えるという優位性が崩されるかもしれないと考えれば、意欲的にこういった問題には触れたくないであろう。とはいえ、女性ばかりでISの研究が行われている訳でもなし、拒否することもままならないならばなああで済ませてしまおうと言う魂胆なのだろうさ」

「随分と確信していますね」

「同じ女故に、その醜態はよく目に映るものよ。ISを操作出来るとか、それに何かしら携わっているならばともかく、何の取り柄もなくただ女というだけで甘い汁を啜っている馬鹿が多い。そしてそうでない所謂選ばれた存在であろうとも、その根底は変わらぬ。優越感、そこから出でる傲慢、尊大な態度。例外はあれど、本質は変わらないものよ」

「珍しく辛辣ですなえ」

「間接的とはいえ、電話越しに馬鹿の戯言を聞いていれば嫌にもなる」

「ご愁傷様です」

「そう言うわけだ。私の苦勞を無駄にしない為にも、とつとつ行ってこい」

「行くのは明日ですけどね」

ともあれ、面倒だが行くしかない。

織斑一夏はあのブリュンヒルデの弟。更に言えば織斑姉弟と篠ノ之束は昔からの付き合いがあつたらしく、篠ノ之束が何かしらの細工をした可能性は否定出来ない。

出来すぎたお膳立てだ。だからこそ、そんな関係もなにもない自分達が第二の男性操縦者になるとは、到底考えられなかった。

そうして、次の日。

「……つたく、面倒なことになったなマジで」

「愚痴ついても始まりませんよ、千葉さん」

「それに研究所から来た女のあの顔、養豚場の豚を見るような目で俺らを見やがって。ぶっ飛ばしてやろうかと思つたぜ」

「手荒な真似は止めて下さいよ。せめて私達に迷惑はかけないで欲しいものです」

「……そこで止めない辺り、良い性格しているぜお前もよ」

「貴方が普段から言つても聞かないから諦めているだけです。そういえば、如月さんと

は最近どうなんですか？」

「どうもなにも、相変わらず会えば険悪になってるだけだったの。まったく、教会で暮らしていた頃はピーピー泣く餓鬼だった癖に、今じゃ可愛げの欠片もありやしねえ」

「教会で孤児だった所を、各々の家庭に引き取られたんでしたっけ。それで高校に上がるまで疎遠だったのですから、大きく中身が変わっていても不思議ではないと思いますかね」

「誰にでもあんなならいいけどよ、俺の時だけだったのがムカツクんだよ。いや、そうでもないな……うん」

「血縁とはいえ、離れていれば距離感が掴めなくなるのも無理ないかと。あまり邪険にせず、貴方の方から歩み寄っていかないと駄目ですよ。お兄さんなんですから」

「分かってるっつの」

そんな他愛のない会話をしていると、とうとう自分の番になった。

「I Sを直接見るのは久しぶりですね……。とは言っても、あの時はコア抜きの外装だけの代物でした」

眼前に置かれているのは、第2世代の量産型機体“打鉄”。

防御性能に優れている反面、機動力に劣る傾向にあるが、操作に慣れていない初心者には扱いやすい機体として名を馳せている。

最もポピュラーなそれは、訓練機としてIS学園においても愛用されていることである。

「私はラファール・リヴァイヴの方が好みなんですけどね」

どうでも良いことを呟きながら、打鉄に触れる。

瞬間、脳に無理矢理刻まれていくISの知識。予想外の展開に、思わず身体がふらつく。

そして気が付けば、私は打鉄を纏い立ちつくしていた。

「……おやおや、これは。まさかこうなるとは思ってもありませんでしたよ、クツクツク……」

まさかこんな展開になるとは。

これでは、もう研究者として生きる道は閉ざされたも当然ですかね。

ですが、良い誤算です。これで、私の理想に更に一步近づいた。

私の理想、それは——『織斑一夏のような“特別”をプロデュースし、存在を昇華させること』

”前世”の頃から、他人の為に尽くすことを至上の喜びとしていた自分にとって、これからの未来を担うであろう織斑一夏とコンタクトを取り、かつ日常的に接することが出来る立場を得たというのは、まさに天啓。

ISを操作出来る事実なんて、二の次だ。せいぜい彼の訓練の手伝いが出来るだろうということぐらいか。

ともあれ、これから忙しくなりそうだ。

まずは、この羨望や嫉妬と言ったあらゆる感情がない交ぜになった視線をどうにかしないと、ですわね。

織斑千冬は、溜息を吐いた。

弟である織斑一夏が初のIS男性操縦者となり、世間的に大注目を浴びているというだけでも頭が痛い話だというのに、続いて新たに二人目の男性IS操縦者が発覚した事実は、IS学園の教師であり、世間的に最強のIS操縦者として名を馳せている”ブリュンヒルデ”の称号を持つ千冬に、幾重もの責務を抱えさせられる結果となった。

世間的にはビッグイベントなのかもしれないが、お鉢が回った身としてはただの疫病神以外の何物ではない。

そして、今はその二人目のIS操縦者となった男、狭間祐一の入学試験のモニターをしている。

悠然と立つその姿に、緊張の様子は無い。

この場を訪れてから笑顔は一切崩さないその姿は、一見して人の良さそうな優男だ。何かしらの武道を嗜んでいたような体つきでもなければ、歩き方も然り。

男性操縦者が貴重といえど、それが戦力になる要素になるかといえば、別問題だ。

女尊男卑という風潮に亀裂を入れる一手として、その希少性故の商品価値としてしか彼らを見ていない。言わばモルモットだ。

IS学園特記事項第21項：本学園における生徒はその在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。本人の同意がない場合、それらの外的介入は原則として許可されないものとする。

この条約があるからこそ、未来ある若者が悪戯に権力者の餌食にならずに済むが、それも所詮時間稼ぎにしかならない。

だからこそ、鍛えねばならない。如何なる環境においても、一人で乗り越えていけるぐらいに肉体的、精神的に強くなってもらわねばならないのだ。

「さて、狭間祐一。これからIS学園に入るにあたって行われるIS起動試験だが、何か希望のISはあるか？量産期であればどれを指定するものは自由だが、希望がないのであれば打鉄になるぞ」

「では、ラファール・リヴァイヴを用意出来ますか？」

「ほう、名前を言えるだけの知識はあるようだ。それにしても、本当にそれでいいのか

？量産期ではあるが、素人が扱えるほど簡単な機体ではないぞ」
「構いません」

迷うことなくラファール・リヴァイヴを選ぶ狭間。

何も考えていないのか、それとも何かあるのか。

そういえば、あの男は一時期倉持技術研究所で研修生としてIS整備に携わっていたらしいが、その影響でISの知識には自信があるのだろう。

だが、実力が知識の豊富さとイコールで繋がるのは、最低限の実力が備わってこそ。

『では、始めろ』

マイク越しに開始宣言をすると、狭間は用意されたラファールを展開させ、指示に従い基本的な挙動をこなしていく。

最初こそぎこちなかったが、次第に淀みない動きに変わっていく。

適応能力の高さは他の操縦者と比較しても高い水準に位置している。

だが、それだけに終わらなかつた。

「ほう……」

狭間は基本的な動作と平行して、武装確認を行う。

指定されていない行動を勝手に行ったのはマイナスだが、その学習能力の高さには目

を見張る者がある。

ISは身体全体を使い動かす。パワードスーツとはいえ、装備することが出来ればどんな動きも思いのままとはいかない。

初心者が車を操作するようなものだ。理屈は知識で理解していようとも、実際に動かすとなれば状況に思考や動きが追いつかない。

アクセルを踏む力加減、ブレーキを踏むタイミング、車を運転するにあたっての環境の違い。こういった経験でしか理解できない感覚というのは、ISにも当てはまることだ。

しかしあの男は、あたかも最初から自分の手足だったかのようにISを扱っている。

事前の調査に因れば、打鉄を機動させてから彼は一切ISに触れていないとのこと。更によえば、その際は装着のみで動きに関しては一切の動作を行っていないかつたらしい。

当然、その事実を信用するのであれば、狭間はISを操縦する機会は一度とてなかった筈なのだ。

それが導き出す結論は、狭間が類い希なるIS操縦者としての適正の持ち主か、秘密裏にISを操作した経験があるか、のどちらかだろう。

前者ならそれはそれでいい。だが後者なら？

ISは量産期含めて世界に467個しか存在しない。束が何故そんな半端な数にしたのかは分からないが、アイツのことだからその数が『仮に全て自身に敵対されても無力化出来るほぼ最大の数』なんだろう。

世界を動かしてなお、その世界を拒否する。

果たして、いつまで彼女は逃げ続けるのだろうか。

他人を排斥し、世界を否定し、今度は何だ？

孤独に孤独を重ね、自分の必要なものだけを選び好みして、周囲今や敵だらけ。

兎は孤独だと死ぬと言われているが、寧ろ兎は繊細な動物で、孤独である方が精神的負担が少なく生きやすい生物だ。

造られた兎の耳をつけた彼女は、自らの意思で孤独の意思を体現している。

後付の部品で補完して、成長の止まった心を改造する。

それで自分は完璧なんだと見栄を張るあの姿は、いつそ哀れですらある。

だが、そんな彼女を否定する資格は私にはない。

護れたかもしれない平穏を、近くに居たのに何も出来なかつた私が、一体どうして彼女の生き方を否定できよう。

大抵のことなら叱りもするし、容認もしよう。

だけど、それ以上の一步が踏み出せない。彼女の奥底に触れるのが、怖くて仕方がな

い。

世間では私は気丈夫で凜とした女性であるように評価しているが、実際は過ぎたことを悔やみ続けている女々しい女でしかない。

「……織斑先生？」

思考の海に沈んでいると、同伴していた山田真耶先生が話しかけてくる。

童顔の中に困惑の色が見て取れる。今は同じ先生という役職に就いているとはいえず、以前は先輩後輩の間柄だったこともあって、強く指摘できないのだろう。

そもそも彼女はその優しさ故に、実力があるのにISにおいても代表候補生止まりという異例の経歴を持っている程である。

「すまない、少し呆けていたようだ」

「大丈夫ですか？最近忙しかったのですから、無理はありません。やっぱり私のが全てやっておきます」

「気を遣わせてもらってすまないが、大丈夫だ。それに、忙しいのはお互い様だ。君達を尻目に休むなんて出来るわけがないだろう」

意識を切り替え、改めて狭間の姿を見やる。

先程と変わらず悠然と立つ姿は、余裕の表れだろうか。

『狭間祐一。予想を上回る操縦技能だが、指示されていない行動を取ったのはマイナス

だ。これは試験なのだから、許可するかは別として独自の行動を取りたいなら一言言え』

「それは申し訳ありませんでした。何分このような体験は初めてでして、気が急いでしまいました」

『言い訳はいい。次は教員と対戦してもらおう。あくまで擬似的な戦闘状況の再現をして、適正を図るだけだ。仮に逃げまどおうとも、その動きが道理に適っていれば相応の評価をするつもりだ』

「質問ですが、勝利した人はいるのですか？」

『二人いる。一人はまぐれ同然だが、もう一人は代表候補生だ。勝とうと思っているのなら、素人の操縦技能や浅知恵でどうにかなるものではないと言っておくぞ』

教員の一人がアリーナに現れる。

装備は狭間と同じラファール・リヴァイヴ。相手と同機体を使用することで、自分に足りない要素を身体に染みこませるという意味で、専用機持ちでない限りミラーマツチが基本となっている。

「私も熟練の方々に勝てるとは思っていません。ですが——」

アサルトライフルを展開し、その銃口を教員へと向ける。

その行動の意味は、紛れもない宣戦布告。

「勝てないから適当に済ませるなんて、そんな勿体ないことはしませんよ。せいぜい学ばせてもらいます」

瞬間、狭間の笑顔で閉じていた目が、ほんの一瞬だけ開く。

それを見た瞬間、私の背中に怖気が走る。

人の良さそうだった笑顔と真逆の、人を人とも思っていないような冷徹な眼光。

そう、アレはまるで蛇だ。それも獅子さえ瞬く間に殺す猛毒を宿す。

静かに獲物の傍へ這い寄り、その罅で仕留め、身体より大きな獲物を丸呑みする。

人の良い笑顔も、易々と相手の懐に潜り込む為の演技でしかなかったのだと、ようやく気付かされる。

自惚れのつもりはないが、今まで色んな敵と相対してきた私にとって、生半可な相手で動揺することなんてない胆力は鍛えられていたつもりだ。

だが、狭間の目を見た時、私は不覚にも恐怖を覚えてしまった。

あそこまで人を見下した目を持つ人間を、私は初めて見た。

飄々とした言葉遣いの裏に隠された真意が、まるで見えない。

その姿が、彼女と——篠ノ之束と重なる。

しかし、重傷だと思っていた束の人間否定も、あの男に比べればまだ可愛い方だったんだことを、皮肉にも気付かされる。

幸か不幸か、対戦相手の教員も山田先生もあの眼を見ていなかったようだ。

あんな眼を見てしまえば、最早試験どころではなくなる。

ただでさえ二人目のＩＳ操縦者として注目を集めているのに、これ以上問題が起こすのはマズイ。

『では——始めろ』

一瞬の躊躇いを拭い、始まりの宣言をする。

それと共に狭間は全速力で後方へと推進し、アサルトライフルの弾をばらまく。

一切の躊躇いも見せない逃げの姿勢。動きに淀みもなく、並列操作もお手の物らしい。

牽制で放たれた弾丸は、相手に当たる様子はない。距離が離れば慣性が落ちて弾道も下がる上、砲身のブレが射線を安定させないのだから、当たり前ではある。

それを理解しているからだろう。教員も構わず前進する。

相手を初心者だと判断しての、些か無謀とも言える動き。だが、判断として誤つてはいない。

連射がウリの武装は、単発の威力が軽い。両手持ちガトリングぐらいの重武装なら例外かもしれないが、量産機の拡張領域では、そんなものを装備すれば簡単に埋まってしまう。

それに、汎用性にも劣る武装は量産機のコンセプトを考慮すればあまりにも不格好だ。

「はあく、凄いですね彼。本当に初めてなんでしょか」

「さて、な。だが、動くだけなら適正があればそこまで難しいことではない。見るべきはこれからだ」

感嘆の溜息と共に、山田先生は狭間を評価する。

対して私は、あの眼を見たせいで棘のある評価を下す。

両者の距離は均衡している。

狭間は変わらずライフルを撃ちつつ後退、教員はそれに負けじと同武装で追いながら狭間を迎撃する。

ハイパーセンサーがあるとはいえ、狭間は絶妙な距離感でアリーナの外壁を沿うように、時には頭上を弧の字を描くように飛び回り、位置を切り替えていく。

今の時点で、動きは初心者を超えている。

教員の方も、油断を捨て始めたようで少しずつ狭間の動きを観察し始める。

状況に適應するように、狭間も逃げの姿勢を一旦止め、武装を切り替える。

新たな武装は時限式グレネード。爆発規模はそこそこだが、タイマンで使うには少々使い勝手が悪い。

狭間はあれをどう扱うのか。目をこらし観察する。

お試しと言ったばかりに上空を移動しながら乱雑にばらまいていく。

絨毯爆撃よろしく、空間に爆風が広がっていく。

教員の方もそんなお粗末な爆発に巻き込まれるほど弱くはない。ラファールのシールドを爆風避けにして、的確に避けていく。

だが、それだけでは終わらない。

爆風は視界を奪い、ハイパーセンサーの全方位見渡せる特性を殺す。

教員はIS操縦の熟練者とはいえ、それはあくまでISの性能を活かせるというだけに過ぎない。

機能を封印されれば、後は個人の技量だけが全てとなる。

とはいえ、彼女も伊達にIS学園で教員をやってはいない。この程度の制限、幾度となく体験していない訳がない。

「——あつー！」

山田先生が肝を抜かれたような声を上げる。

それもそうだろう。彼女が水平を描くように揺れる僅かな煙の振動に反応し、ライフを撃ち込んだ先にあつたのは、狭間が使用していたであろうライフフルだった。

予想外の展開に一瞬動きの止まるその姿に、真下から容赦ない迎撃が迫る。

煙を貫くように突き上がる狭間のラファール・リヴァイヴの脚部装甲。見えたのはそれだけだった。

蹴り穿つ、という言葉が相応しい槍の如き蹴り上げが教員のラファールに命中した瞬間、二人を中心に大爆発が起こった。

「な、なんなんですかあ!？」

「——グレネードを足裏に置き、推進力を利用して真上に速度を加えることで固定。その勢いを利用したままグレネードを直接当てた、と言ったところか」

「本当にそんな危険な真似をしたんですか?」

「グレネードはその性質上、時間を置かなければ爆発しない。加えてISを使用しているとはいえ、ただの投擲では速度の減退も著しい上に、遠くまで飛ぶ保証はない。密着させた状態ならば、ダメージも最大限まで与えることが出来る。だが、あのやり方なら確実に命中させることは出来る。諸刃の剣も同然だがな」

「それ以前に、足の裏に置かって器用すぎませんか?普通考えてもやりませんよ、そんなこと」と

「それを平然とやってのけるのが、狭間祐一という男なんだろう」

そんな会話をしていく内に煙は晴れていく。

煙が晴れた先には、満身創痍の教員と、損傷は軽微だがその両手を上に上げている狭

間がいた。

『狭間、どういうつもりだ』

「降参ですよ。武装は使い尽くし、最早戦う手段はゼロ。素人の私がこれ以上の小細工を出来る訳もないですし、完全に私の負けです」

そんな狭間の馬鹿な言葉がアリーナに響く。

何が素人だ、と内心毒づく。

潔い、とある人が見ればそう評価するだろう。

だが、私にはあの男の発言が信じられなかった。

狭間が嘘を吐いていないのであれば、武装がない時点で戦闘の続行は不可能。

実質の彼の敗北だ。

しかし、その気になれば戦うことだけなら幾らでも出来る。

格闘戦でもシールドエネルギーは削れる。通常武装に比べれば威力は劣るが、少なくともエネルギーも残り僅かであるう相手なら、武装なしでも無力化は可能だ。

少なくとも、蹴りと同時にグレネードを着弾させるという自爆技を繰り出してまで敵に迫った男の態度とは思えない。

私には狭間の降参の態度が、背後から牙を剥きだしにする蛇にしか見えない。

だから、私は素直に狭間の言葉を肯定することにした。

これ以上の続行を許可すれば、どんな奇行を持つて相手を躰るのか想像も出来ない。——思えば、それこそ奴の思惑通りだったのだろうと、浅慮な自分を後々叱責することになるうとは、今は考える暇さえなかった。

『……そうか。確かに状況を見れば戦闘続行が不可能という意味では、お前の負けだ。それにこれは試験ということもある。勝敗に拘る条件でもないし、これ以上は戦う意味はないだろう。よって、戦闘はこれにて終了とする』

私の宣言によつて、この小さな大波乱は幕を閉じる。

ピットに入り消えゆく狭間の姿を見届けた後、私は即座に部屋を出ようとする。

「山田先生、後のことは頼みます」

「え？ 後の事って、事後処理全部ですか？」

「全部でなくてもいい。今すぐにやらないといけない案件だけでも処理して欲しい。私はやる事が出来た」

「は、はあ……」

それだけ言い残し、私は足早に廊下を歩く。

スーツの襟を正し、同時に微細に揺れる心も引き締める。

向かう先は、狭間祐一のいる待機室。

まずは、奴の本質を直接見極めることが第一だ。

「何を考えているかは知らんが、お前の思い通りにはさせんぞ、狭間祐一」

第一話

し、死ぬかと思いました。

シールドバリアーや絶対防御御といったものがあるのは知っていましたが、それとこれとは別。

いきなり渡された防弾チョッキを尻目に「それ着て銃弾受けてみる」とか言われて、性能面を心配しない人間がいますか？

他人が幾ら安全だと豪語した代物でも、それを保証するのは自分自身であることに代わりはないのに、何をどうしてそこまで自信を持って言えるのか理解に苦しみます。

それと、あの時大見得切ってはいましたが、あんなのただの虚勢ですよ。

言うなれば、ISを操縦できることから気分が高揚していたことと、ちつぽけな男のプライドが刺激されただけで、始まる前は負けること前提で適当にやろうと思ったんですが……いやあ、武器の切り替えとか空を飛ぶ感覚とか、面白いのなんのつて。

倉持技術研究所に就職したい、なんて思っているのだから、当然ロボットが好きだ。そうでなくてはありえないのですよ。

ましてや一生そんな機会が訪れることはないだろうと思っていたISの操縦が出来

るようになったのです。テンションが上がらない方が無理というものですよ。

試験の方は、とにかくひたすら逃げの一手だった。

相手は熟練者。まともに戦えるなんて最初から思っていない。

だから、闇雲にアサルトライフルを撃ちまくり、動きに馴れることに全力を尽くしていた。

当然、そんな稚拙な弾は相手に当たるはずもなく、悪戯に弾ばかりが消費されていく。そんなこんなで弾も残り僅かとなり、武装もグレネードぐらいしかなくなったので、上から下へと適当に投げていく。

その辺りは何も考えていない訳ではなく、一箇所に纏めても当たる保証がない上に、爆風で視界が塞がれば相手の動きを封じられるぐらいは出来ると考えた結果である。

実際、その考えは上手い具合に嵌った。

しかし、それだけ。

好機と見た私は、残り少ないアサルトライフルの弾を全部当てるつもりで接近しながら武器切り替えをしたが、誤ってライフルを手から滑らせてしまう。

当然、自由落下の法則に従って上から下に落ちていくライフル。

それを慌てて回収するべく追いかけるが、それを正確に打ち抜く教員。

絶望した！ここぞという時にポカをする自分と、慈悲なくミスを加速させる教員に絶

望した！

そんなやることなすこと深みに嵌っていく私だが、今度は勢い余った機体を制御するのに必死になっていた。

何とか体勢を落ち着かせた時、教員の足下を見上げる立ち位置にあった。

ライフルもグレネードもなし。実質の敗北だが、こんな終わり方は御免である。

せめて一矢報いると意気込み、隙だらけの身体に向けてP I Cを全力で稼働させ、蹴りを叩き込もうとしたのですが……インパクトの瞬間大爆発が起こった。

今にして思えば、起爆していないグレネードが偶然足に当たって、そのまま勢いに乗ってグレネードを運んでしまったのだろう。

だからといって、それが決め手になるということはなく、武装もなく万策尽きたことで降参。何とも情けなく締まらない終わりになった。

最後まで足掻きに足掻く、なんてやっても見苦しいだけだ。アナウンスの人も勝利が評価の条件ではないと言っていたし、無理をする必要はない。

最近は運動なんて授業の中ではかする機会がなかった為か、汗で一張羅が大変なことになっている。

気持ち悪い感覚を文字通り脱ぎ捨てようとした時、待機室の入り口が開く。

そこに立っていたのは、カッチリとしたレディーススーツを完璧に着こなしている、

目元がキツイ女性だった。

そして、その姿に私は見覚えがあった。

「まずは名乗ろう。私は織斑千冬、聞いたことぐらいはあるだろう」

「知っていますよ。第1回 I S 世界大会”モンド・グロッソ”優勝者であり、ブリュンヒルデの名を持つ世界最強の I S 操縦者。初の男性 I S 操縦者である織斑一夏の姉であり、そして——いや、何でもありません」

そこまで言い、口を紡ぐ。

危ない危ない。まさか本人の前で「女が抱かれないと思う女性世界一位」の非公式記録保持者だと言うことは言える訳がない。

先程までの高揚した気分の残滓が残っているらしい。すぐに修正しないと、いつまた変なことを言い出すか分からない。

ただでさえ知り合いに「お前がテンション上がるとまるで別人だ」と言われるぐらいはつちやけているという意見を貰っているのですから。

意識してはいるが、その時の自分を未だに客観的に確認出来ていない。

だからといって、録音してまで恥を知りたいとも思わないので、実際の所分かっているいままだつたりする。

「……何を言いかけたかは知らんが、まずはご苦労とだけ言わせてもらおう」

「恐縮です」

「早速だが、本題に入る。先程お前は素人だと明言していたが、お前の動きは素人とは思えない洗練されたものだった。本当に操縦未経験なのか？」

「本当ですよ。ブリュンヒルデの眼鏡に適っていたようですが、私はただ無我夢中でやっていただけで、偶然の産物でしかありませんよ」

実際、あの試合は断片的にしか記憶に残っていないぐらい必死にやっていた。

視野が広いのは自覚していますが、そんな私がここまで曖昧な記憶しか残っていないということは、つまりそういうことなのでしょう。

「じゃあ、次の質問だ。——お前は、その力を以て何を為そうとしている？ 虚偽の一切は認めない、答えろ」

有無を言わせない迫力を出しながら、そんな質問をし出す。

「何ですかこれ。まさか説明されてはいないけど、第二の試験だとも言えるのだろうか。」

「なら、素直に答えるしか道はないだろう。」

「織斑一夏」

「——ッ」

「彼は素晴らしい。私の理想を実現する為の、素晴らしい素質を持っている。私はただ、

そんな彼の背を後押ししたいだけですよ。とはいえ、私が何もせずとも、勝手に頂に登ることは運命付けられていると思えますがね」

「素質だと?」

「織斑千冬の弟であり、その繋がりはあのISの始祖である篠ノ之東にまで至る。更にそこに加えられた、初のIS操縦者という肩書き。出来すぎていると言っても過言ではない経歴を持つ彼は、まさに未来永劫語り継がれる英雄。二番目であり、深みのある経歴を持たない私などとは、最早比べるべくもない。違いますか?」

「……だから、何だというのだ」

「二度答えるようなことではありませんよ。ただの、ちっぽけな願望です。ただ、自分以外の誰かが手を入れるか自分がその役目を担うか、その違いしかありません」

「お前には、何が見えているというのだ」

「何も見えてなどいませんよ。私はただ、自分のやりたいことをするだけです」
疲労困憊で頭も回らなくなってきた。

織斑さんには悪いが、そろそろお暇させてもらおう。

「待て」

織斑さんの横を通り過ぎようとした時、呼び止められる。

「お前の思惑は理解出来ん、が——もし一夏を脅かすような真似をしてみろ。私が全力

を以て、叩き潰す」

有無を言わせぬ迫力が、背中に刺さる。

正直、振り返るとか無理です。絶対般若みたいな表情してますって。

そうか……一連の質問の意味、ようやく理解出来ました。

それは——織斑千冬が病的なまでのブラコンだったということです。

織斑一夏に接触することを大々的に宣言してしまったからには、あの鋭い眼光にロツクオンされたのは言うに及ばず。

IS学園は女子が9・9割占める、肩身の狭い空間だ。個人としては、そう言った理想実現の要としてだけでなく、純粹に数少ない男の友人として接したかったというのもあるんですが……これは前途多難ですね。

「怖いことを言わないで下さい。それに、これから私達は教師と生徒の間柄になるのですから、体罰は関心しませんよ?」

「安心しろ。IS学園は軍人候補生の育成の場のようなものだ。それぐらいしななければ、後々やっていけない」

「これはこれは、藪蛇でしたか。では、私はこれで失礼させていただきます。これからよろしく願います。織斑先生」

このまま会話を続けていたら、墓穴しか掘らない自信しかない。

これ以上ボロを出したら面倒になりそうなので、そそくさと退散した。あ、着替え置いたままでした……。

あれよあれよという間に、I S 学園に入学する日がやってきました。

事前に配られた資料は舐めるように読みあさり、暇を潰している内に気が付けば残り数日。急いで身支度を済ませる羽目になってしまった。

まあ、それはただの自業自得だから問題ないのですが、他にも知り合いに事情を説明するとか、マスコミらしき人が訪ねてきたりと色々あったのですが、さしたる事もなかったので割愛。

そうして私は、所属する二組の教室にて待機しているのですが……やはり男が珍しいのか、周囲の視線が四方八方から刺さってくる。

針のむしろとはまさにこのこと。こればかりは耐えるしかない。

唯一の救いである織斑一夏は別クラスのようにですし、本格的に孤立していますね。

時間潰しも兼ねて持参してきた参考書を読んでいる内に、担任の先生が入ってきた。

先生の発する力強い雰囲気に応えてか、喧嘩は徐々に収まっていく。

「今日からお前達の担任となる、クーゲル・スピリットファイアだ。ここは学園と銘打つ

てはいるが、本質は軍と同じ戦士を養成する場だ。今までの生温い生活とは一切無縁の生活が始まることを、肝に銘じておけ。私もお前達を鍛える上で、手加減をする気は一切ないから、覚悟しておけ」

精悍とした雰囲気は、どこか織斑千冬を思い起こさせる女性。それが担任となるクーゲル先生への第一印象だった。

その雰囲気、佇まいからしてそうだが、何よりもその整った顔立ちの中で、目元から鼻の間にかけて横に引かれた一本の傷が、彼女の歩んできた道を想起させる。

彼女の発する言葉には、確かな重みがある。

恐らく織斑千冬同様、彼女も軍属だった所を問引かれたのでしょう。

「——キャアアアアアアアアア!!」

突如クラス全体から響き渡る黄色い声。

耳がキーンとするぐらいのそれは、間違ひなくクーゲル先生へ向けられてのものでしよう。

「千冬様に加え、クーゲル様にまで直接お目にかかれる日が来るなんて!」

「公式大会出場経験はないけれど、その実力は千冬様に迫るとさえも言われているクーゲル様に!」

「なんて幸福……もう死んでもいい」

「何故毎年こういう反応をする奴らが現れるんだ……？千冬ならともかく、私が持て囃されるのは違うと思うんだが」

そんな生徒達の発現に、クーゲル先生は渋い顔をする。

しかしそれは不快と言うよりも、困惑に近い表情だった。

色めき立つ雰囲気の中、冷静に周囲を観察する。

自分を除いて三人。この空気に毒されていない人物を発見する。

一人は、肩に掛かる程度のミディアムストレートの金髪を持つ女性。

表情は見えないが、何かを紙に書き留めている。凄い集中力だ。

二人目は、跳ねたショートヘアの似合う茶髪的女性。

健康的な身体と活発そうな表情がよく似合う。自然とクラスの中心になれるタイプだ。

こちらの視線に気付いてか、振り返りにはにこんだ笑顔で小さく手を振ってきたので、同じ動作でそれを返す。

最後は、赤いロングヘアが特徴の女性。

背中しか見えない位置にいるが、背筋をしゃんと伸ばすその姿を見るに、規律とかそういうのに厳しそうな雰囲気を醸し出している。

「これから自己紹介をしてもらう。これから同じ屋根の下に住み、同じ釜の飯を食う者

同士、親睦を含め協調性の何たるかを学ぶ重要な機会だ。今日中にクラス全員の名を覚えるぐらいの気概で真剣に臨め」

そうして、自己紹介が始まる。

始まってすぐ、先程手を振っていた女性が立ち上がる。

「磯村真琴（いそむら まこと）です！ IS 操縦は素人だけど、これから目一杯精進していくから、よろしくお願いします！」

ハキハキとした良い声が響く。

思った通り、快活な子だ。

磯村さんの挨拶が終わり、次は金髪少女の番になる。

「え、えええええと、その、私の名前は近藤沙みや、沙耶って言います。よろしくお願います……」

舌を噛んだ途端真っ赤になる顔と、次第に尻すぼみになっていく声。

近藤沙耶（こんどう さや）さんは極度のあがり症なのだろう。同情はしますが、こればかりはどうしようもない。

寧ろきちんと最後まで続けたことを褒めるべきでしょう。

それにしても、ようやく僅かにだけ見えた顔。どこかで見たような……。

「では——次、狭間」

クーゲル先生に名を呼ばれ、立ち上がる。

誰もが一斉に私を注目する。

「狭間祐一と申します。この度二番目の男性 I S 操縦者選ばれました。皆さんと二三ほど年上になりますが、知識、経験が未熟と言った諸々の事情でこのクラスに配属されました。ですので、年齢差など気にせず気軽に接してくればこちらとしても嬉しいです。これから三年間、よろしくお願いします」

無難な挨拶で手短に済ませる。

近藤さんではないですが、あまり視線馴れしていない身としては、この状況に長々と浸っていたいとは思えない。

そして、注目していた最後の人物である、赤髪の少女の番となる。

「名前は椿麻美（つばき あさみ）と言います。 I S に関しては初心者ですが、日々精進し一人前の I S 乗りとして認められるように努力していく所存です。これから三年間、どうかよろしくお願い致します」

決意表明を織り交ぜた自己紹介は、彼女の人と成りを表しており、予想通りの生真面目タイプのようなだ。

今でこそ I S 学園の制服を着ているが、彼女には間違いなく和服が似合う。現代の大和撫子だ。

そうして、自己紹介は終わり授業に入る。

授業内容は当たり前だが、基礎中の基礎の部分。そもそもISとは？という所から始まるものだった。

事前に知識を取り入れていたこともあり、ついていけないということはなかったが、目新しい発見のない授業内容ということもあつて、惰性で受ける形になつてしまつたのが悔やまれる。

予習もやりすぎは良くないなんて、普通は有り得ない悩みですよ普通なら。それもこれも、勉強感覚で出来ないぐらい面白いISの理論が悪いんです。

「あの一、待つて下さいよー！」

一時限も終わり、織斑一夏に對面しようと席を立つた矢先、呼び止められる。

そこには、磯村真琴がこちらに手を振り、近藤沙耶、椿麻美の二人と隣り合つて近づいてくる姿があつた。

いや、近藤さんは半歩後ろでどこか遠慮した様子だった。

「おや、貴方達は……」

「さつき自己紹介しましたし、分かりますよね？磯村真琴です」

「椿麻美です。そして後ろで隠れてるのが、近藤沙耶。彼女達とは中学の頃からの付き合いなんです」

「は、初めまして」

「では私も……狭間祐一と申します。男性 I S 操縦者としては二番目で、皆さんとは年上になります」

「よろしく、狭間さん」

磯村さんが気さくに挨拶してくれる。

周囲の様子を横目で見る限り、年上という理由からか遠巻きに眺めるだけで女子達は近づこうとはしない。

……いや、年上だという理由だけではここまで扱いが雑なものでしょうか。

自分としてはそうは思っていないませんが、世間的には第二の I S 操縦者という肩書きを持つ私はかなりの貴重な存在である筈。

この場に存在するという異質さを抜きにしても、好奇心が勝るのが人の常というものではないのでしょうか。

……そうだ、ひとつ心当たりがありました。

以前友人——というか千葉さんに言われた言葉「お前のその笑顔、はつきり言つて不気味なんだよ」というもの。

あの時は友人間の他愛のない会話の一端だと思つていましたが……まさか、ガチだったとは。

間違いない。女子の皆さんは私のこの日常化した不気味な笑顔のせいで敬遠されている。

悲しくもあるが、それ以上にそんな私に対して臆することなく近づいてきてくれた三人には、喜びの念を禁じ得ないです。

事実、磯村さんはともかく残りの二人からはどこことなく距離感を感じる。

椿さんは生真面目な性格から、近藤さんは付き添いと考えれば、納得もいく。

これでは、逆に気を遣わせてしまつて申し訳ないとさえ思えてくる。

しかし、ここで謝るのは逆に失礼というもの。このままの空気を維持して、彼女達の好意を無碍にしないようにしなければ。

「いやあ、それにしても分かつていたとはいえ女子の方ばかりで萎縮してしまいますよ」
「またまた狭間さんからしたらハーレムじゃないですか」

磯村さんがニヤニヤ笑顔を向けてくる。

「いえいえ、そんな畏れ多い。私はIS操縦が出来るとはいえ、一番手であの織斑千冬さんの弟である一夏さんとはネームバリューも価値もありません。そう言った要素がなければ私など一般人Aのようなものです」

「あまりご自身を卑下するのは止めた方がいいと思います。嘘でもその言葉の影響を受けて、考えだけでなく自分自身がそのような駄目なイメージに影響されてしまいます

よ

ぴしやりと私の言動を諫める椿さん。

「おやおや、手厳しい。ですが、その諫言も立場を思えばとても有り難いものです」

「いえ、こちらこそ会って間もないのに偉そうなことを」

「いいんですよ。年齢だけで言えば、私より目上なのは先生方くらいのもんですから。そういった枠組みを除いて遠慮無い発言をしてくれる人は貴重ですよ」

「……それ、褒めてますか？」

「当たり前じゃないですか」

「納得できませんが……まあ、いいでしょう。それよりノエル、人見知りはいいけどそんなだとこれからやっていけないわよ。中学の頃とは違うんだから」

「う、うん……」

磯村さんにノエル、と呼ばれて近藤さんが反応する。

「ノエル？近藤さんではないのですか？」

「あー、そうだった。ノエルって言うのはあだ名。ノエルンが使ってるペンネームなんですよ」

「ちよ、ちよつとマコト……」

「ペンネームということは、小説家なんですか？」

「いえ、ノエルののはポエ——」

「うわああああああ!! やめて、それを言うのはやめて!」

磯村さんが何か言い掛けたところを、近藤さんが必死にその口を両手で塞ぐ。

「狭間さん、気にしないで下さいね! 何でも、何でもないですから!」

「は、はあ」

近藤さんの必死な形相を前に、反射的に頷く。

余程知られたくないことなのでしょうけど、それがあだ名として通じている時点で、最早手遅れに近い気がしなくもないですが……。

「ぶはっ——でも気に入ってるんですよ? ノエルって名前」

「そうだけど、それとこれとは別!」

「二人とも、それぐらいにしなさい。周りから変な目で見られているわよ」

椿さんの言うとおおり、クラスメイトだけでなく、廊下からも好奇の視線が集中する有様であった。

近藤さんは顔を真っ赤にして俯き、磯村さんはどこかバツの悪そうな笑顔を見せる。

入学早々、このような個性的な三人と知り合いになれたのは僥倖ですね。

最悪、人付き合いは最低限のみを覚悟していたのですが、これなら周りから白い眼で見られずに済みます。

織斑一夏との接触は先延ばしになってしまいました。思えば間を置かないとあちらは同年代ということ。で気兼ねない交流をしているでしょうし、せめて放課後にしましうかね。

それまで、この三人と親睦を深めましょう。この出逢いに感謝しながら。

第二話

放課後になると、私への視線も比較的落ち着き、ようやくある程度の自由が許された状態となった。

私、というよりも織斑君がです。

風の噂では、やはりというべきか彼は女子にモテモテらしく、何処かに行けば誰かが必ず後をつけるという、客観的に面白い構図が出来上がっていたらしい。

それと、もうひとつの噂。イギリスの代表候補生であるセシリア・オルコットさんと織斑一夏が何の経緯か決闘するということになったらしい。

願ったり叶ったりと言うべきか。時期尚早と言うべきか。

望むシチュエーションではあるが、素人以前の知識と技術しか持っていない彼には、些か荷が勝つ展開だ。

しかし、彼の境遇を思えばそれぐらいの逆境、今の内に経験するに越したことはない。勝とうが負けようが、彼のネームバリューに甚大な被害は及ぼさないだろう。

だが、女尊男卑の意識は更に根強くなる。

『ISを使えようとも、所詮は男。女性優位は揺るがない』と思う人間は間違いないと出て

くる。

女尊男卑が間違っているとか、ならその逆はいいのかとか、そういう問題ではない。

彼は、世界を揺るがす可能性を担った、言わば“主人公”だ。

そんな彼が舐められるようなことがあつてはならない。

自分勝手なエゴだと自覚してはいる。だが、そういうものだろう。

だから私は世間の風潮から偉ぶる女子に反感を抱いたりはしないし、同時にその現状に甘んじたいとも思わない。

自分にとっての理想を体現する覚悟があるなら、それを貫くのは当然。

現状が満足ならそれでいいし、そうじゃないから私は行動する。ただそれだけでしかない。

磯村さん達は今別件でこの場にはいない。

彼女達も初日ということもあり、色々やるべきことがあるのだろう。

ならば、このチャンス逃がす理由はない。

とはいえ、それは織斑君も例外ではない。彼にもやる事が色々あることだろうし、今日を逃せば実質後はない。

「すみません、こちらに織斑一夏君はいらっしゃいますか？」

「え……あ、はい！」

一組の前に立っていた女子に織斑君の所在を聞き、クラスの中を覗き見る。

そこには黒髪ポニーテールの少女に手を引かれ、今まさにこちら側の入り口から出てこようとする織斑一夏の姿があつた。

「あ……」

目と目が合う。

その表情は、まさに「そういうえばそうだった」という感情がありありと見て取れた。

「貴方は……」

ポニーテールの少女が、訝しげな視線を向けてくる。

「初めまして。私は狭間祐一と申します。一応IS男性操縦者の二人目と言うことで、同じ境遇の一夏君とは是非ともお会いしたく思っております」

「あ、は、初めまして！ えっと、隣にいるのが俺の幼馴染で篠ノ之箒って言います」
崩していた態勢を引き締め、握手をする。

年上の男子生徒が入学したことは広まっているのだろう。当たり前のように敬語である。

それにしても、篠ノ之箒か。

篠ノ之束に妹がいることは知っていたが、まさかこのような出会いをするとは。

「よろしく、篠ノ之箒さん」

「あ、はい。こちらこそよろしくお願ひします」

堂に入った礼をする姿は、今は古き大和撫子を彷彿とさせる。

和、という文字がここまで似合う女性には、このコンクリートジャングル化が進んだ現代においてまさに重要文化財といえよう。

惜しむらくは、箒さんがI S学園の制服を着ているせいで、その雅が半減しているということだろう。

「それにしても、お二人ともどちらへ行かれようとしていたのです？ 箒さんに至ってはどこか気が逸っている印象さえ受けましたが」

「えっと、それはですね……」

「彼を——一夏を来るべき日に備えて鍛える為に、剣道部で道場を借りようとしていました」

「道場を？ なんでまたそのような」

「クラス代表戦に出場する者を選抜するにあたって、セシリア・オルコットというイギリス代表候補生と一夏がひと悶着ありまして、一週間後に一对一の模擬戦をすることになつたんです。一夏は剣道を以前に嗜んでいたのです、I Sの訓練機を借りるのにも手続きがあるということも鑑みても優先的にそちらの勘を取り戻した方が、確実な能力の底上げに繋がると判断しました」

箒さんの懇切丁寧な説明を聞きながら、プランを組み立てていく。

ネットだけでは調べられない小さい情報だが、それは間違いなく重要なファクターとなる。

剣道にしたってそう。経験があるかないかだけでも知れたのは、一週間という期限を思えば僥倖というに他ならない。

「俺としては純粹にISの動きに慣れないと剣道の訓練も意味ないんじゃない、と思ってるんですけど……言っても聞かないんですよ」

「そもそもお前が剣道をやめてさえないなければ、問題になる点がひとつ減っていたんだ。足りないものだらけの中、経験のある方を先に攻めないでどうする！」

「まあまあ、落ち着いて」

雰囲気ヒートアップし始めそうだったので、慌てて間に入る。

「お二人の意見ですが、対立してしまうのはどちらも正しいからです。ISはパワード・スーツという形式から、肉体の精彩さが地力の底上げに繋がるのは確かですが、ISはただ装備すればすぐに手足のように動かせる代物ではありません。空を飛ぶ感覚は勿論、ハイパーセンサーによる思考の加速等は、実際に慣れてみないことには戸惑うものでしょうし、どちらかを一点に絞ればいいというものではないです。とは言え、期限付きということですので、今回は割り切ってどちらかに絞るとするのは選択として強ち間

違いではないと思いますよ」

「随分とお詳しいのですね」

「これでも倉持技術研究所に就職希望でしたので、相応の知識は以前より身に付けていましたからね。とはいえ、知識と経験のあるなしではだいぶ変わりますが」

「倉持技研つて、日本のＩＳ研究組織ですよ。そんなところに就職するつて、相当凄じやないですか！」

「いえいえ、好きこそ物の上手なれという奴ですよ。まあ、何の間違いかＩＳを動かせるようになつてしまつた以上、その未来も水泡に帰したも同然ですが」

「それ以上に名譽な立場になつたのだから、誇るべきだと思います」

「そこは人それぞれでしょうね。確かに素晴らしいことだとは思いますが、今のＩＳは所詮争いの道具でしかないのです。スポーツ競技と銘打つてはいますが、そんな建前を素直に捉えるほど若くはありませんので」

「若くないつて……三年ぐらいじゃないですか」

「三年というのは、馬鹿に出来ない差ですよ。小学六年生が、高校受験に悩み始めるぐらいの年月の経過があるのですから。……それと、そろそろ敬語はやめてもらえたら嬉しいのですが。何というか、壁を感じるといいますか」

「それを言うなら、年長者である貴方がそうあるべきだと思いますが……」

箒さんが白い目で私を見てくる。

言葉こそ丁寧だけど、意外と明け透けない性格らしい。先ほどの織斑君とのやり取りでなんとなく片鱗は見えていたが。

「これは性分みたいなものにして……」

「まあ、狭間さんがそう言うなら、俺はそうするよ。やっぱり二人だけの男だつていうのに、よそよそしいのは良くないしな」

「ありがとうございます。で、篠ノ之さんは」

「箒で構いませんよ。それと敬語の件は、流石に今すぐには……」

「そうですね……いえ、強要はできませんよね」

そんなことを話していると、背後から声が掛かる。

「織斑君、それに篠ノ之さんと狭間君」

「山田先生、どうしたんですか?」

山田先生、と呼ばれた童顔と眼鏡が特徴の教師は資料片手に説明を始める。

「えっと、織斑君のこれから住む部屋なんですけど、当初は同じ男性操縦者である狭間君となつていたのですが、予定を変更して篠ノ之さんとの同部屋になりました」

「なつ……」

どちらともなく出た言葉は、まさに驚愕の一言に尽きるもの。

それも当然。自分さえその結果は予想していなかった。

「えっと、山田先生でしたか。如何にしてそのような流れになったのですか？」

「あ、はい。実は私も詳細は聞かされていないのですが、織斑先生がそう伝えておいて欲しいと言っていたものですから」

「千冬姉が？」

「私としても流石にどうかと思いますので、後日改めてどうにか出来ないか考えるつもりです。ですが、しばらくは篠ノ之さんと同居という形になってしまいます」

「そうか……箒はどうだ？俺はこうなった以上仕方ないって割り切るけど、箒が嫌だつて言うなら——」

「いや、大丈夫だ。うん、何の問題もないぞ」

織斑君が言い終わる前に承諾の意思を見せる箒さん。

幼馴染ということ、下手に知らない女子と同居するよりは気安いと互いに考えているのでしょう。

「箒がそれでいいならいいんだけど……」

「因みに、私の方はどうなったんでしょう」

「えっと、狭間君の方は織斑先生が手をまわしてくれたりらしく、相手側の子とも話し合いは済んでいるらしいです」

「その人の名前は？」

「えっと、そこまでは……。別クラスのことだったので、てつきりクーゲル先生が事前に伝えていたものとばかり」

「いえ、気にしないでください。相手側に伝わってさえいるのであれば、後は私の問題です」

「その同居人、私だよ」

間延びした幼い声と共に、山田先生の背後から影が躍り出る。

「えっと、貴方は」

「布仏本音だよ」

「布仏さん、ですか。承諾したとのことですが、本当によろしいのですか？今更なことではありますが、倫理的にはよろしくないと思うのですが」

「別に大丈夫だよ。それとも、私にえっちなことしたいの？」

「えっ……!?!」

箒さんが突拍子もない台詞に絶句するが、スルーする。

「いえいえ、これでも女性には紳士的であれと心掛けていますので、そんなことは決して」

「なら大丈夫だよ。じゃあ、決定」

エヘエへと笑顔を絶やさないう少女は、独自のテンションであれよあれよと話を進めていく。

何というか、本能的に彼女には敵わないと思わせる雰囲気を持っていた。

「……えつと、そつちの決め事は終わったのか？」

「うん。オリムーとしののんとユウくんは何の話してたの？」

「オリムー……」

「しののん、つて私か？」

「んん、モツピーの方がよかった？」

「いや、それは不味い気がする。いろんな意味で」

「ユウくんはどう？」

「いえ、何と申しますか……そういう風に呼ばれたことがなかったもので、凄く嬉しいです」

呼ばれるとしても苗字読みがせいぜいで、あだ名どころか名前読みさえされたことはない。

一番付き合いの長い身内以外の知人である千葉さんにさえ、狭間呼ばわりなものですから、たまに「あれ、私たち友達ですよね？」と疑問を持つことも。

「なら、私がユウくんの初めてをもらったってことになるのかな？」

「そうですね、恥ずかしながら。この年になってまだ、というのも含めて」

「そっか。なんだか私も嬉しいな」

「良かったな、狭間さん」

「ええ」

三人で笑いあう。

そんな朗らかな雰囲気を他所に、それ以外の二人はどこかやきもきした様子でこちらを見ている。

「どうしました?」

「狭間君、布仏さん、わざとやっていますか?」

「何が?」

「はて、何がでしょう」

「いや……いいです。それよりも、互いに納得したのであれば、実家の方から荷物が届いていますのでそれを運んでもらえますか?」

「はい、分かりました。織斑君、箒さん。後でお二人の部屋に窺っても?話の続きをした
いので」

「俺はいいけど、箒は?」

「私も構わないです」

「私も一緒に行つていい?」

布仏さんがそう尋ねる。

「そんな面白い話をするわけではありませんよ?」

「いゝよゝ」

「だ、そうですが」

「ああ、歓迎するよ」

そうして一度別れ、布仏さんと共に部屋に荷造りをしに向かった。

IS学園の生徒会室、窓際に置かれた机に座る水色の髪の少女と、その隣に立つ眼鏡の少女。

前者は生徒会長である更識楯無で、後者は生徒会会計の布仏虚。

互いに複雑な心境を内包しながら、先に口を開いたのは楯無の方だった。

「心配する必要はないわよ、多分ね」

「しかし、お嬢様……」

「あの子は——布仏本音は、その名の通り人心掌握に長けた能力を持つ子。独特の雰囲気、話術。相手の懐に容易く入り込み信用を得る、そのように一構成されている

「……彼女なら、ね」

「……お嬢様の持つ液体を意のままに操れる力のように、ですか」

「貴方の気配を極限まで絶つことのできる力のように、よ」

沈黙が再び部屋中を支配する。

楯無、布仏にはある特殊な能力——否、呪いと呼ぶべきものが備わっていた。

いつから始まったのか、それは人体の遺伝子を任意に変質させてき、その血を持つ者との交配で生まれた子供も、例外なくその呪いを受け継いでいく。

時にはオリンピック選手を超える身体能力を、時にはコンピュータを錯覚させる演算能力を有して生まれてくる。

そんな普通を超越した力を、彼女達は《ドライブ》と呼んでいる。

「狭間祐一の監視及び情報収集、か。織斑先生が頭を下げてまで何を頼んできたかと思えば、そんなことかと思ひもしたけど……だからこそ、解せない」

「プロフィールを見た限りでは、ISの知識が一般人より優れていて、開発にも携わったことがあることぐらいは一般人と大差ないですけど、如何に第二の男性操縦者とはいえあの人があそこまでの理由にはなりません」

「不気味ね。織斑先生と私達では、見ている世界が違うかのようで、どっちが正しいのかがまるで分からない」

「真実を見極める為に、妹をけしかけたのですから、どちらにせよ後は時間の問題だとは思いますが、けど……」

虚が渋い表情で言葉を濁す。

そこからは、妹の本音に対しての深い愛情が感じ取れる。

「危険かもしれない、ってことでしょ？もし、狭間祐一が先生の言うような”底の知れない悪性に満ちた存在”だというなら、ISが使える以外に戦闘手段を持ち合わせていないあの子が始末されてしまうと」

「は？」

「心配するな、とは言わないけど、あつちだつてその気があつたとしてそう簡単には動けない筈よ。最新鋭の技術をふんだんに詰め込んだこのIS学園は、セキュリティもかなり力を入れているわ。そりゃあ、内側の方が外側より劣るかもしれないけど、それでも一般の水準を遥かに上回っているわ。そんなことも予想できない馬鹿なら、仮に行動したとしてもそれまで。そうでなければ一日も経ってないこの状況で行動する筈がないってこと」

「そんな楽観的に考えられれば、どんなに楽か……」

「気にしすぎは逆に気取られるから、気楽なぐらいが丁度いいのよ」

虚にはそう言ったが、楯無自身そこまで楽観している訳ではない。

あくまで虚を安心させる為の方便であつて、彼女の苦勞は自分が肩代わりすればいいと考えている。

彼女の妹を無理言つて今回の任務にあてがつたのだから、それぐらゐは当然だと。

それに、邪険にしてはいるが、本音は楯無の妹である更識簪のメイドとして付き従つており、浅からぬ関係を持っている。もし彼女に何かあれば、間違いなく妹の精神衛生上よろしくない事態になるだろう。

そんなこと、妹大好きと言つて憚らない楯無がさせるはずがなかつた。

「とにかく、しばらくは様子見。狭間君に過度な視線を送るのはNG。情報は基本的に本音から得たもので判断する、いいわね？」

「……はい、分かりました」

渋々納得、と言つた様子でこの話題は終わりをさせる。

これからの学園生活、果たして平穩無事に終わるのか、はたまた波乱の幕開けとなるのか。

未来の操縦桿を握っているのは、間違いなくIS男性操縦者であるあの二人だ。

不謹慎だと自覚しながら、あの二人が紡ぐであろう普通ではない未来に、楯無は思いを馳せた。

第三話

狭間さん達と別れ、しばらくして俺達の部屋で再び集まる。

宣言通り布仏さんと共に現れ、箒を含めた四人で部屋の中心にあるテーブルを囲うように座っている。

「さて、先程の話の続きですが——」

狭間さんがひとつ咳払いをし、口火を切るも、ふと思いついたことを質問する。

「その前に、いいか？一組の代表候補生の話はさっきの通りだけど、狭間さんの方はどうなんだ？」

「ああ、そういえば話していませんでしたね。こちらの代表候補生は、専用機持ちが現在誰もいないということで、これからの授業の中で能力を見極めた上で判断することです。少なくとも、男性だからという理由で立候補されたりとかはしていませんね」

「羨ましいなあ、普通はそういうのが当たり前だと思うぞ。代表なんだから、そんな看板やっつけてばいいって訳でもないんだし、強い奴がやるのが普通だろ？千冬姉も何だっつてあんな決め方したんだか」

事前他薦を問わない多数決で決める、なんて曲がりなりにも数少ないIS操縦者の代

表を決める重要なことに対してやる決め方じゃない。

それとも、千冬姉からすればどنگりの背比べでしかないのか。いや、分かるけど、それは間違ってるだろうに。

「過去のことをうじうじ言うのはもうやめろ。過ぎたことなんだから、これからどうすべきかを考えるのが一番建設的だ」

「そうだよオリム」。心配しなくても、私達も協力するから」

柔らかい布仏さんの笑顔が沁みる。

箒がズバズバ言ってくるせいもあって、こういう人畜無害そうな雰囲気は素晴らしく貴重だ。

思えば、俺の周囲にいた女性はこんなタイプの子はいなかったなあ。だから余計に恋しくなるのかもしれない。

「布仏さん、ありがとう」

「でも実際どうしよう？ セツシーは専用機持ちだから、オリムなんかよりも沢山練習してると思うし」

「そうだな……。実際、一夏が次の月曜日までに代表候補生を打倒できるかと言えば、とても出来るとは思えない。というか無理だ」

「おいおい、箒……。辛辣すぎだろ」

「戦いというのは、根性論でどうにかるほど甘くはない。ましてやお前は最低限の能力さえ持つていない状況なんだぞ。喧嘩のようにテレフォンパンチが偶然当たって勝つ、なんて甘い展開を期待しているなら、いつそのうちに敗北を宣言してこい。恥を晒すだけだ」

「くう……………」

言い返したいが、言い返せない。

家事に専念する為とはいえ、剣道から離れていた自分が戦いの何たるかを言える訳もなく。

ただ、俺は現状が如何に逼迫したものなのかを再確認することしかできないでいた。

「しののん、ちよつと言い過ぎじゃないかな」

「そんなことはない。一夏の為を思えば、これぐらい当たり前の叱咤だ」

「ねえ、ユウくんも何か言つて——ユウくん？」

ふと布仏さんが言葉を止める。

気付くと、狭間さんが何か携帯の機械を弄っている。

それは、学園で入学時に配られたPDAだった。

「いえ、ちよつと調べものをです。——はい、皆さんの方にも送りましたよ」

三人のPDAから、データ送信がされた音声が鳴る。

手に取ってデータを閲覧してみる。

「うわ……なんだこれ」

そこには、セシリアの専用機の情報が事細かに書かれていた。

ISの性質、カタログスペック、そこから繰り出されるであろう攻撃の考察及び対策例などといった、狭間さんの見解も含めて書かれたそれは、今さつき調べたというにはあまりにも精密すぎた。

「えっと、セシリア・オルコット、IS適正：A、専用機『ブルーティアーズ』、第三世代のISで、射撃武装に特化した主に『BT兵器』の試験運用を目的に開発されたと思われる……。ねえ、こんな情報どこから手に入れたの？」

尤もな疑問を、布仏さんが代弁してくれる。

「別に難しいことは何も。このPDAにはIS関係の情報がある程度開示されています。専用機ともなれば、各国からも宣伝をする意味合いも含めてカタログスペック程度なら問題なく閲覧することは出来ます。流石に全部が全部分かるなんてことはありませんが、主武装さえ分かるだけでも大きく違いますよ」

「あれ、そうだったっけ……？」

そう呟く布仏さんの声は、誰に届くことはなかった。

「スターライトmkIII、巨大な砲門が特徴なBTエネルギーライフル、ブルー・ティ

アーズ、ISと同名のBT兵器、ですか……見た限りでは完全に遠距離特化型ですね」「というよりも、遠距離特化型で間違いないでしょうね。ビットの試験運用を目的としている機体なら、それを最大限に活かせる性能で作ってあるのは当たり前です。この武装で実は万能機だと言われても、使う側が困るレベルですよ」

確かに、スナイパーライフルのようなスコップ付のライフルとビットなら、そう考えるのが自然だよな。

「ということは、セシリアの弱点は接近戦ってことか」

「7割正解、ですかね。如何に遠距離型とはいえ、懐に入られた際の対策をしていないとは思えません。対策込みで試験機と見て良いでしょう」

「対策か。ロボットゲームとかなら、副武装でハンドピストルとかビームサーベルとかがあるけど」

「強ち間違いではないかもしれませんがね。拡張領域に使う容量は、主武装の質が高ければ高いほど少なくなりますからね。コストパフォーマンスを思えば、そのぐらいが打倒でしょう」

「少なくとも、絶対的脅威になりえる武装はないと考えれば、油断さえしなければ懐に潜り込むこと自体は戦略としては有効と判断していいのでしょうか」

「ええ。とはいえ、その懐に潜り込む部分が問題なんですがね」

そう。如何に接近戦が有効打になりえると言っても、その結果を出す俺自身の能力が足りていなければ、その段階に移行することさえできないのだ。

「やっぱり、オリムーの技量をどうにかするのが最優先事項になるのかな」

「行き着くところはそこになりますね。後は作戦を練ることぐらいですか」

「作戦、ですか。具体的な内容は思いついているのですか？」

「PDAの内容を踏まえた上で説明しますと、彼我の戦力差を埋めるにはあまりに時間がありません。やれることは、少しでもI Sの動きに慣れるか、剣道を通じて戦いの勘を取り戻すか、奇策を練るぐらいですかね。後は、神頼みぐらいですが、それは本当に最後の手段になります」

「ユウくんは作戦を練ることを重視してる感じなのかな？」

「身体の動かし方と作戦を練ることは別枠です。どちらも大事ですが、この場は作戦を練ることぐらいしかできないから、というだけですよ」

再びPDAを弄り、データが転送される。

内容は、セシリアへの対策が分かりやすく書かれているものだった。

「事前に得た知識だけで不格好な内容になりますが、セシリアさんは典型的な女尊男卑を尊ぶ人種のようなです。そこを突きます」

「俺が男だから、油断して掛かってくるってことか？」

「ほぼ間違いなく。憶測で掛かるのは逆にこちらの動きに制約を掛けることに繋がってしまいますが、ここに来る道中の噂話だけでも、セシリアさんがどういう人かなんとなく理解しましたから、この考えはほぼ通ると見て良いでしょう。同じ組である布仏さんの話も聞けましたし、確証も得てます」

「セツシーの偉そうな態度も、それを裏付けする実力あつてのことだから、時代が時代だし仕方ないことなんじゃないかな」

他人事のようにしみじみ言う布仏さんだが、彼女は女尊男卑に関してはどう考えているんだろう。

「布仏さんは今の女尊男卑の風潮に関して、何か思うところとかあるのか？」

「うーん、やっぱりISが女性にしか使えないからって男の人が昔に培ってきた努力とかを否定するのはおかしいとは思うね。労働の基盤は男性だし、ISがなければ男性の方が肉体的には丈夫なんだから、良い所線引きをちゃんとするぐらいが打倒だと思うな。線引きっていうのは、役割分担のことね。仕事に貴賤なし、一人一人がやれることをやって初めて国が機能するんだから、私は今の価値観は間違つてると思うね」

「男はひとつのことに集中するのが得意で、女は複数の物事を同時に考えるのが得意らしいですし、極端な話ISの操縦だつてそういうった性別による得手不得手の違いのひとつでしかありません。そのISの操縦にしても、適正という形で更なる格付けが為され

「ていることから、あくまでISを扱えるというのは土台の有無の差でしかないのです」
「まあ、ISを操縦できれば世界を牛耳れるかっていえば、そうとは思えないしな。確かに現存の兵器を簡単に打倒できる能力はあるのかもしれないけど、それだって使う人次第だもんな」

「その通りです。どうせ戦争が起こったとすれば、使用されるのがISになるだけで、根本的な部分は何も変わっていません。寧ろ、人間という器なくして動かせないISは、兵器という枠組みで考えれば不便極まりない代物です。前時代でも、戦争は男がするものでした。その立場が逆転して、果たして同じ働きを求められるかと言えば、何とも言えませぬね」

「代表候補生とかならまだしも、戦争というものを直に知らない私たちが、いざ戦いの場に駆り出されて満足に動けるとは嘘でも断言できないな。私だつて、剣道の経験はあるがそれはあくまで試合という枠組みでのやり取りでしかないしな」

「どんな話題が発展していつてるが、酷いレベルで脱線してないか？これ。だけで、狭間が手を叩いて話を軌道修正してくれて、事なきを得た。」

「兎に角、全世界でそういった風潮が広がっている以上、セシリアさんの態度が演技だとは思えません。間違いなく最初は油断するでしょう。しかし、なんであれ代表候補生ですから、そこからの軌道修正も早い筈です。なので、もしその弱点を突くとすれば、一

度きり。しかも短期決戦が前提となります」

「難易度高いな……」

「前提としての実力差は如何ともし難いからね。セツシーだつてオリムが頑張っている間に強くなっているかもしれないし、実力差を埋めて真つ向勝負を挑む方が大変だと思うよ？」

厳しい評価を下されるも、それが正当なものだと分かっている分、悔しさも反抗心も湧きあがらない。

問題は、これからどうするべきかだ。

「虚を突くにしても、量産機の武装でそんなことが出来るだろうか。セシリアは代表候補生なんだから、量産機となんて幾らでも戦闘経験がある筈だ。期待性能だつて熟知しているもおかしくはない」

「それなんですよねえ……。個人で所有しているものでもないですし、武装の指定も難しいでしょう」

うーん、とみんなが頭を捻っているとき、ノックの音が部屋に響く。

応答するより早く、ドアが開かれる。

「一夏、いるか」

現れたのは、俺の姉であり担任の織斑千冬だった。

「千冬姉、ノックしたからっていきなり入るのは——」

「織斑先生だ、馬鹿者」

「うおおおおお……角、角は反則だ……」

千冬姉だつて俺のことを一夏と呼んで、あまつさえノックからの間髪入れずの侵入というマナー違反を犯している癖に、なんで俺だけこんな目に。

理不尽な姉の仕打ちに悶え苦しんでいる中、急に千冬姉の雰囲気は鋭くなつたのを感じる。

千冬姉の視線は、狭間に向けられていた。それも、どこか敵意を帯びた視線をだ。

「狭間……か。何故お前がここにいる」

「お久しぶりです、織斑先生。私がここに居るのは、単に私が一夏さんとお友達だからですよ」

「友達……、そうか」

煮え切らないといった表情を隠そうともせず、今度は俺に視線を向ける。

「一夏、来い」

腕ごと身体を持ち上げられ、そのままの勢いで部屋の外に出る。

「なんだよ、乱暴に」

「狭間祐一とは関わるな、命令だ」

にべもなくそう告げられた言葉。

あまりにも唐突で、納得なんて出来る訳がない。

「何だよ命令つて。それに関わるなって、いくら千冬姉でもそんなの納得できるかよ」

「……アイツは、お前が考えているような奴じゃない」

「意味が分かんねえよ、千冬姉には何が見えているんだ？」

思わずムツとして返してしまふ。

狭間は俺と同じ境遇の男性IS操縦者であり、これから三年間を同じくして過ごす仲間だ。

さつきだつて俺とセシリアの模擬戦に向けての作戦会議を開いてくれたりと、親身になってくれている狭間を否定するような言葉は、たとえ千冬姉のものとはいえど容認することは出来ない。

「兎に角、私の言うことに従え。いいな」

「まっ、待てよ千冬姉！」

それだけを言い残し、千冬姉は振り返ることなく去つていく。

近寄るな、というオーラが背中越しに感じられて、呼び止めることが出来なかった。

「何だつてんだよ、くそっ……！」

理不尽な姉の言葉に、ただ拳を握りしめることしか出来ない自分が、情けなくて仕方

が
な
か
つ
た。
。

第四話

織斑君が神妙な顔で戻ってきてからは、あれよあれよと話は進み、結局接近して一撃を叩き込む。「この距離ならバリアは貼れないな！」作戦で行くことになった。因みに名前の発案は布仏さんです。

実際、こちらには足りないものが多すぎて、選択の余地がまるでない以上、こういった単純な作戦になってしまうのは致し方ないこと。

しかし、朗報もあった。とはいえ、問題付ではあるが。

どうやら織斑君には専用機が与えられることになったらしい。

その発注される時期が、模擬戦に間に合うかどうかというギリギリのラインでなければ、諸手を挙げて喜ぶところですが……。

専用機には形態移行フォームシフトという機能が備わっており、簡単にいえばコアが操縦者の動きをフィードバック、最適化することによって、自立的にその形を変化させるというシステムである。

専用機という名は伊達ではなく、完全に自分用に最適化される仕組みである以上、そのポテンシャルを発揮できるかどうかは個人の技量に左右されるだけに終わる。

量産機では、その都度武装が違ったり機体性能そのものに差が出たりと、どうしても違和感以上の何かを覚えてしまう。

そういった意味でも、専用機の存在はこれ以上とない戦力として見込める。

しかし、今回ばかりは例外だ。

形態移行が一度も行われていない所謂素組の状態だと、量産機にさえ性能が劣るという問題があった。

専用機は間に合うか間に合わないかの瀬戸際。つまり、間に合っても届いたのは
ファースト・シフト
一次移行さえ終えていない案山子という残念仕様。

ぶつつけ本番に専用機を使うか否かの判断は、織斑君に一任することにした。

外野がどうこう言ったところで、悩ませるだけだという織斑君を除く三人の総意に基づいた結論だ。

丸投げしたようにも見えるが、織斑君は優しいから、三人の意見すべてに応えようと
してしまふのだ。

優しさは美德だが、今回ばかりは悪手になってしまふ。という訳で、厳しいながらも
突き放す形となった。

肉体面に関しては篠ノ之さんに、IS操縦に関しては布仏さんに一任している。

同門で剣道を習っていたという二人なら相性は抜群だろうし、布仏さんはちよつとし

た事情でIS操縦は私達以上には経験があるとのこと。

私はもう少し情報を集めたいということもあって、必然的に役割が決まったのだった。

アリーナの貸し出しはそう簡単に出来るものじゃないと聞いていたが、布仏さんの鶴の一声でどうにかなっていました。流石ですね。

そうして、情報を集めていたのですが――

「――貴方ですわね、織斑一夏に加担しているもう一人の男性操縦者というのは」
セシリア嬢にバレました。ですよね――

風の噂程度の認識でしたが、何やら織斑一夏が私との戦いの前に協力者を募り対策を立てているという話を聞きました。

座して時を待つ、なんて体たらくにならず少しだけ安堵した。鬨るだけのワンサイドゲームなんて、美しさの欠片もない。

それよりも気になったのが、もう一人の男性操縦者もその対策立案に一役買っているという内容だ。

私自身、もう一人の男性操縦者に興味はあったが、別段足を運んでまで会う価値があ

るとは考えていなかった。

しかし、運命の悪戯と言うべきか。目の前には偶然にもその男性操縦者——狭間祐一がいた。

話しかける道理はない。織斑一夏と違い、バックボーンもなければ経歴にも乏しそうな男にかまけている暇なんて微塵もない——そう思つてはいました。

こちらでも戯れの心が芽生えたのでしよう。気が付けば話しかけていました。

「——貴方ですわね、織斑一夏に加担しているもう一人の男性操縦者というのは」
振り向いた彼の表情は、眼球も見えないような細目のなよなよとした雰囲気醸し出しており、ほんの僅かの好奇心もすぐに萎えていった。

どこにでもいる——いや、それ以上に情けない男。その認識で固定されていった。

「おや、貴方は——セシリア・オルコットさんですね」

「そういう貴方は狭間祐一でよろしくて？」

「はい、その通りです。いやあ、まさかイギリス代表候補生に名前を憶えてもらつていだなんて、光栄です」

「曲がりなりにも二人目の男性操縦者ですもの。耳に入るのも当然ですわ」

鼻を鳴らし、にべもなく告げる。

尊大な態度を取っているにも関わらず、彼は一切不快そうな表情を見せない。

意外と肝が据わっているのか、それとも自らに向けられた感情さえ認識できないほどに鈍感なのか。

「聞くところによると、貴方はこそこそと私について色々調べまわっているそうですわね。姑息な男」

「これも立派な戦略ですよ。敵を知り己を知れば百戦危うからず、なんて言葉もあります。少しでも貴方を倒せる確率が上がるなら、藁にでも縋りますよ」

「……まあ、織斑一夏はともかく、貴方は私を正當に評価しているようで安心しましたわ。あの男は代表候補生である私に、あろうことか喧嘩を売ったのですよ？身の程知らずにも程があると思わなくて？」

「そうですねえ、確かに彼はIS操縦だけでなく、単純な体捌きでも貴方に後れを取っている始末です。無謀だと言われれば、反論する余地はありません」

「当然ですわ」

彼の物言いに、少しだけ評価が上がる。

鼻根目で見ず、あるがままの評価を下す冷静さは悪くない。

「私の方でも貴方のことを調べましたが——いやはや、調べれば調べるほど勝てる見込みが更に薄れましたよ」

「あら、そんな弱気で私と対峙しようと言うのですか？だとすればとんだ期待外れです

わね」

「いえいえ、元々勝ちの目なんて薄い戦いだと分かり切ったことですし、今更心が折れるなんてあり得ませんよ。それに、まだ貴方の戦闘データに関しては何と調べられていませんし、まだ可能性の芽はあります」

「……？ 貴方は一体何を見て私の評価をしたのです？」

「ああ、私が調べたのは——貴方の経歴だけです。私の考察込みの内容ですが、ね」

不自然な物言いを聞いただと、彼は黒革の手帳をポケットから取り出す。

「セシリア・オルコット。16歳女性、イギリスの代表候補生で適正ランクはA。身長156cm、体重は——流石に調べていません。そんなものに興味ないです。家族構成は父と母共に故人。死因は両者とも事故死。性格は自信家であり努力家。精神的な強さはかなりのもので、逆境に身を置くことで力を発揮するタイプである。ただし余裕が出来る途端に油断が生じる危うさを持ち合わせており、改善の余地ありな要素とする。戦う者としてそれは致命的だと思えますが、よく代表候補生に選ばれましたね。それだけ貴方のスペックが高いという裏付けなのかもしれません。ピアノやバイオリンといった楽器の演奏が得意で、IS学園においてはテニス部に所属予定。お嬢様つて多芸なイメージあるんですけど、何故ですかね。料理の腕は良いとは言えず、外見を重視するあまり味が伴っていないケースが多々見受けられている。見た目も大事です

が、やはり中身が伴っていないといけませんよ？一流はどちらも極めているのですから不可能なんてことはないですからね。名門貴族の出で、両親の死後遺産相続で私腹を肥やそうとする親族から、遺産を守るべく独学で知識を習得。遺産を守ることに成功する。その過程でIS適性試験を受け、適性の高さから遺産保護を条件に《ブルー・ティーズ》のプロトタイプのパイロットを務め、後に正式なパイロットとして権利を譲渡される。努力の度合いが織斑君とはダンチですねえ。尊敬しますよ本当に。予想以上に重い人生を送っていたのを知って少し調べたのを後悔しましたよ。まあ、調べらるんですが。現在も交流がある中では、チエルシー・ブランケットという専属メイドに唯一心を許しており、人としての憧れも抱いているとのこと。反して、女尊男卑の風潮が一般的になる以前から、卑屈な態度が目立っていた父を毛嫌いしており、それが男性に対して一層の嫌悪感を抱く要因となった可能性は高い。ただ、当初から仲が悪かった訳ではなく、習い事などで気を惹こうとした経緯があることを考慮するに、現在も存命ならば良好な家族関係を築けていたのではと推測する。いやはや、運命の悪戯と言うべきですか。悲しい話です」

——ゾクリ、と全身の毛が粟立つ感覚に襲われる。

身内や類縁ぐらいしか知らないような情報まで当たり前のように彼の口から出てきたことで、恐怖以上の感情が私を支配する。

私の情報は代表候補生になってからは個人情報に嚴重に秘匿されている筈なのに、ここまで事細かに調べ上げられているという事実が、私の危機感を一気に煽った。

「おやおや、どうしました？随分と顔色が悪くなっていますわが」

「……な、んでも。ございせんわ。お氣遣いは、無用です」

絞り出すような声でも、氣丈きは忘れない。

ここで心に罅が入ってしまえば、一生の傷となつて私を蝕む。そんな妙に確信めいた予知が私の最後の防波堤となつてくれていた。

「やはり、学生生活との二足の草鞋ではこの程度しか調べる余裕はありませんね。持つていても仕方ありませんし、貴方に返します。こちらで処分してもいいですが、知らないとところで情報を処分したところで気が気じやないと思いますし」

そう言つて私に先程の手帳を渡す狭間祐一。

あまりの躊躇いのない動作に、反射的にそれを手に取つてしまう。

……白々しい。ここまで私を調べ上げた上で吐く言葉ではないというのに。

人の好きそうな笑顔も、今ではどこまでも神経を逆撫でする要因でしかない。

「では、また今度。次は恐らく模擬戦の時になると思いますが、それまで御機嫌よう」
癖なのか、今は無い帽子を外し胸の中に埋めながらお辞儀をする動作で、彼はその場を立ち去つた。

胸を打つ動悸、吐き気に近い不快感で壁にもたれかかる。

時間が時間だけに、人通りもなく。運が良かったと言える。

このような醜態を他人に晒してしまえば、連鎖的に心が脆弱になってしまう。

気丈に振る舞い自己を確立していた私が、誰かに縋ってしまいかねないぐらいに不安定になっていることが自覚出来ていた。

「……狭間祐一、何者ですの？」

手渡された手帳の中を覗き見ると、先程語られた内容以外の私の情報が羅列されていた。

その情報の量は、文字通り丸裸にされたと言うに相応しいものであり、その現実がより一層の恐怖を掻き立てる。

何故、こんな重要な情報を私に手渡したのだろうか。

その気になれば警察沙汰、いや、それ以上の大問題に発展させることが出来る、動かぬ証拠になるというのに。

……それとも、下手な動きをすれば私が不利になるような第二、第三の防衛手段を持つているのか。或いは、彼のバックにはそんな手合いを黙らせるほどの権力が待機しているからなのか。

何にせよ、これだけの情報を今の今まで調べられたということに気付けなかった事実

は、彼が異常なまでに情報操作能力を持つという証明になる。

恐ろしい。そうとしか言えない。

彼がその気になれば、どれだけの情報を搾り取られるのか。考えたくもない。

「……勝たないと、織斑一夏に」

織斑一夏に勝つことは、狭間祐一の敗北にも繋がる。

証明したい。私はあの男に勝つたのだと。恐怖を乗り越えたのだと。

最早、織斑一夏を屈服させるという当初の目的は頭から消え去り、ただ狭間祐一の影を拭い去るための戦いと化していた。

油断も慢心も有り得ない。本人の気付かぬ中、その瞳は強く獰猛に輝いていた。

「織斑一夏——全力で潰しますわよ」

あれよあれよと言う間に模擬戦当日。

プライベートまで調べてしまった申し訳なきから、セシリアさんとは宣言通り顔すら合わせないようになっていた。

いやー、絶対怒ってるわー。そりやそうだな、戦闘データならともかく、完全に関

係ないことばかり調べてたんだもん。訴えられたら問答無用で負けるレベルですって。

しかし、即起訴されるかと思いきや、こうして五体満足で今日まで生き残っています。手帳を渡したことで許されたんでしようか。

いや、きつと彼女が聖母のように器の広い方だったと言うだけです。あれだけ大変な人生を送っているのですから、精神的にも強いのは情報通りだったと言う訳ですね。

それにしても、この一度のめり込むと止まらない癖はいい加減治したいところですが、ままならないものです。

こうして本来必要のない部分にさえ力を入れてしまい、後で後悔するなんてザラなことでだというのに、いつまで繰り返すんでしようね我が事ながら。

ただ残念なのは、別のクラスの行事ということもあつてその活躍を直接見ることが出来ないということでしょうか。

代表候補生を選ぶ戦いですから、戦術等が別クラスに一方的にバレても問題があるという理由から、そうなるのも仕方ないと言えば仕方ないのですが……仲間外れにされているようで少し悲しかったりもします。

そうして時間は流れ、放課後。模擬戦の終わりを見計らつて織斑君達に会いに行こうとしたところで、布仏さん

「お〜いたいた、ユウくん」

「布仏さん。早速なんですけど、結果はどうでした？」

「うくん、残念だけど負けちゃった」

「そう、ですか……」

なんとなく予想していた結果だけに、残念と思いながらも妥当な結果だと思う自分がいる。

「でもでも、オリムーも頑張ったんだよ。あれから専用機が間に合ったんだけど、それに乗って一次移行が発動するまで頑張つて粘つて、そこからあと一步のところまで迫ったんだよ」

「ほほう、それはそれは……その雄姿を見られなかったのが残念です」

殆ど関与していないとはいえ、一応は関係者である自分が一世一代の晴れ舞台を見逃してしまったことは、本当に残念なことだ。

「それとなんだけど、ユウくんはセツシーが油断してかかるって推測してたけど、全然そんなことはなかったよ。その代わり、どこか挙動不審な動作をすることがあったから、そこが穴になってはいいたけど」

「ああ、それなんですけど。彼女は思った以上に高潔な人物だったようでして、今更訂正しても混乱する可能性があったので敢えて黙っていました」

「オリムも結構いっぱいだったしね。いいんじゃない？」

「何にせよ、彼の著しい成長に繋がったことは喜ぶべきことですね。代表候補生との戦闘は、予想以上に彼の才能を焚き付けてくれたようですよ」

「うん、凄いなと思うよ。油断のないセツシーの猛攻を潜り抜け一次移行まで耐えきったんだもん。まあ、そうなった時にはシールドエネルギーもかつかつたっぽいけど」

「それでもそこまで迫ることが出来たのは、布仏さんと篠ノ之さんが織斑君を鍛えてくれたおかげですよ」

「そうかな、エへへ」

はにかんで答える布仏さん。ああ、癒されます。

思わず撫でてしまいそうになるが、セクハラになりそうなので必死に踏みとどまる。

「そういうえばその織斑君はどうしていますか？」

「初めての本格的な試合だったから、疲れて寝てるんじゃない？」

確かに、彼は今回が初めての本格的なISでの戦闘なんです。

訓練の段階でひいこらしていた彼なら、訓練で溜まりに溜まった疲労が全部フィードバックしていても不思議ではない。

「なるほど。ならば後日改めて伺うことにしましょう。セシリアさんの方は？」

「セツシーは分かんないけど、多分体力的には十分だったと思うから元気なんじゃない？」

「ふむ、それでもいきなり押しかけるのは迷惑でしょうし、そちらも改めてということ」

「セツシーに用事あるの？」

「少し失礼を働いたことがあります、模擬戦も終わって因縁もなくなった今こそ謝罪の機会だと思ひまして」

「ふ〜ん」

「ともあれ、無事終わって良かったです。実質何もしていなかった私が言うのもアレですが、肩の荷が下りましたよ」

「じゃあ、その何もしていなかったユウくんは頑張ったみんなに奢るぐらいはしないとね。疲れたときは甘いものだって言うし」

「それは単に、貴方が食べただけでしょう」

「ソナナコトナイヨー」

視線を逸らし、わざとらしく吹けない口笛を吹く布仏さん。

「しらばつくれなくても、そのぐらいはするつもりでしたよ。当然、セシリアさん含めてですが」

「良い心がけだーよきにはからえー」

「調子に乗らない」

軽く布仏さんにチョップをする。

どこかあざといと思わせる動作も、布仏さんなら素晴らしいぐらいにマッチしており、より一層の癒しオーラを出している。

今までの私の周りには、こういうタイプの人は男でも女でもいなかった。

というか、思い返すと私の周囲には癖の強い人ばかりで、彼女のような一緒にいるだけで落ち着く存在はいなかった。

中二病が未だに抜けきっていない千葉さんを初め、常識人だけどその常人を逸した筋肉を持つ赤鋼会長、酒癖悪い上に女子生徒にナンパする睦月先生、暑苦しいことに定評のある獅子神先生、その獅子神先生に求婚されては断つてを繰り返している保険医のレイシ枝先生（未亡人）といった、個性溢れる高校に居たことを思えば、それも納得がいくというもの。

一度そんな高校の常識外れな現実に対して物申したことがあります、そうすると皆が口を揃えて「お前が言うな」と言うんですよ。おかしいですよね？

「まあ、今ならジューズぐらいなら奢れますよ。こつちも手持ちが多い訳ではありませんし、一杯ぐらいがせいぜいですが」

「んー、でも私はお菓子の方がいいかなー」

「いつも食べているでしょうに」

「自分のお金で買ったものと同じやあ、全然価値が違うよー」

「言いたいことは分かりますが、そういうのはもっと謙虚になるべきことでは？」

「ユウくんから言い出したことなんだから、そういう文句は受け付けません」

「それを言われたら痛いですね……。まあ、いいですよ」

「やったー」

そんな他愛のない雑談をしながら布仏さんと放課後を過ごし、一日を過ごした。私達の姿を監視する視線に気づかぬまま。

第五話

織斑君とセシリアさんの模擬戦から数日が経過。

ただのお疲れ様会になる筈だった食事会が、なんとセシリアさんが織斑君に一組の代表を譲ったことで、おめでとう会になってしまうという、まったくもってイレギュラーな展開となっていた。

「でも、まったく嬉しくないんだけど……今からでも変えてくれないか？セシリア」

「お断りします。私は結果的に勝ちました、ド素人の貴方と本気で戦って敗北一步手前まで至ったことを恥じています。同時に、そんな可能性を見せた貴方に期待をしてもいまずの」

「確かに一夏の爆発力を見るべきところだったな。普段からあれぐらいのポテンシャルを引き出せるようになれば、セシリアの言う通りに化けるだろう。安心しろ、一夏。私がかれからも鍛えてやるから、そうすれば一人前になるのも時間の問題だ」

「お言葉ですが、剣道の技術だけではせいぜい基本的な体捌きぐらいしか勉強にならないと思いますわ。私が候補生を辞退したことで織斑さんが矢面に立ったのですから、生半可な覚悟でいられては困りますの」

「いや、そもそもセシリアが辞退しなければ良かったんじゃない」

「……周囲の人間の助力があつたとはいへ、私にあそこまで迫ることが出来たのは、貴方の勝利への執念あつてのこと。感情の爆発が生み出す力というのも、存外侮れないものです。その可能性を見せてくれた貴方なら、もしかすれば私の想像を超える結果を出してくれるかもしれない」

「な、なんだよ。いきなりそんなおだてるようなこと」

「あら、嘘を言っているつもりはありませんのよ？とはいへ、爆発力あつてもそれを発揮する前にやられてしまえば元も子もありませんが。曲がりなりにも私に勝つ手前まで至つたのですから、無様な敗北なんてさせるつもりなんてありませんわよ。これからビシバシ鍛えて差し上げますから」

「理不尽だ……」

セシリアさんの宣言に、がっくりと項垂れる一夏君。

彼からすれば、厄介事を押し付けられただけの流れだ。無理もない。

「なあ、狭間さんと布仏さんから何か言つてやつてくれよ」

「いいんじゃないですか？根拠のない押しつけならともかく、対戦した本人からのお墨付きも戴いているんですから。これを期により一層訓練に励んでください」

「オリムーはやればできる子だよ」

「裏切り者お!!」

笑い声が部屋中に響く。

とはいえ、私が彼を推す理由には、軽い打算もある。

彼自身を気に入っているというのは確かにある。だけど、彼がここで候補生を拒否する姿勢を頑なにすれば、この学園の大半の女性が思うだろ。

『やはり男なんてその程度』だと。『ISを扱えようと私達の優位性は揺るがない』のだと。

IS学園という箱庭の中、私と一夏君だけの男という存在は、文字通り男性のイメージの集大成として扱われる。

ISを扱える資質を持ち、多少なりとも訓練を受けている彼女達の思考回路は、ISを扱えもしないのに口だけは達者な女性とは違って現実的な目線で捉えてくれる。

ISを操縦できるということは、すなわち個人が国家の財産としての価値があると断言されているようなものであり、立場次第では発言力も国家の重鎮に連ねることも不可能ではない。

そんな可能性を持つ彼女達が、もし私達男性IS操縦者の評価を下にして判断したとすれば、どうなるか。

それは、漠然としていた女尊男卑の風潮を確固たるものとしてしまう、ということに

他ならない。

その事実を一夏君は気付いていない。織斑先生は、敢えてその話をしていないようにも見える。

一夏君の場合、地に足がついていないということもあるが、責任感と正義感の強そうな彼のことだ。意識してしまえば最後、その重圧に押しつぶされてしまうだろう。

織斑先生は、そんな彼の特性を理解した上で、敢えて自分で気付くまでに成長することを見守っているのかもしれない。

私と一夏君は、その選択肢次第では、男性と女性、両方の敵とみなされる爆弾を抱えているのだ。

一夏君は先程セシリアさんの発言に理不尽だと返していたが、彼はとつくにそんなレベルを超えた理不尽の中にいる。

この程度の逆境を跳ね除けられないようでは、いずれ彼は壊れてしまう。護られている立場の今だからこそ、この程度で済んでいる。

今の内に彼が強くしなければならぬ。当然、私も強くならないといけない訳なんですよ。

「ユウくん、もっとみんなと近くにいてもいいんじゃない？」

織斑君達は部屋の中心のテーブルを囲う形に陣取っており、私と布仏さんは

「それを言うなら貴方こそ、私を気遣わずにもっと輪に入ってもいいんですよ？」

「ルームメイトを放っておくほど薄情じゃないよ。ていうか普通に近づけばいいのに、どうかしたの？」

「いやあ……」

濁すように返し、セシリアさんを横目に観察する。

あの人、私に物凄い厳しい視線を向けてくるので、どうしても距離を置いてしまう。

間違いない、彼女の情報を調べたことが関係している。昨日の今日のことですから、余計に难道しよう。

美人は怒ると怖い、というのを知っていましたが、やはり慣れるものではありません。私のチキンハートではあんな目をされて一緒にいるなんて無理です。

「もしかして、あんまり役に立てなかったこと気にしてる？」

「あんまり、どころか全然立ってないと思います……まあ、そういう理由もあるにはありますね」

布仏さんの言う通り、後ろめたい気持ちはある。

協力すると言った手前、やれたことと言えばちよつと時間を割けば簡単に調べられる情報を教えたことぐらいいだ。

やれることが実質それぐらいいしかなかったとはいえ、そんなのは言い訳にならない。

「なんだ、そんなことで悩んでたのか」

こちらの会話を聞いてたのであろう、一夏君が私の隣にドカツと座る。

「俺にとつては、箒も布仏さんも狭間さんも、支えてくれた恩人だ。そして、セシリアも」

「わ、私ですか？」

「ああ。もしあそこでセシリアが反発しなければ、俺はなし崩しのまま一組の代表になつていた。代表候補生の恐ろしさ、真剣勝負の感覚を知らないままな。だから、本當に感謝してる」

「わ、私は……ただ貴方を倒したいと思つていただけです。礼を言われる謂れなんて——そもそも、ここに居ること自体が本来場違いなのですから」

「別に一生敵、つて訳でもないだろ。昨日の敵は今日の友つて諺、覚えておいたらいいぜ」

「——おかしな人」

一夏君のどこまでも真つ直ぐな発言に毒気を抜かれたセシリアさんが、顔を綻ばせる。

「ということだから、ほら、ユウくんも」

「……仕方ないですね」

言葉とは裏腹に、私も内心嬉しかったりする。

セシリアさんとは違うが、私も場違いなんじゃないか、という考えはずつとあった。こうして言葉にして認めてくれたからこそ、踏ん切りがついた。

「……ありがとうございます」

「気にするなって！」

一夏君の笑顔が、とても眩しい。

彼と友人になれて、良かった。

「狭間さん、貴方は十分一夏の役に立っている。そんな貴方が自らを貶めては、一夏の頑張りを否定することになります」

「……私からは何も言うことはありませんわ」

「ということ、ここから盛り上がっていきましょー！」

いえーい、とグラスを天に掲げ布仏さんが音頭を取る。

お疲れ会は一層の盛り上がりを見せ、通りがかつた山田先生の軽い注意などが入りもしたが、つつがなく終わりを告げた。

日を跨いで次の日。

二組のクラスも、クラス代表を決める話し合いが始まった。

遅くなった理由としては、クーゲル先生がきちんとクラスの実力を測り、クラスメンバー全員でデータを基に吟味して欲しいと考えていたからである。

クラスごとに決め方が異なるのは聞いていたが、クーゲル先生は軍人氣質が抜けていないのか、実力主義に近い傾向にある。

実際、彼女のやり方は同意できる。

一年とはいえ、これからの指針を決めるにあたっての最初の山場となるクラス対抗戦を、何となくで済ませるのはもったいない。

クーゲル先生の性格もあって、二組の生徒は他クラスよりもしつかりしているのは、こちらとしても下手に注目のにならないのでありがたかった。

「データを見る限り、やはり専用機持ちの近藤さんと椿さんが抜きんでいきますね。時点で磯村さんと藤田さんですね」

「御褒めに預かり光栄、と言いたいところですが、貴方もそうとう出来るじゃないですか、狭間さん」

そう柔和な笑みを浮かべるのは、隣の席に座る藤田純華さん。

セシリアさんと同じくいいところのお嬢様らしいが、彼女と違いイメージ通りの令嬢って感じ。

セシリアさんが私を警戒していることも相まって、個人的にお嬢様対決ならダントツ

で藤田さん推しだ。

「そうだよ、狭間さん。私も量産機だけど、あんなに正確な射撃は無理だなー」

「真琴さんには、その反射神経と瞬発力を利用したインファイトがあるじゃないですの」
「打鉄だとそんな戦い方出来ないし、ラファールだと射撃武装がメインになるからなー」
自分の得意分野に持ち込めないんだよー」

うあー、と唸りながら机に突っ伏す磯村さん。

因みに近藤さんと椿さんも机をくつつけて輪の中にいる。

二組では、このメンバーでの付き合いが多い。

いつもの女子三人組に、後付けで自分と藤田さんがついてきた感じだが、三人は当たり前のように私達を受け入れてくれた。

「こら、マコト。だらしないわよ」

「うえー、ツバキ厳しいー」

「一応授業の一環なんだから、当たり前前よ」

だらしな真琴さんを優しく叱る椿さん。

一週間ぐらいの付き合いだが、この流れは最早恒例だ。

たまに近藤さんがその中に入るぐらいで、私と藤田さんはどちらかと言えば間に入る側だ。

「でも、実際凄いですよ狭間さん。私達はここに来る前に軽い訓練を受けているのに、初めての狭間さんが高評価を受けるなんて、普通はあり得ないことだと思います」

「そういえば近藤さんは、スイスの代表候補生でしたっけ」

「はい。正直、今でも分不相応だと思っっていますけど」

「ノエルは実技とIS適正は私より上なのに、知識が壊滅的だからクローゲル先生も評価に困っていたわよ？」

椿さんは近藤さんを見て溜息を吐く。

椿さんのIS適正はA、対して近藤さんは驚きのS。

ただ、椿さんは頭を使って戦うのに対し、近藤さんは感覚で戦っている節があり、クラス代表戦という個人技が試される場において、瞬時に情報を読み取り臨機応変な対応が出来そうな椿さんが、総合的にトップという結果に落ち着いたのだろうか。

「ノエルの課題は、ツバキのような頭を使った戦闘に慣れることですわね」

「うん……」

「まあ、今はその話はいいでしよう。今やるべきことは、代表を決めることです。あ、私は椿さんを推します」

「私はノエルかなー。何だかんだで実力だけならツバキより上だし」

「だけって……否定出来ないけど」

「なら私は——敢えての狭間さんを推しますわ」

そう試すように、藤田さんが私に笑いかける。

「私、ですか？」

「だって、一組の織斑一夏さんは代表なんですわよね？なら、対抗してこちらも、というのは自然な考えだと思いますが」

一夏さんがクラス代表に選ばれたことは、学園全体に知れ渡っている。

情報規制なんて、話題性の前では障子の紙のようなもの。

実質的軍事教育を施している施設とはいえ、中にいるのは噂好きな女性の魔窟。

それに加えて一年という、意識もきちんと芽生えていない入りたての一般人とさして変わらない人間の口なんて軽くて当然。

緘口令？何それ、美味しいの？と言わんばかりのノリでクラス代表が割れるのは、自然なことだった。

というか、インタビュウなんて受けてましたし、今更ですわね。

「あの前例を思えば、下手に話題性を上げる要素を出して、情報を漏洩させるようなことをすれば、クラス側の不利に繋がりますよ」

「あの新聞部のインタビュウを考えると、狭間さんでなくてもやってきそうな気がしますけどね」

「取り敢えずネタになるものは何でも使え、って感じなんじゃないかしら。全寮制で休日も殆どない閉鎖的な環境だからこそ、日常的な話題に飢えているのは、みんな同じってことだと思おうわ」

「もつと大らかな規則なら、トトカルチョを組まれそうな行事ですものね」
「そんなものですよ。一年生のクラス代表戦なんて、重く捉えていないのが、教師側の行動からも見て取れますし」

操縦技術もままならない入学当初に行われるクラス代表戦。

織斑先生の多数決による代表選考から見ても、重要視なんて欠片もしていないのは自明の理。

クーゲル先生が寧ろ特殊なケースだと見られる始末だ。

そんなんでいいのか、と思わなくもない。

ISは武器だ。それも、個人で従来の軍隊を壊滅出来るポテンシャルを秘めた、恐ろしい兵器だ。

故に、扱う者はその自覚を確固たるものとしなければならない。

専用機持ちは多少の理解はあるだろうが、個人での持ち歩きを許可されていない学院の生徒だって、条件さえ整えば拳銃や戦車を超える武器を扱う能力がある、ということ
を自覚しなければ、いつか過ちを犯す。

その為のIS学園？いきなりギチギチにすれば生徒に対してのパワハラになる？
知ったことではない。そんな生温い考えが許される訳がない。

ISの開発に携わったことがあるからこそ、理解できる恐ろしさ。そして、篠ノ之東が如何に化け物なのかという事実。

当たり前だが、一年の中には凶悪な武器を扱っているという自覚を持つ人は少ない。それを教育するための施設が、こんな体たらくでいいのかと思わずにはいられない。そりゃあ、しつかりしていることはしつかりしているし、所詮素人である自分が口出しできる問題でもない。

だが、このままでと——遠くない未来、現状は破壊されるだろう。

内部からか外部からか、どちらにしても女尊男卑という一転攻勢に出た現状を軽んじ、地盤を固め切れていない現状で男性操縦者が出たとなれば、それは反撃の糸口となり、世界は混乱の極みに向かうだろう。

流石にすぐには起こらないだろうけれど、決して訪れない未来ではない。
どちらが優れているとか劣っているとか、そんな理由で起こり得るかもしれない争い。

それは決して、対岸の火事ではないのだ。

はつきり言って、矢面に立つ立場にある私からすれば、やってやれるかと言いたくなく

る未来が見えていることに、眩暈さえ覚えている。

「……………どうしましたの?」

純華さんが心配そうにのぞき込んでくる。

「いえ、大丈夫。大したことではありません」

「なら、いいのですが……」

「さあさあそれよりも、もつと話し合いに意欲的になりましたよう。他の人達からの意見も取り入れて、参考にするのだってまだやっていないのですから」

悪い気持ちを振りほどくように、矢継ぎ早に話を切り替える。

最近、悪いことばかり考える癖が出てきますね。布仏さんを見習って、楽しいことを考えないと。

結局、代表になったのは椿さんでした。

妥当な判断だということ、特に話題に上がることはなく、そのまま数日が過ぎていったある日。

「転校生?」

二組でのいつものメンバーで食堂に腰を落ち着けていた時、純華さんがそんな話題を

持ち出してきた。

「三組に中国の代表候補生が転入してきたらしいですわ」

「それ、私も聞いたよ。良く知らないけど、何でも代表になつた三組の人からその権利をもらつたつて話題上がつてたよ」

「もらつたつて、半ば恐喝に近いものだったらしいけどね。代表候補生だから、幅を利かせてるのかな？」

「三組には代表候補生はいるらしいけど、専用機持ちじゃないらしいから、ある意味仕方ないのでしょうか……」

「それが真実なら、あまり聞いてて気持ちの良いことではないわね。どういう決め方をしたかは知らないけれど、その元々代表だった人は、どんな気分なのかしら」

「こればかりは、本人のみぞ知ることですね。——つと、噂をすれば、ですかね」

視線の先には、噂で聞いた外見情報と一致しているツインテールの少女が食堂に入つてくる姿があつた。

それに続くように他の四人も視線を転校生へと集中させる。

「あら、織斑さんのところに行きましたわ」

「何か会話しますね」

「雰囲気的に、知り合いなのかな？」

「もしそうなら、世間って狭いなあ」

「まあ、国際化も著しいですね。おかしな話ではありませんよ」

「あ、なんか転校生が怒ってどっか行ったね」

「尋常じやない怒りようでしたわね……。何かあったのでしょうか」

「痴情の纏れ、かな」

「もしそうなら、私達が関与すべきことではありません。夫婦喧嘩——とは違いますが、犬も食わないと言いますしね。その手の話題に首を突っ込むのは野暮ですよ」

一夏君の主人公っぷりを考えれば、近藤さんの意見もかなりの的を射ているのではないだろうか。

私と違って女性受けが良いのは、あの性格と甘いマスクが実証してくれている。

私は……いいんです、友達付き合いでも五人も女性がいるんですから、寂しくないです。

「取り敢えず、近くに布仏さんもいたようですし、気になるなら彼女から聞いておきますよ」

「布仏さんって？」

「あそこにいる、朗らかな女性ですよ」

「ああ……分かった」

真琴さんが納得して頷く。

あのほんわかオーラは、特徴として完全に確立しているレベルだ。

似た傾向に、山田先生のドジっ子母性オーラもあるが、それは柵に置いておく。

「ルームメイトなんでしたっけ？」

「はい。とてもいい子ですよ」

「というか、ある意味で話題のある人よね。あの着ぐるみ？は校則違反ではないのかしら……」

「取り締まられていない、ということとはそういうことなんじゃないですか？」

「変なところで緩いなあ、この学園」

とはいえ、これは緩いとかそのレベルを超えている。

もしかすると、布仏さんの知り合いに権力者がいるのかもしれない。

気にしていなかったけど、少し調べてみるのもありかもしれないね。調べたからどうって訳でもないんですが。

「取り敢えず、食べ終わったら次の授業の準備をしませんといけませんし、お話もこの辺にしておきましょう」

純華さんの意見に頷いた私達は、それから静かに昼食を取った。

第六話

いつも通りの日常を過ごし、あつという間にクラス代表戦当日になった。

私達は、椿さんを除いて観客席で横並びに並んでいる。

椿さんは、最終調整の為に席を外している

今回ばかりは一夏君に協力することもできず、クラスの付き合いということもあつて、積極的に代表になった椿さんのフオローに回っていたせいで、ルームメイトである布仏さんとも寢床を共にするぐらいしか接点がなくなっている。

布仏さんも何やら忙しくしているようだが、どうやら一夏君関連ではない様子。

布仏さんの性格なら誰とも友達になれるでしょうし、私が知らない付き合いがあつても別段不思議ではない。

因みに初戦は、一組の一夏さんと三組の例の転校生、凰鈴音さん。

食堂での会話だったこともあり、あの時の会話は布仏さんを介するまでもなく、細々と伝わっていた。

簡潔に言えば、磯村さんの推測通りの痴情の纏れ。

詳しいことは聞いていないが、所謂二人は幼馴染の間柄らしく、昔の約束を一夏さん

が曲解して受け止めていたらしく、凰さんがそれに怒ったとのこと。

一夏さんは天然だから納得できる。凰さんは食堂でのやり取りだったこともあり、訂正するにしても直接的な言い方は出来ずに結局うやむやになった、と私は推測しています。

とはいえ、場所が違えば結果が違ったか、と言えば怪しいところですが。あの一夏さんですし。

「織斑一夏と凰鈴音、どちらが勝つと思いますか？」

「凰さんの情報は今回調べていないので何とも言えません、武装が近接装備しかない一夏さんでは、初見で代表候補生と戦うのは骨でしょうね」

「へー、男らしい戦闘スタイルなんだね」

「話によれば、織斑先生の専用機の武装をフィードバックしたものらしいですね」

「昔の映像で見たことあります。モンド・グロツソ優勝者の名に恥じない、究極の一の体現者のそれでした」

近藤さんの言葉に同意する。

私もその動画は見たが、あれは最早人間の枠を超えている。

何がどう、とは言えないが、とにかくおかしい。

公式試合だということで間違いなくまずあり得ないが、ドーピングを疑われてもおか

しくない身体能力と反応速度だ。

人造人間だと言われても驚かないレベルだ。

「そりゃあ、あの人気も領けるよね。生きた伝説だもん」

「女性操縦者の憧れを一身に受けているのも、当然ですわね」

「そういう皆さんは、織斑先生を？」

「うーん、私はどちらかと言えばクーゲル先生かな。戦闘スタイルも似ているし」

「クーゲル先生はインファイターなんでしたっけ」

「そうですよ。当時の先生の専用機の武装は、常時展開型の収納式パイルバンカーのみよってI.S.の能力を底上げする機能も備わっていて、それによってI.S.に大きな負担が掛かるんですが、放熱機構を攻撃に転用することで、無駄を無くしているんです！これは開発側からも考慮されていなかった使い方らしく、戦闘力も相まって織斑先生のライバルとして人気を次いでいるんですよ！」

熱弁する磯村さんに、若干引き気味になる私達。

「クーゲル先生が凄いのは分かりましたわ。では、ノエルはどうなんですか？」

「わ、私？ そうだなあ……山田先生、とか？」

「おや、予想外のチョイスですわね」

「そうかな？織斑先生とクレーゲル先生が凄すぎて隠れがちだけど、山田先生は織斑先生に操縦技術を認められてる、数少ない人物なんだよ？お二人と違つて、万能に戦える山田先生は、参考にしやすいつてのもあるし」

山田先生、そんなに優秀だったんですか。

普段の母性溢れるドジっ子な彼女からは想像が付きませぬ。ギャップ萌え……にはなりませんね。

とはいえ、近藤さんが彼女を参考にするには、直接指導をしてもらうぐらいしかなさそうですが、どうなんでしょう。

有名なお二方と違つて、資料なんてものはあるかも怪しいですし。

「ツバキは織斑先生推しだよ。騎士、って感じに憧れてる感じあつたし」

「騎士がというより、騎士に付随する正義という概念に焦がれているように思えますわ」

「ツバキは真面目だからねー」

そんな感じに会話に花を咲かせていると、とうとう一回戦の始まりが告げられた。湧きあがる歓声、高まる熱気。

始まつたばかりなのにこの興奮。古来よりこの類の催しは人を狂わせると言われていますが、ただ中に置かれて初めてその意味が理解できた。

「出てきましたね……二人とも」

一夏さんと風さんが、アリーナの上空で静止し、睨み合う。

睨むと言つても、一方的に風さんが敵視しているだけのようだが。

「何か言い合つてますわね」

「歓声のせいで全然聞こえません、恐らく例の件のことじゃないでしょうか」

「罪な男だねえ、彼も」

「当人は無自覚なのが、余計に問題の種になっているんですが、それさえ自覚していないものですから、堂々巡りなんですよね」

「教えたところで、実感するとは思えない。」

あそこまで行くと、女性とそういう関係にならないように意図しているようにさえ見える。

鈍感を超えて、病気ですよアレは。

「そういうの、私は好きではありませんわね。無知は罪、なんて言葉もあるように、無邪気は時として邪気になる。あの様子だと昔からあんな感じだったようですし、彼に振り回される風さんが可哀想ですわ」

風さんに同情の視線を向ける藤田さん。

言いたいことは分かるし、納得できる。

彼に向ける好意が愛情なのかは定かではないが、一夏さんの反応は自身に向けられる

好意を真つ向から否定する行為に他ならない。

自覚しているようが無自覚だろうが、タチが悪いことに変わりはない。

……とはいえ、それもまた、彼の主人公性が成せる業だと考えている私に、何か言う権利はない。

まあ、モテモテで羨ましい、と思うことはありますが。考えるだけなら自由ですよ。

「あ、いたいた〜」

歓声の響く中、聞き慣れた鈴のような声が耳朶を打つ。

やはりというべきか、その声の正体は布仏さんだった。

「布仏さん、どうしてここに？一組の方にいたんじゃ」

というよりも、クラス別の行事で別のクラスの人が一緒の場にいるって、不味いのは？

「許可なら織斑先生からもらったよ。それとも、私と一緒に嫌？」

「とんでもない。ですが、許可があるにしてもあまり良い印象は持たれないのではと思
います」

「気にしない気にしない」

布仏さんは相変わらずマイペースでこちらの心配を受け流す。

そこましてこつちに来てくれたことに喜びを禁じ得ないが、同時に申し訳なさも募

る。

「貴方が、布仏本音さんですか？」

「うん、そうだよ」

「初めまして、私、彼の友人で藤田純華と申します。以後お見知りおきを」

「私は磯村真琴、よろしく！」

「私は近藤沙耶です」

「よろしくね」

布仏さんは笑顔で一人一人と握手を交わしていく。

こういう些細な行動が、彼女の善性を如実に表している。

「あ、始まるよ」

布仏さんは私の隣に座り、アリーナを指さす。

一触即発、そんな言葉が似合う空気を破壊したのは、一夏さんだった。

受けの姿勢は不利だと理解しているのだろう。

どうせ近づくしかないのなら、躊躇う必要はない。それが例え、相手にとって有利に働く行動だったとしても。

凰さんは手に刃渡りの大きい剣を携え、それを迎撃する。

一夏さんの必死な様子に対し、凰さんは余裕の姿勢を崩さない。

「鳳さんも近距離系のISなんでしょうか。さっきからずっと接近戦ばかり……」

「敢えて同じ土俵に入ってる、と考えられなくてもないですが、あり得なくはなさそうですね。ただ……」

「ただ？」

「彼女の背後に浮いている二基の翼のようなものが気になりました。恐らく、アレに何か秘密がある」

鳳さんのISの中で特に異彩を放っている、背後の装備。

小さい穴のようなものも開いていることもあって、あそこから何か発射するしないしはカメラ的役割があると推測している。

そんな考えを巡らせている間に、鳳さんは手に持っていた剣と同じものを柄同士で連結させ、回転運動と共に一夏さんへと繰り出した。

それを余裕を持って回避したかと思うと、一夏さんの身体が突然弾き飛ばされる。

「今のは……？」

「まだ分かりません。もう少し情報が欲しいですね……」

戦況を見守る中、一夏さんはその見えない攻撃に翻弄される。

飛び道具となった剣と、見えない攻撃という見える脅威と見えない脅威に踊らされている。

「うーん、何だろうねアレ」

「最初は空気砲かと思いましたが、それにしても多角的過ぎますわ。砲身と思わしき背後の装備の穴の死角からも、攻撃が当たっていますわね」

「狭間さんは、何か分かった？」

「そうですね……藤田さんの言う通り、多角的な攻撃に視覚では捉えられないとなると……空間そのものに干渉しているとしたか思えませんね」

「えっと、つまり？」

「空間の圧縮、そこから元に戻る力が働くことによって、空間爆発を起こしている可能性がある、ということですよ」

藤田さんを除く三人が、意味が分からないと言った顔をしている。

「……えっと、言いたいことは何となく分かりますけど、そんなこと出来るの？」

「空間の圧縮自体は、原理的に不可能ではありません。宇宙開闢の切っ掛けとなったビックバンから、宇宙は膨張し続けているとあります。空間膨張が可能なら、その逆も然りです。小規模とはいええ、そんなことが出来るとは思ってはいませんでした」

「うわー、なんかとにかく過ごそうですね」

「ローレンツ収縮のように視覚的に影響が出るケースは良く聞きますが、そこに物理的干渉が介在した場合、観測する視点からすればどうなってるのでしょうか」

「さあ、そこまでは。ただ、空間が圧縮されているなら、空間内は最低でも須臾レベルでの時間逆行が行われている筈です。ということとは、私達が知覚している凰さんの攻撃は、実は何億分の一秒前に受けたダメージだったりする訳ですね」

「それって、時間停止攻撃を受けて『階段を登っていたと思っただけのまにか降りていた』的な状態と似てたりする？」

「その例えの意味は分かりませんが、違うと思います。認識の外にある現象、という点では同じかもしれませんが、空間圧縮の場合、下手をすればダメージを受けることが確定されているという点が恐ろしいところです。とはいえ、凰さんが空間圧縮から生じる時間逆行を認識出来ていなければ、ただの衝撃砲でしかないんですけどね」

「なるほど、バイツァ・ダストってことか」

さつきから意味の分からない例えをしながら納得している磯村さん。もしかして、漫画とか引き合いに出してます？

「ユウくんなら、どう対処する？」

「そうですね……見た感じ、凰さんは衝撃砲を扱う際に、攻撃する方向に視線を向けている傾向にあるようです。視覚の外に移動する、視線を自分以外に誘導させる、認識より早い速度で移動する。単純ですが、対策自体は容易ですね。もし、凰さんが全方位の敵をハイパーセンサーなり使って、正確に認識できるようになれば、勝てる人はほぼいな

くなるでしょうが」

「そのレベルは、間違いなく織斑先生クラスだよ」

「ですが、人間に出来るレベルの芸当であることは間違いありません。ISの改良によつて補正が掛けられるようになれば、そこまで技術を要する必要はなくなると思いますし」

「でも、この戦いでその過程は無意味。そうなると……」

「——勝つのは、持てる技術を十全に扱えた者、ですね」

そんな呟きと共に一夏さんが鳳さんの懐に飛び込まんとした瞬間、何かが砕けるような音と共に、アリーナの中央が爆発した。

「な、何だ!?!」

セカンド幼馴染である鳳鈴音と、クラス代表として一回戦を繰り広げていた最中、それは起こった。

両者の間に、流星のようにひとつの物体が着弾。中心から爆発し、アリーナが炎上していく。

炎から悠然と姿を現したのは、灰色を基調としたIS。

つま先までであろう長さを誇る腕と、頭部から胴体に掛けて一体化したようなディテールのそれは、既存の I S の常識とはかけ離れた、全身装甲によって構成されている。視界が晴れ、I S の姿が露わになったことを皮切りに、悲鳴が連鎖爆発を起こす。外周から聞こえてくる阿鼻叫喚の悲鳴が、現状が如何に異常事態であるかを物語っていた。

「鈴、あれが何だか分かるか」

「分かる訳ないでしょ。それにあんな造形の I S、見たこともないわ」

「正式に登録されていない I S ってことか？」

「少なくとも、表に出ていれば似た外見のものぐらい公表されるでしょうね。何にせよ

――」

鈴は連結させた青龍刀を後ろ手に構える。

「――アレは敵よ。なら、排除するまで！」

身体を捻りながら、青龍刀をブーメランの要領で謎の I S へと投擲した。

それに反応して、灰色の I S はバレルロールで回避を行い、カウンターで腕部からレーザーを正確無比に発射した。

咄嗟に俺達は左右に分かれるようにそれを回避。

そこからは、一方的な展開だった。

両手から放たれるビームの群れが、戦場を支配する。

俺も鈴も、近距離を主体とした装備で、お互いに消耗していることもあって、防戦一方を強いられていた。

一歩でも踏み込めば、蜂の巣だ。鈴の技量でも攻めあぐねているのに、俺なんかは以ての外だ。

膠着する現状に歯噛みしていると、ISを通して通信が入る。

『一夏、聞こえるか』

『千冬姉か!』

それは、千冬姉からの通信だった。

彼女の声を聴いたことで、幾ばくか精神が落ち着いた気がする。

『聞け。現在、異常事態によって現場は混乱を来たしいているのは分かるだろう。生徒の避難が最優先な状況下で、お前達に向ける増援は実質ないと言っていい。だから、時間を稼げ。そうすれば、教員が駆けつけてくる。お前達は先程まで戦闘をしていて、エネルギーも消耗している。決して深入りするな』

一方的に捲し立てるような通信を受け取り、返信もする暇もなく切られる。

「深入りするなって、そんな悠長なこと言っていいのよ」

「救援だって、いつ来るのって話よね。それに、アイツ——強い」

こちらを値踏みするように、空中に静止する灰色のIS。
値踏み？——観察、されている？

余裕の表れか？それとも——他に何かある？

「一夏、逃げるなら逃げてもいいわよ。アンタじゃアイツの相手は荷が勝つわ」

「冗談。どうせ逃げ場なんてないんだ。それに、幼馴染を放つてまで逃げるなんて、そんな情けないことできるかよ」

「一夏……」

雪片式型を強く握り締める。

ここで引けば、周りのみんなに被害が及ぶ。

それは、無様に逃げて命が助かることより、よっぽどの生き恥だ。

『——あー、もしもし、聞こえますかー？』

決意を新たにしたところで、気の抜ける声がISを通して聞こえる。

「この声——もしかして、狭間か？」

『ええ、そうです。どうやら上手く繋がったようで、安心しました』

そう、場違いに落ち着いた声が耳朶を打つ。

この声は、同じ男性操縦者である、狭間祐一のものだ。

「え、え？何がどうなってるの？」

知らない人間からの声を前に、鈴は混乱している。

『申し訳ありませんが、短めに現状を説明します。現状、IS学園のネットワークシステムの殆どが外部からの干渉で遮断されています。恐らく、あのISを送ってきた者の作業でしょう。学園のセキュリティを突破する手腕を考慮するに、バックは相当デカイです。下手なことをすれば、貴方達は間違いなく敗北します』

「なっ——なら、どうすればいいのよー」

真つ向から実力を否定され、苛立ちながら返す鈴。

『落ち着いてください。冷静になれば、あのISの特性が見えてくると思います。先程から、敵が攻撃してくる様子はありません。こうして会話で集中力が散漫になっているにも関わらず、動く気配すらありません』

「確かに……」

『恐らく、しばらくはこのままでも平気でしょう。何もしなければ、という前提が入りませんが』

「ちよつと、いきなり割って入って、ずけずけと何だつていうのよー」

『嵐さん、言いたいことは分かりますが、この場では私に従って下さい。織斑先生も恐らく教員としての責務を全うしている最中です。今、こうして接触できるのは私だけでしょー』

狭間の真剣な様子に、鈴も言葉を閉ざす。

そう、そんなことを話している場合ではないんだ。

「ちよつと待つてくれ。狭間は今どこにいるんだ？管制室、ではないよな？」

そうでなければ、恐らく、なんて曖昧な表現はしない筈。

『私はアリーナの観客席にいます。そこにある非常用のコンソールから無理矢理一夏さん達と交信しているので、いつ切れるのか分かりません。近くに布仏さんもいますよ』
『オリムー大丈夫？』

狭間と入れ替わるように、布仏さんの心配そうな声が聞こえる。

「布仏さん、俺は平気だよ」

『良かった。無理しないでね、今、ユウ君がなんとかしてくるって言うから』

「何とかって？」

『何か、この端末から一部の隔壁のプロテクトを解除して、増援を送れるようにするって』

そんなことが出来るのか？

当然がバックがデカイと言ったばかりなのに、非常用の端末でそんなことが出来るってことは、狭間はそのデカイ何かと同等——いや、それ以上の機械技術に精通していることになる。

「増援つて、誰だ？先生はまだ避難誘導で時間が掛かつてるんだろ？」

『大丈夫、ユウ君が信頼する人達だから』

それだけ言い終えると、通信が遮断された。

恐らく、交信の限界が来たんだらう。

そして、それに呼応するように、今まで不動を貫いていた灰色の I S が腕を俺達に向けて構える。

油断していた。やられる——!!

そう覚悟した瞬間、灰色の I S の片腕が分断され、射線を大きく逸らし、地面を抉つた。

灰色の I S の背後に突如と現れた影は、そのままの勢いで蹴り飛ばす。

それに反応して、残った腕からのビームで迎撃を試みるが、既にそこに影の姿はなく、再び灰色の I S の近くにその姿を現す。

「イージスブレイド！」

桃色に光る剣を、天に掲げるように振り上げる。

その一撃は、灰色の I S に大きな爪跡を残した。

「正義執行！私が、貴方を断罪します！」

凛々しく透き通るような声が、アリーナに響く。

その姿は、俺がイメージするものとは大きく違ったが、誰もが思っただろう。あそこにいるのは、紛れもなく『騎士』だと。

「大丈夫ですか、お二人とも」

「あ、ああ……。アンタは、一体」

「詮索は後です。ただ、狭間祐一の託した増援だと理解してもらえれば」

増援——彼女が、狭間が言う信頼する人。

だが、彼は達と言っていた。なら、他にもいるのか？

俺の疑問に答えるかのように、青色の線が灰色のISを貫いた。

閃光の流れを視線で遡ると、そこにはつい最近見たばかりの青い機体——ブルー・ティアーズが空中で静止していた。

「お待たせしましたわね」

「セシリアか！」

「はい、織斑先生の指示で、助太刀に参りましたわ」

セシリアが増援。だけど、千冬姉の指示だと言う。

この騎士のような女性は、セシリアの乱入に大きな反応を見せる様子はない。ということ、セシリアがもう一人の信頼できる人間？

狭間は、セシリアが送り込まれることも予測済みだったってことか？ 凄い洞察力だ

な。

「ノエルは……流石に待っている時間はありませんね。このままあのＩＳを破壊しますよ」

「破壊って、そんな——」

「気付いていないのですか？ 私はあのＩＳの腕を切断した。だけど、血の一滴も流れていない。そもそも、絶対ではないとはいえ、操縦者の安全が保障されている絶対防御を抜けて致命傷を与えるなんて、普通はあり得ません」

鈴の戸惑いを、騎士は返す刀で切り捨てる。

「それって、つまり……あれは無人機だってことか？」

確かに、思い返せばあの灰色のＩＳは動きが正確無比過ぎた。

そして、こちらが攻撃を止めた途端に同じくして攻撃を止めたのも、プログラム外の行動だったからと考えれば納得がいく。

「それに、先程あのＩＳのコア番号を解析しましたが——登録番号不明とありました」

「不明って、それはアラスカ条約違反ではありませんの？」

「その通りです。この時点で相手がまっとうな手合いでないことは確定したようなものです。ならば、慈悲を与える理由はありません」

アラスカ条約……名前は知ってるけど、詳しいことは知らない。

確か、ISの運用に関してのあらゆる規定の総称だった筈。

「なら、背後関係を洗う為に捕獲するべきじゃないの？」

「可能であれば、そうしたいですが……今はアレを無力化することだけを考えましょう。そもそも、そんな都合の良い結果が出るとは思えませんし」

「そう、だな。何にしても、アレはここで仕留めるぞ！」

俺の宣言に、みんなが頷く。

「私と凰さんが、先陣を切ります。セシリアさんは後方からの援護射撃を。そして織斑さん、貴方がトドメを刺してください」

「俺が？」

「申し訳ありませんが、狭間さんを通じて貴方のIS、白式について調べさせてもらいました。その中に、あのISを一撃で沈められる切り札があることも含めて」

切り札と言うのは、零落白夜のことか。

千冬姉の話では、白式の単一仕様能力で、白式のシールドエネルギーを消費してシールドバリアーを無効化する諸刃の剣。

未熟者の俺ではまともに扱うことさえ出来ない、宝の持ち腐れと化した武装だ。

「でも、あれは——」

「分かっています。その威力に相応しいデメリットがあることも。それを承知の上で、

貴方に託したいのです」

騎士の瞳が、俺を射抜く。

この鋭さ、どこか既視感を覚える。

「奇襲でダメージを与えることは出来ましたが、二度同じ戦法は通用しないでしょう。これ以上時間を掛ければ、被害はアリーナに留まらなくなります。だからこそ、短期決戦で決めたいのです」

「だ、だけど。もし、決められなかったら——」

「大丈夫。その為のフォローを、全力で私達がします。初対面の私を信じなくてもいい、その代わり彼女達を信用してください。そうすれば、きっと貴方は戦える」

何の根拠もない、一方的な激励。

この進退窮まった状況で、一番の素人である俺を作戦の要にするなんて、正気じゃない。

そんな俺の考えを察したのか、バツが悪そうに騎士は言葉を紡ぐ。

「私にもよく分からないんです。だけど、貴方は不思議と信頼できる。私の期待に答えられる。そんな気がするんです」

「はは……なんだよそれ」

本当、迷惑な理屈だ。

でも——ここまで言われて引き下がらるなんて、男じゃないよな。

「……いいぜ、やってやろうじゃないか」

「いい眼です。やはり、あの人の弟なんですね」

「そう言われて、悪い気はしないな」

千冬姉は、俺の憧れだ。

厳しさの中にある優しさ、人を惹き付ける圧倒的なまでの強さ。

それは、凡愚である俺には眩しすぎて——だからこそ、焦がれた。

幼い頃から女手一つで俺を支えてくれた千冬姉。

第二回モンド・グロツソの時に、俺は誘拐された。千冬姉を優勝させない為に、人質として俺を捕えた。

結果、千冬姉が歩む筈だった栄光のロードは、閉ざされた。俺の、せいで。

そして今も、千冬姉には世話になりっぱなしで何も返せないでいる。それどころか、苦労を掛け続けるばかりだ。

だから、I Sが操縦できるようになって、千冬姉が使っている装備が添えられた専用機が届いたとき、思った。

——俺が、千冬姉と同じになればいいんだ、と。

それが如何に苦難な道か、千冬姉と共に過ごしてきた俺だからこそ、嫌でも理解でき

ている。

今はまだ遠い、姿さえ見えない果てのない道。

心が折れるかもしれない。そもそも、千冬姉と俺とではスタートラインが違いすぎる。

——それでも、憧れを止める理由にはならない。

「白式、俺に力を貸せ！」

その言葉に反応するように、力が漲ってくる。

千冬姉の魂を引き継いだこのISが、俺に力を分け与えてくれているのかもしれない。

なら、この頭の中に想起される未知の知識にも、納得がいく。

「誰でもいい、俺にエネルギー攻撃を撃つてくれ！」

「えっ!?ちよつと、何言ってるのよ！」

俺の言葉に、誰しもが動揺する。

無理もない。俺だって、同じ立場なら同じ反応をする。

でも、これは必要なことなんだ。俺が全力を出す為に、足りないものを補う儀式なんだ。

「いいから、撃て！俺を信じろ！」

「——ッ、後悔しても知らないわよ！」

俺の背中に、衝撃砲の感覚が走る。

その衝撃と共に、白式にエネルギーが充填されていく。

「準備は整った様子ですね。では——行きます！」

騎士が宣言と共に突貫する。

「一夏、ハマするんじゃないわよ！」

続けて鈴が、衝撃砲による牽制を繰り返しつつ、距離を詰めていく。

「私が見込んだ男なのですから、情けない姿を晒さないで下さいませ！」

セシリアは得意のビットとライフルで、遠距離から敵の逃げ道を塞ぐ。

俺は、三人の攻撃の合間を縫うように移動しつつ、絶好のタイミングを窺う。

我武者羅に放たれるレーザーに意識を集中しながら、徐々に間合いを詰める。

俺は攻撃には参加しない。下手糞な俺では必殺のタイミングを測りながら戦闘に参加するなんて出来ない。

情けない話だが、みんなが俺を信じて戦ってくれている以上、失敗だけはしたくない。

だからこそ、待つ。じつと、耐える。

騎士の少女は、瞬間移動のような動きで距離を詰めたり離れたりを繰り返しの、攪乱

戦法を繰り返している。

イグニツション・ブーストなんて目じやない速度は、AIの処理速度さえ超越するらしく、さんざん苦勞させられたISはその動きを追うので精一杯と言った様子だ。

「こ——のおお!!」

鈴は持ち前の近接能力の高さで、騎士の攪乱に合わせるように追撃を入れていく。

だが決して豪快なだけではなく、その端々から見える正確な動きは、流石代表候補生だと舌を巻くレベルだ。

衝撃砲を使わないのは乱戦だからということもあるだろうが、俺との戦闘で多少なりエネルギーを消耗しているというのが大きい筈。

凄まじい気迫と共に放たれるそれは、俺との戦いでは見せてくれなかったもので、こんな場面だつていうのに悔しさが押し寄せてくる。

でも、同時に——いつか追い付いてやりたい、という欲望も沸いた。

「そこ、ですわ!」

セシリアの繰り出すライフルとピットの糸を通すような射撃が、前衛二人の不足を補うように無数の線を引く。

二人に張り付かれレーザーを発射することもままならなくなった灰色のISの代わりに、今はその光景を補うと言わんばかりにセシリアのレーザーが戦場を支配している。

「これが、代表候補生の実力——」

こんな時だというのに、俺は三者三様の舞いに見惚れていた。力強くも美しい、俺の必死なだけの戦い方とは違い、華がある。はつきり言つて、俺なんか介入しなくても倒せるだろう。

だから、見守るだけか？

——否。それは決して有り得ない幕引きだ。

俺は、託されたんだ。

あの I S に終止符を打つ、締め役割を。

俺のような素人を信頼してくれたからには、それに応えたい。

だが、俺に出来ることは、ただ剣を振ることだけ。

それしか出来ないのだから、当然。そも、それ以外は誰も期待していない。

だったら、どうする？彼女達が掴むであろうチャンスを、確実にモノにするには、どうすればいい？

期待と不安による思考の泥沼に腰まで浸かっている中、非情にもその時は訪れた。

「——今です！」

セシリアのライフルが、灰色の I S に直撃し、大きく身体を仰け反らせる。

セシリアの号令と共に、俺は切り札を起動させる。

「——零落白夜、起動！」

高密度のエネルギーが、雪片式型へと収束していく。

秒読みの速度で減るエネルギーが、零落白夜の性能の高さの裏付けとなり、俺の心を滾らせる。

これが、俺に残された最後の力だ。

「うおおおおおお!!」

力の限りの咆哮と共に肉薄する。

俺に敵性反応を示した灰色のＩＳは、苦し紛れの体勢で俺に腕を向ける。

レーザーが発射されたと同時に、世界がスローになる感覚を覚える。

灰色のＩＳだけじゃなく、鈴たちも同様に遅くなっている。

光の速さで動く筈のそれは、子供が遊びで投げるボールの速度ぐらいにまで落ちていく。

死ぬ直前はスローに物事を感じられるって聞くけど、それと同じか？

原因を追究する余裕はない。幸いにも、俺の身体は何故か普段と対して変わらない速度で動ける。

俺はレーザーを頭部を掠める程度の最低限の動きで、潜り込むに距離を詰める。

ゆつくりと第二射が放たれようとしているが、遅い。

俺は一息に、残っていた腕を斬り落とし、そのまま脚部も両断。

灰色のISに誰かが入っているかも、なんて低い可能性は最早脳裏から消えていた。

ただ——目の前の敵を斬る。それだけに意識が集約していた。

「これで、終われええええええ!!」

その勢いを殺さず、空中で身体を捻り、地面へと叩きつけるように背後のスラスタールごと灰色のISを縦に切り裂いた。

スラスタールを失ったことで制御不能に陥った灰色のISは、なすすべもなく地面へと墜ちていく。

白式も、役目が終わったと言わんばかりにエネルギーが底をつく。

同時に俺自身の肉体も限界が訪れたのか、急激なまでの疲労感と眠気が襲う。

それに抗う術もなく意識を闇に落とす直前、俺の前に飛び寄る三人の姿が視界に映った。

第七話

痛いぐらいの静寂が部屋の中を満たしている。

立派な机の前に座す柔和な笑みを浮かべる還暦過ぎの老婆。その隣で対極的に静かに憤怒する女性教師。

二人の眼前に立つ五人の生徒。

生徒は皆が異なる想いを抱えてここにいる。

一人は普段通りの笑みを抑え、真剣な表情で教師の言葉を待つ。

一人はこの場にいることを納得しない面もちで。

一人はこれから起こるであろう不幸な未来に内心溜息を吐きながら。

一人は毅然とした態度を崩さず、姿勢を正して時が来るのを待つ。

一人は貼りついたような笑みを絶やさないまま、女性教師を見つめている。

あの襲撃事件から三日後——関係者は、とある一人を除いて呼び出しを受けていた。

「では、この度は襲撃者の迎撃、並びに学園の防衛に尽力して戴きありがとうございます」
す

柔和な笑みを浮かべる老婆——I S 学園の学園長は、一礼して答える。

「当然のことをしたままです」

毅然とした少女——椿麻美は、この重い空気の中はきはきと言葉を返す。

自分に間違いはないと自信を持っているからこそ、この態度が取れる。

事実、彼女達の功績は目を見張るものだ。

謎の襲撃者である無人機のISの無力化及び確保、次いでIS学園への脅威を退けた

ことは、正式な軍隊であれば勲章を貰えても不思議ではないものだ。

軍隊的な育成を施しているIS学園だが、あくまで育成機関であって規則は軍隊のそ

れではない。

だが——罰則は共通のものを架せられる。

「ですが、事前に織斑先生から援軍が来るまでは無理をしないと通達していたにも関わらず、戦闘行為を行ったのは感心できませんね。それと、学園の一部の者しか知らない筈の非常用コンソールを使用した——いや、出来たことについても、お聞かせ願いませんか？ 狭間祐一さん」

学園長に問いかけられても、狭間は普段通りを崩さないと思えば、ほんの僅かに表情が引き締まっている。

「狭間さん。あのコンソールはどうやって見つけたのですか？ 非常用なので、万が一知らぬ間に人間に使われてはいけませんように、綿密なカモフラージュを施していたのです

が」

「大したことはしていませんよ。偶然見つけただけです」

「偶然、ですか……ふふ、今年の生徒が優秀で、鼻が高いですよ。ねえ、織斑先生」

「……そう、ですね」

女性教師——織斑千冬は苦し紛れに目を伏せて腕を組み、言葉を返す。

彼女は狭間に対して思うところがあるが故に、内心は猜疑心で満たされており、実直な性格な彼女からすればそんな手合いを褒めるのにはどうしても抵抗があった。

「さて、今回お呼びしたのは残念ながら良い理由ではありません。——貴方達はこの学園を護った英雄であると同時に、織斑先生の言葉を無視し無茶をしたばかりか、秘匿回線を無断使用したということもあり、貴方達を処罰しなければなりません」

「処罰って……」

「貴方達が成した功績を鑑みれば、罰則は免れて然るべきなんです……新入生がいきなり罰則を免れたとなれば、示しが付かないのですよ」

「それは、非常事態であつてもですか？」

「はい、残念ながら」

狭間は予想通りと言わんばかりに、そうですか、と淡泊に言葉を締めくくる。

「狭間。お前は特に厳罰に処される可能性がある。何せ学園の機密の一端に触れたん

だ。コンソールを無断使用し、独断で椿麻美を援軍として送ったことも、下手をすれば悪戯に被害を広げる結果になっていたかもしれない」

「だけど、結果として助かったんだからいいじゃないか」

「織斑、そんな都合の良い言葉で納得させられるようなら、規則は厳しくなくても成立する。逆に言えば、規則で固めなければ人は過ちを犯すのが常だ。お前のように善人ばかりではないんだ」

先程不安を抱えてこの場にいた青年——織斑一夏は、正論を突きつけられて二の句を告げられずにいた。

姉としてではなく、いち教師としてこの場にいる千冬ということもあって、慣れない言葉遣いでの反論は困難だったことも要因となっている。

「織斑先生、それなら私は祐一さんの隣にいながら止めなかつたことが罪の原因になるんでしょうか？」

「布仏の場合、私が二組の方に向かうことを許可した手前、それを罪とするには難しい。セシリアのように私自身が抜擢して出撃させたケースと似通っていることもあって、不問としようと考えている。この場に連れてきたのは、体面上の理由でだ。独断で動いたことに変わりはないからな」

「そんなの、納得できません」

布仏は珍しく食って掛かる。

彼女の優しさが、この場に居て罪に問われなことを良しとしていなかった。

だが、存在しない罪をでっちあげる理由もなければ、得もない状況で首を縦に振ることはあり得ない。

「まあまあ、落ち着いて下さい布仏さん。そもそも、布仏さんに罪があるのなら、諸悪の根源は私です。厳罰に処されるのであれば、布仏さんの罪も含めてということになる前提だと思えますし、気に病むことはありませんよ」

嗜めるように言う狭間だが、その内容は看過できないものだった。

あんまりな言い草に反論しようとするも、それよりも早く千冬が言葉を間に入れた。

「決めるのはこちらであって、お前達が決めることではない。——まあ、お前に考えがあるのなら、聞かない訳でもないぞ狭間」

「ありがとうございます。——そもそも私の指示がすべての原因です。一夏さんと凰さんの戦闘の意思を煽ったのも、椿さんを矢面に立たせたのも、私が勝手にやったこと。教師からすれば生徒に必要な以上に被害を与えたくないことは折込済みです。ただ、消極的な行動を取ればあの無人機が標的を変更する可能性があったこと、代表候補生である凰さんとIS操縦に慣れていない一夏さんの二人では、シールドエネルギーの消耗具合から見ても足止めは不適切だと判断し、椿さんには増援に向かつてもらった次第です。

幸いにも椿さんは次が試合だったこともあり、最終調整も兼ねてピット前の調整部屋にいたので、抜擢しました。彼女の實力は同じ二組同士ということで把握していました。その上で信頼を置き、託したんです。椿さんに非はありません。だから——皆さんに罰を与えるというのであれば、その責任は私がすべて負います」

狭間の言葉に、この場にいる全員が目を見開いた。

冷静で理にかなった回答で、口を挟む余地は殆どない。

だが、道理だけで完結出来るなら、感情なんてものは存在し得ない。

狭間の発言はただの自己犠牲だ。必要のない重荷を背負おうとしている。

彼のことを憎からず思っている友人達が、自らの罪を肩代わりしようと思えばどうなるか。そんなもの、考えるまでもない。

「なっ——それは違う！俺は狭間に言われなくても戦っていた！千冬姉が何と言おうと、あの判断には従っていないかった。だから、俺の罪を庇うのはお門違いだ！」

織斑一夏にとって、狭間はI S学園に来て唯一の男の友人で、最も気安い関係にある同士だ。

狭間は右も左も分からない自分を支えてくれた一人で、同じ境遇を生きるが故に話題性も強く、共感し易い。

恐らく、仲の良さで言えば中学からの付き合いである五反田弾と遜色ないだろうと考

えている。

だからこそ、そんな友人が身を挺して自分を守ってくれるという事実を許容できない。

「私も一夏と同意見。自分が間違ったことをしたつもりはないけど、上の判断もまた正当なものだつて理解しているし、罰が下るなら甘んじて受けるつもりだったわ。少なくとも、アンタに借りを作る気は毛頭ないわ」

鳳鈴音にとって狭間祐一はどこか気に食わない I S 男性操縦者だ。

初めての出会いが一方的な通信によるものだったこともあり、性格上ああいう扱いを受けるのは嫌いな彼女にとっては苦手な人物という印象を持っている。

そして、その印象は正しかった。

こつちの意見なんて度外視して、一方的に自分の罪まで背負って犠牲になろうとしている。

はつきり言って、彼女は苛立っていた。

自己犠牲なんて馬鹿をすることにも、彼にとって自分は守られる側の存在だと思われるていることにも。

女尊男卑なんて下らないものを引き合いに出している訳ではなく、彼女の勝気な性格が後押ししているだけで、本心では彼の助言には感謝している。ただ、それを口に出せ

ないだけで、心根はどこまでも優しい少女なのだ。

「狭間さん。切っ掛けは確かに貴方の後押しがあつたからかもしれませんが、私は道さえ整っていただければ我先に飛び出していました。貴方に言われたからではなく、私の信じる正義に従つたまで。だから、貴方が私を庇う必要はありません」

椿麻美は『正義』を基盤に行動を起こす性質にある。

世間一般における正しさを信じ、それ以外を悪と定義して行動する彼女にとって、此度の処断は煮え切らないものだった。

独断で行動したことは間違いなく、罪であることは明白。

だが、緊急事態だったこともあつて、結果論ではあるが被害を最小限に抑えることが出来、所属不明の無人ISの捕獲にも成功した。

少なくとも、罪状を帳消しに出来るぐらいの功績は上げている。

にも関わらず、学園側は罪のみを浮き彫りにして対応しようとしている節が見られる。

一年生がこれを期に増長しないようにという楔の意味もあることは予想は出来るが、これでは『正義』が『悪』と糾弾されているようで、だけど罪であることに変わりはない。

そんな思考が、理解と納得の板挟みに陥る要素となっていた。

納得出来ないなら出来ないなりに、せめて自らの罪は自らの物として決着をつけようと考えていた矢先に、狭間の発言が降ってきたとなれば、それを許容できる訳もない。それは、罪を友人に背負わせて自分はのうのうと日常を謳歌すると宣言するようなものだから。

千冬は悩んだ。

狭間を罰することはいい。事実、深い機密を知ってしまったからには、口封じの為に何かしらの対応はするべきであると踏んでいた。

だが、その内容が問題だ。

彼が全体の罪を一身に背負うとなれば、少なからずその内容は重いものになる。そうでなければ、他の教師陣が納得しない。

だが、これはあくまで非公式な集まりであって、処罰もまた表面上のものだ。

大げさに言えば、彼らは生徒達にとって自分達を護ってくれた勇敢な戦士だ。

事実、被害は建物だけで留まっており、人的被害は皆無。予想していない襲撃に対し、その程度の被害で済んだのはまさに僥倖と言える。

そんな功績を残した人間を罰するとなれば、一年生からすれば規則とはいえ納得出来ない問題だ。

問題はそれだけではない。

その罰せられる人間が、世界でまだ二人しか存在しない男性 I S 操縦者であるという点が、悩みを加速させている。

緘口令を敷く予定ではあるとはいえ、正式な軍隊でもないこの場においてそんな形のないものが効果を成すかなんて、現実的な観点から見ても期待できるものではない。

最初は噂から始まり、それが伝播して真実が広まるのも、時間の問題だろう。

処罰を一身に受けたのが男性操縦者の一人だと伝われば、今は学園では表面上はなりを潜めている女尊男卑が癌のように I S 学園を蝕んでいく可能性がある。

ならば全員に処罰を下し、平等さを訴えるか？

それはそれで、この非公式な処罰を公なものとする可能性を広げるだけだ。

早い段階で広まれば、不和も沈静化しない間に爆発の種となりかねない。

ただでさえ厳しい環境での生活、女尊男卑の象徴である学園に放り込まれた二人の男。不安をぶつける種としては十分すぎる火種だ。

情報規制を強いたところで、実害が出ればもみ消すこともできなくなる。

ましてや、その対象のひとりが唯一無二の身内に向くともなれば、慎重な対応を取りたくなるのも当たり前だ。

更には言えば、教師が生徒の避難やプロテクトの解除に人員を割いていたのも大きい。

事態を収束したのは学生で、護るべき立場にある教師がまごついていたことは、生徒

達の不安を煽ったことは紛れもない事実。

そもそもこんな事態になったのは、学園側の防衛システムが脆弱だったからと判断する者は少なからずいるだろう。

相手が何者なのかなんて関係ない。被害者からすれば、どんな理由でも納得できる材料にはならない。

各国からの代表から始まり、未来あるＩＳ操縦者を危険な目に晒すということが、どれだけ彼女達の痛くない腹を探らせる要因となるかなんて考えたくもないだろう。

これを機に何かしら付け入ろうとする輩も多い上に、秘匿すれば後々に響くかもしれないことも考えると、報告は仔細に行わなければならぬ。

隠せば膿となり、いずれほじくり返される時に余計な痛みを伴うことになる。

学生を通して各企業に伝わる可能性もあるので、どうすることもできないのだ。

これらを総合的に纏めると——詰んでいる、その一言に集約される。

一人に罪を集中させることも駄目、分散させるのも駄目、罪を不問とするのも駄目、そもそも罪を糾弾できるような地盤が整っていない。

どう足掻いても、こちらが不利になる。

狭間祐一を疑ってかかっている千冬からすれば、それはあまりにももどかしい結末だ。

むしろ、ここまで想定内なのでは？と云う疑惑さえ湧いている。もしそうなら——手綱を握っておかないと、マズい。

「——学園長」

「そうですね。処分に関しましては、追々話します。それでは、解散にしましょう」
「そういうことだ。これで解散とする」

「ま、待てよ千冬姉！そんな勝手な——」

「解散、と言ったのだ。織斑一夏」

千冬の有無を言わせない圧力で、一夏も口を閉ざさるを得なかった。納得のいかないまま部屋を後にする一同。

無言のまま廊下を歩き、閑散とした空気の中、再び一夏が口を開く。

「……なんで、こうなったんだろうな」

その呟きは、この場にいる全員の総意でもあった。

自分達が全面的に正しい行いをした、と自惚れるつもりはない。

それでも、この結果はあんまりではないか？と思わずにはいられない。

「学園側の面目を保つ為でしょうね。私達は単なる集団生活を強いられている訳ではありません。ISという圧倒的軍事武装を操縦できる、軍事力を育成する機関に身を置いている人間なのですから、それを自由な権利を与えてしまえば、それこそ国際問題にさ

え発展しかねません。軍のように頭ごなしに否定する訳でもないのですから、まだ甘い方ですよ」

モンド・グロツソなんて競技が存在していることもあつて一般人は忘れがちになるが、その本質は数年前までの軍の形態を悉く破壊した、革命の兵器である。

そしてIS学園もまた、ISの競技用訓練所なんてお題目で成り立っているが、その実ただの軍人養成所と大きな違いはない。

それこそ、未成年で学生である彼らが大手を振つてISを操縦するには、軍事施設はあまりにも政治的になりやすい。

便宜上、なんて甘い言葉の裏には、そういった汚い理由がびつしりと敷き詰められている。

その為、第二の軍事施設の入隊者として、兵器を扱う者には当然責任を背負う義務がある。

ましてや、誰にでも扱える訳でもない、特別な存在のみが扱える兵器となれば、狭間の言う通り此度の扱いは温情にまみれていると言つてもいい。

IS同士ならまだ命の保証はある程度は約束されるかもしれないが、それがいざ無力な人間に向けられるとなれば——想像するまでもない。

だからこそ、厳しくするだけしても満たされるといふことはない。

啞えて、女尊男卑なんて風潮の存在も相まつて、馬鹿な女を増長させない為にも罰を与えないということは決して有り得ない。

「だからつて、ユウ君が罪を全部背負うなんて」

「学園長を初め、今回の問題に關つた大人は私達の行いに対して、責任と同じぐらいの罰を受けることになるでしょう。政治的にも、今回の騒動は下手をすれば国際問題に発展する所でした。言い方は悪くなりますが、ただISを使えるだけならともかく、代表候補生のような国家の代表が、外的要因によつて負傷したとなれば、その全責任はIS学園が負うことになります。未遂で済んだとはいえ、怪我がなかつたからセーフ、なんてことにはなりません」

「それが、狭間さんが罪を背負うことと何の關係が——」

「——私も、大人です。一年生のクラスにいるから忘れがちになるかもしれませんが、私は貴方達よりも大人なんです。ならば私も同様に、貴方達の罪を背負う義務があります」

「そんなの屁理屈よ！大人つて言つても社会人でも何でもなければ、ここではいち生徒なのよ！それを大人と同じ基準で考えるなんて、絶対におかしいわ」

「私は二人目の男性操縦者で、あの襲撃問題を除けば今回の騒動の大半の罪を担つてい

るのですから、お偉方からしても、私は格好の的なんですよ。ですが同時に、下手な扱

いはされないという確信もあります」

世界にたつた二人の男性 I S 操縦者の内の一人ともなれば、その待遇は破格なものになる。

今でこそ I S 学園というあらゆる国家干渉を許さない国際規約が施行されている施設に身を置いているが、一度外に出ればそれだけで国家政治を揺るがすことになる。

どの国が所有権を得るか。話し合いで完結すればいいが、下手をすればそれだけで小規模な戦争が起こるかもしれない。

最悪、モルモットの扱いを受ける結果にさえなりかねないが、可能性は限りなく低いだろう。

更に言えば、狭間祐一は現在どの国家の代表でもない、完全なフリーな状態。

国家のどこかしこも彼と繋がりをもちたいと考えている中、下手なことをすればそれが壁となって計画を阻害するかもしれない。

学園側からしても、彼の扱いひとつで政治が揺らぐことを思えば、如何にここが外部からの干渉を絶っているとはいえ、後々を思えば下手を打つことは出来ない。

その結果、学園側からも国家側からも迂闊な干渉は出来ないという確信が出来上がっていた。

「そんな都合よく行くかしら」

「何にせよ、決めるのは学園側です。私の直訴も虚しく、みんな仲良く罰を受けるなんてことも普通に有り得ますし、あまり気負った所で仕方ないですよ」

「自分事なのに、随分軽いね……」

布仏は諦めたように溜息を吐く。

とはいえ、最早彼らに出来ることが何も無いのは事実。

国際問題レベルの出来事に一介の学生が干渉した所で、無駄に引つ掻き回すだけで、損をする可能性は高い。

だから、信じるしかない。出来るだけ穏便な未来が訪れることを。

——そして、数日後。

狭間にのみ言い渡された罪状はこうである。

『罪状：I S学園における秘匿設備の無断使用並びにそれを利用した人的被害の増長未遂の罪で、学園在籍中の生徒会を通しての無償奉仕を義務付ける』

第八話

自室にて、私は明日の授業の準備をしながら、同じく準備をするユウ君を横目に観察する。

その表情に影を差した様子はなく、いつも通りの万人受けしない好青年さが滲み出ている。

今日、彼の口から出た先日の襲撃事件での独断行動から下された罪状。

それは、予想通りな未来でもあり、願わくば叶ってほしくない泡沫の夢だった。

私は、狭間祐一の監視を命ぜられている。

命令したのは、更識楯無。更識家の現当主で、私はその部下のような立ち位置にいる。そもそも布仏は、代々更識に仕えてきた家系で、更識の深いところまで関わりがある。更識は裏工作を実行する暗部に対する対暗部用暗部という、暗部に対するカウンセラーの役割を担っており、私達布仏はそのサポートが主な仕事となっている。

深部から這い出る闇を地上に上がらせない為の抑止力。それが更識と布仏の存在意義。

布仏以外にも支援する組織や分家は存在するが、一代目から継続して繋がりを保って

いるのが、布仏ただひとつだけで、それ故に繋がりも深い。

そして、更識と布仏が持つ『特殊』な力。

人間が持ちえない異常な力を発揮することが出来る、稀有な存在。

私達はその力を『ドライブ』と呼称している。

私のドライブ能力は『オブザーブ』。簡単に言えば、見えないものが見える力だ。

この解釈だと、真っ先に幽霊を連想すると思うけど、実際は違う。

言うなれば、情報の可視化だ。

例えば、目の前にユウ君の好物であるゆで卵があるでしょう。

普通なら、食べて美味しいとか、見て形がどうだとか、そのぐらいしか人間は判断す

ることは出来ない。

しかも、それは個人の主観によって左右される、酷く曖昧なものだ。

しかし、私がドライブを発動させると、五感では判断できない情報も含めて、ゆで卵というカテゴリの物体のあらゆる情報が、ゲームとかで言うウィンドウ画面みたいな感じで表示されるのだ。

味とかに關しても、一応成分から糖度や酸性やらの数値でおおよそ把握することも出来る。それを私がどう捉えるかは別として。

因みにドライブを発動すれば何でも見えるようになるのではなく、その後を意識に指

向性を持たせないと見ることは出来ない。

逆に言えば、見たいものを意識さえすれば、大抵のものは見ることが出来る。それこそ、概念のように物理的に見えないもの以外なら。

そんな私のドライブは、主に諜報活動などで重用されている。

相手の喋っている言葉に嘘偽りないかどうかを、ドライブによつて発汗量や瞳の明度などで判断できる。

どんなに取り繕うのが上手い人間でも、脳の信号を思い通りに操ることは不可能。

サイコパスのように精神疾患を持つ人間でもない限り、読み違えることはまずない。だからこそ、言える。

狭間祐一——ユウ君は、織斑先生が考えているような危険人物ではない。

可能な限り行動を共にし、彼の行動は常に観察してきた。

ドライブを発動するとディスプレイという特有の信号が出るらしいけど、その事実を知る人がほほいしない上に、その信号はドライブ能力者以外には感知できないものなので、バレる心配はない。

謎の力だけど、その効果は身をもって体感している。信用の裏付けがあるからこそ、ユウ君の無実も証明できる。

お嬢様——更識楯無には私の見解は逐次報告している。

私の過去の成果も相まって、彼女のユウ君への不信感は薄れつつある。

立場もあるから全面的に信用する、ということも出来ない上、あの織斑千冬が警戒するように促したのだから、それも後押しして警戒網を解除できないでいる。

そんな板挟みな立場のユウ君に襲い掛かる、今日の罪状。

織斑先生の露骨な監視の目を広げる為の横暴な文字の羅列を見たときは、流石に怒りを覚えそうになった。

言質を取った、と言わんばかりにユウ君の思い通りになつていた所を見る限り、ユウ君にとっては計画通りなんだろう。

確かに、ユウ君の行動は私では理解できないことばかりだ。

何かを調べるといふことにおいて、あそこまで優れている人物は私の身近にもそうはいない。

それを一般人だ、と言うには無理があることも理解できる。

正直、私もこの力がなければ疑い続けていただろう。それぐらい、ユウ君は異質。

立場的には楯無の味方でも、心は中立。いや、どちらかと言えばユウ君寄り。

こんな浅ましい理由で友人として接している罪悪感が、私を蝕む。

時間を共有し、人となりを知ったことで心の底から寄り添いたいと思えるようになって、切っ掛けが切っ掛けだけに心がストッパーになり、一步を押し留める。

他人を騙している自分が、友人なんて崇高なものを得る資格はないんだと悪魔が囁く、そんな夢に見たことさえあった。

そして夢から覚めた時、心配そうに手を握ってくれていたユウ君を見て、より罪悪感が高まっていく。

咎人には、泡沫の夢さえ贅沢だとも言うのだろうか。

「……どうしました？」

「え？」

「思いつめた表情をしていたものですから」

糸目を吊り下げて、憂いを帯びた表情をするユウ君。

慌てて取り繕い、自分なりの笑顔を作る。

この笑顔も、他人の心象を良くする為に教育された産物に過ぎない。

布仏として生まれた自分は、どこまでも楯無に奉仕する為の存在でしかない。

そんな自分を嫌になったことはないが、それでも一般人としての人生を過ごしていた可能性に思いを馳せたことぐらいある。

そんな情景を仮初の笑顔で塗り潰し、自己を確立する。これからも、そんな生き方をしていくのだろう。

「何でもないよ。それよりも、ユウ君の方こそ」

「過ぎたことですよ。それに、在籍中は部活に所属しようと考えてましたし、疑似的とはいえ生徒会に所属出来るのであれば、願ったり叶ったりですよ。それに、これでも前の学校では副会長をやっていましたし、迷惑を掛けるということもありませんよ」

「そんなことが聞きたいんじゃない……!!」

続けようとした言葉は、私の唇に添えられた彼の人差指によって遮られる。

蜜のような笑顔が、私の中の何かを揺さぶる。

「あまり私を困らせないで下さい。先程も言いましたが、過ぎたことなんです。反抗すれば立場も悪くなるでしょうし、この程度で済んだのですから寧ろラッキーぐらいに思わなければバチが当たるといふものです」

唇に残った指の感触の残滓を想起させながら、上の空で彼の言葉を耳に入れていく。

何だろう、胸が苦しい。でも、どうしてか辛くない。

「それに、知り合いが一緒だと気持ちとしても楽ですし、悪くないですよ?」

「そう言ってくれるのは嬉しいけど、私ただの役立たずだよ? 仕事増やすだけの」

「一緒にいることに意味があるんです」

「……そこまで言われたら、しょうがないな。私が先輩として、手取り足取り教えてしんぜよう——!」

「お手柔らかにお願いしますよ」

暗い雰囲気を取っ払い、笑顔で場の空気を和ませる。

いつもやってきた打算的な笑顔なだけに、淀みはない。

たまにはこんな笑顔も役に立つんだと、少しだけ報われた気がした。

それに、ユウ君が逆境に立たされるのであれば、私がそれを支えればいいんだ。

幸いにも、私も生徒会に所属している身。その上、例の任務も継続中とあれば、四六

時中一緒に居ても違和感はない。

ユウ君は突拍子もない行動を取る傾向があるようだし、今度こそ私がストップパーになつてあげないと。

「さて、そろそろ寝ましょう。明日は合同訓練の日ですから、しっかりと休んでおかないと」

そう言つてユウ君は制服を脱ぎ、首元に手を掛けて、何かを取り外す。

「あれ、それつてネックレス？」

「ええ。付けていること、知りませんでしたっけ」

「うん」

「まあ、普段は電気消した時に外してますし、見てなくても無理はありませんか」

銀のチェーンと二頭の蛇が天に昇るように絡み合う装飾が施されたそれは、不気味なぐらいにリアルかつ精巧に作られており、見ただけでどれだけの価値があるかが分か

る。

「でも意外かな。ユウ君オシヤレとかに疎そうだから」

「言つてくれますね……まあ、そうなんですが」

肩を落としながら、ベッドに腰掛けて神妙な面もちで語り始める。

「そう、ですね。これの説明をするには、まず私の身の上から語らないといけませんね」

「……………」

「私、孤児なんですよ。多分」

突然のカミングアウトに、目を丸くする。

でも、おかしい。更識が調べた情報では、彼の出生はごく普通の一般家庭だって――

「え、つと。多分つて、どういうこと？」

混乱する頭を必死に動かし、疑問を投げかける。

これは、聞かなくてはいけない問題だ。

でも、決して任務が関わっているからじゃない。

単純に、知りたかったから。彼の過去を、ここにいる人達が知らない”特別”を。

「記憶がないんです。五歳、いえ、六歳でしょうか。それ以前の記憶が一切ないんです」

「ん……そのぐらいの年齢なら、忘れてても何ら不思議じゃないと思うよ？」

「いえ……思い出せないのは最近からではなく、最初から――それこそ五歳か六歳の頃

から、自覚していたんですよ。記憶がないことにね」

……『オブザーブ』で調べた限りでは、嘘は言っていない。

だけど、五歳ぐらいの頃から明確に記憶というものを自覚出来るものだろうか。

物心がつくのは速くても小学校低学年がせいぜいと聞くと、それを踏まえて考えると、記憶がないという実感も加味して、ユウ君が如何に幼い頃から優れた人間だったかを物語っている。

先の淀みない端末の操作と暗部さえ舌を巻く情報収集能力を知っている身からすれば、その才能の存在を違和感なく受け入れることが出来た。

同時に、千冬先生が彼に執着している理由も、少しだけ理解出来てしまった。

「一番最初の記憶は、親代わりであり年の離れた姉でもある、白金碧との出会いです。私
が孤児だということも、彼女から聞きました」

「白金……？ 姓は違うようだけど、それと白金さんとの関係は？」

「姓が違うのは、私がそうしたいと頼んだからです。碧さんは、遠い親戚です。裏も取れています」

「そうしたいって、思い入れでもあったの？」

「……そう、ですね。そうしなければならぬ、と幼心に何故か思ったんでしよう。碧さんも快諾してくれましたし、頭が上がりませんよ」

「いいお姉さんなんだね」

「はっ」

優しい笑顔で白金碧のことを語るユウ君。

碧さんに軽い嫉妬を覚えたのと同時に、碧さんに向ける笑顔を、いつか私にも向けて欲しいという欲望も沸いて出た。

「それで、もしかしてその物心つく前から、ネックレスを持っていたとかそんな感じ？」
「察しがいいですね。名も姿も知らぬ父母が同情心から与えたものなのかさえ分かりませんが、面白いことにこのネックレス、持っていた当初からチェーンが今のサイズのままだったんですよ。子供だった自分にはつけられず、この数年でようやく身に着けることが出来る程度に成長したので、こうしてつけ始めたんですよ」

「へえ……本当にお父さんのものだったりして」

確かに、ネックレスのチェーンはアクセサリー部分が服に隠れる程度には長く、子供がつければ不格好なんてレベルではない。

だから今まで存在に気付かなかったんだろう。下手な装飾は教師に怒られるかも、という考えもあつたのかもしれないが。

思わず、まじまじと見てしまう。

このネックレスが、ユウ君さえ知らない誰かとの絆の証明かもしれないと思うと、興

味を抱かずにはいられない。

——それこそ、『オブザーブ』を無意識に発動させてしまう程度に。

「——ツツツ!!!」

飛ぶように後ろに下がり、震えた足では体重を支えられず、思いきり尻餅をつく。

その痛みなど意に介す前に、こみ上げてくる吐き気を必死に堪えることに気を向ける。

いや、そうすることしか出来なかった。

意思とは無関係に反応する肉体を、どうにかして止めようと感覚で抗っているに過ぎない。

あのネツクレスから見えたものは、普段の機械的な情報ではなく、もっとシンプルな情報。

——いや、違う。そんな記号的なものじゃない。

脳を直接揺さぶる程の意思が込められた、悪意の真言。

憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎

憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎

憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎

憎憎憎憎憎憎憎憎

憎憎憎憎憎憎憎憎

憎憎憎憎憎憎憎憎

憎悪

憎憎憎憎憎憎憎憎

憎憎憎憎憎憎憎憎

憎憎憎憎憎憎憎憎

憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎

憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎

憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎憎

知覚時間にして、コンマ一秒にも満たなかった。

それでも、肉体は無意識に震え、汗は吹き出し、吐瀉物を止めることだけで精一杯。

情報なんて軽く塗り潰されるぐらいに、あのネックレスには憎しみが込められている。

呪いなんて生易しいものじゃない。あれは、そんな陳腐な言葉では言い表せる

これじゃまるで、この世全ての悪意の具現だ。

恐らく、ユウ君はそお事実気付いていない。気付いていて、こんなものを大事につける訳がない。

私だけにしか見えない、私だけの秘密。それは決して、共有すべきではないという意味でも、ユウ君へ向けられる感情が墮落しない為にも。

「だ、大丈夫ですか？」

「う……うん、ちよつと、気分悪くなっただけだから」

どこまでも心配そうな声色と、壊れ物を扱うように摩る掌の暖かさが、私の中にあつたユウ君の疑念を解きほぐしていく。

このやり取りが演技だなんて思えない。事前の『オブザーブ』の裏付けもあるけど、布仏本音として彼と過ごしてきた僅かな時間が、彼のことを信じたいと思つてしまつてい

る。道理とか理屈とか、そんな正道でこの感情は否定させることは出来ない。

信じたいから、信じる。その結果私が破滅しようとも、それは自業自得であつて、同情的余地はない。

でも、もしユウ君が織斑先生の懸念通りの存在だったとしたら——その時は、私が止める。絶対に。

「ちよつと、失礼しますよ」

前置きを入れ、おもむろに私をお姫様抱っこするユウ君。

突然の行動で嬉し恥ずかしな状況に陥つているとはいえ、私自身が絶不調なこともあつて、そんなことに気を回す余裕はなかつた。

ただ、その瞬間覚えていたことは、彼の一挙動から滲み出る他者を慈しむ精神だけ。

それもまた、私の主観からくる認識でしかなく、絶対とは言い切れない身勝手な願望に過ぎない。

だからこそ、この感情を大事にしたい。

なまじ『オプザীব』なんて言う疑似的な思考透視までも出来る能力を持っているからこそ、自分の眼で見て、感じて判断すると言う”当たり前”を大事に思えるようになった。

能力を使っておいて何て言い草だと自分でも思う。

でも、使わなければこうやって思い返すこともなかった。皮肉な話である。

「ありがとう……」

優しくベッドの上に降ろされると、その柔らかい感触がまどろみを誘ってくる。

「いえいえ。それと、明日は休みにしますか?」

「ううん、大丈夫。明日は生徒会にユウ君が招かれる日だから、休んでなんていられないし」

そう、明日は罪状に従い生徒会に参加する為の、顔合わせにあたる日。

ただでさえ悪印象が広がっている生徒会という環境に、たった一人で飛び込ませる訳にはいかない。

大っぴらに味方をする事は出来ないけど、せめてフォローぐらいはしないと、ずる

ずると深みに墜ちていきかねない。

悪意は簡単に拭えず、善意は仮に勝ち取れど失うときはあつという間。

支え合わないと生きていけないのが人間だというのに、現実他人を食い物にして他者を蹴落とし、敗者を石畳に足を固めることばかり考える。

裏社会ではザラな出来事だけど、見えていないだけで表もこんなものだと、諦めはついている。

はつきり言つて、それは更識楯無も例外ではない。いや、身内だからこそ、ということもある。

——だからこそ、一度信じた人間は裏切りたくない。

お姉ちゃんである虚と、楯無の妹で目付け相手でもある更識簪には結構心を許しているが、事情を知っているという観点から、心が無意識に全面的に信用することを自制する。

そんなことをすれば、私はどこに行つても独りぼっちになるって分かつていたのに、臆病な私は笑顔という仮面で一步引いた距離を保ち続けた。

欲にまみれた打算を目の当たりにして辟易していた癖に、ユウ君に求めるものは同じエゴだなんて、笑い話にもならない。

私も所詮、都合の良い選択ばかりに身を預けようとする愚か者に過ぎない。

「……分かりました。言っても聞きそうにありませんし、許可します。ですが、万が一があると困るので流石に一夏さんぐらいには軽く事情を説明させてもらいますよ。それが条件です」

「分かったよ……心配性なんだから」

「心配するに決まっています。大事な友人が不調を訴えている中、それでも行動しようとしているのですから、本来ならベッドに縫い付けてでも止められても文句は言えませんよ?」

「そんなロマンのないベッドインは嫌だなあ」

「だったら、明日には元気になつていなさい。本当に軽く気分が悪くなっただけなら、寝て起きれば治っています」

「うん、だからもう寝るね。おやすみ」

「はい、おやすみなさい」

ベッドの温もりに身を預け、意識を落とす。

ユウ君に見守られて見る夢は、とても穏やかで心安らかなものだった。

——でも、その安らぎが所詮現実逃避だったことに気づかされるのは、そう遠くない未来の話。

たら、れば。なんて意味はない。だけど、思わずにはいられない。

どんなことをしてでも、あのネックレスを壊しておくべきだった、と。

第九話

「ここが生徒会室だよ」

布仏さんに連れられて、私は離れにある生徒会室の入口前まで足を運んでいた。

「生徒会室や校長室ですが、どうしてこう人目に付きにくい場所にあるんでしょうね」
「ここに来ての第一声がそれって……まあ、業務上の関係だと思おうよ？」

「それは分かりますが、生徒会も校長もそのせいで遠い存在だと勘違いされている気がします。私も生徒会に所属していた身だからこそ言えるのですが、生徒の為に働く為の組織が生徒と疎遠になるなんて本末転倒じゃないですか？確かに生徒会のメンバーなら生の声を聴くのは難しくないかもしれませんが、それでも遠い存在だと思われることに変わりはありません。そんなことではいけないと私も常々頭を悩ませて粉骨碎身していたのですが……」

「ああ、はいはい。分かったからそろそろ行くよ」

以前の高校での副会長としての思い出を語っていると、背中を軽く押されてそのままの勢いで生徒会室に乗り込むことに。

立ち止まる気はなかったのですが、やはり連れてこられた事情が事情だけに少し緊張

しているのでしょうか。

いや、違う。きつと、端役とはいえまた生徒会に携われることが嬉しいのだ。

第二の男性操縦者、I S 学園への入学、女性ばかりの環境、軍隊のような訓練——どれをとっても非日常で、充実してはいたけれど、どこか物足りなかつた感じは確かにあつた。

急激な日常の変化に、私自身未だに追い付けていないからこそ、生徒会という日常の残滓に惹かれている。

二度と取り戻せない日常への回帰を望む反面、理性はどこまでも現実を見据えている。

心と身体が互い違いだったという事実さえ、今になって気付く程に自分が見えていなかったのかと思うと、情けないとしか言いようがない。

「あら、慌ただしい登場ね」

布仏さんが体重を掛けてくるものだから、たたらを踏みながら部屋に入ると言う愚を犯してしまった。

しかし、目の前に現れた——彼女からすれば私達が現れた側なんでしょうが——毅然としつつも笑みを浮かべる女性は、微笑ましいものを見るようにそう呟くだけに終わる。

「あはは……申し訳ありません」

「ユウ君がずっと動かないのがいけないんだよ？」

悪びれもしない布仏さんを取り敢えず背中から引き離し、背中を伸ばして目の前の女性と向き合う。

「初めまして、でいいかしら。私は更識楯無。二年生でこの学園の生徒会長を務めているわ」

「そして、私が生徒会会計の布仏虚、その不肖の妹の姉です」

——ぬるり、と這いよるような音が錯覚で聞こえた気がした。

錯覚の先に視線を向けると、この場にいなかった筈の眼鏡の女性が綺麗な礼と共に挨拶をした。

「お姉ちゃん、それは酷いよー」

「曲がりなりにも生徒会の一員であり、先輩でもある貴方がいきなり馬鹿をやらかさなければ、普通の紹介で済んだのだから自業自得よ」

締まりのない雰囲気には些か茫然とするも、どうにか話題を元に戻そうと咳払いで注目を集める。

「えっと、お初にお目にかかります。名前だけ知れ渡ってはいるでしょうが、改めて自己紹介させていただきます。狭間祐一と申します。一応、二人目の男性IS操縦者という

肩書を持っていますが、実際それだけです」

「ええ、よろしく」

楯無さんと握手を交わす。

虚さんの値踏みするような視線が多少居心地悪く思えたが、新参者でしかも良い情報を持たない相手ともなればこれでも生温い方だと納得する。

「それにしても謙虚ね。まあ確かに、織斑一夏君のように特別な話題性がある訳でもなければ、専用機もない訳だし、そう思っても不思議じゃないけど」

「別段有名になりたいとも思ってもいませんし、彼の影に隠れるならそれはそれでいいかと」

「……だから、彼の補助に回っていたの？セシリア・オルコットの時や、襲撃事件のよう

に」
「別に彼を矢面に立たせて隠れ蓑にするとか、そんなつもりはありませんよ。彼は望む望まざる関係なく、時の人となる存在となります。しかし彼はこの時代にまるで追い付いていない。覚悟もなければ信念もなく、ただ巻き込まれただけの一般人に毛が生えた程度の温い思考しか持ち合わせていません。だからこそ、共感できる立場の自分が、彼を支えていかなければならないんです。たとえそれが、どんなに一夏さんにとつて苦しいものであろうと、逃げる事が出来ない以上、立ち向かう力を与えなければなりません

ん。それが、彼よりも大人であり、同じ目線に立てる私の役目です」

私の語りを、静かに三人は見守っている。

我ながら奉仕観念が強いというか、上昇志向がないと言いますか。

楯無さんも、どこか私を珍獣を見るような目で見ているのも、やはりその普通とは違う考えを当たり前に言う自分が理解できないからに違いない。

「自分が成り上がるうとは思わないの?」

「私はどこにでもいる一般人Aです。一夏さんのように知名度のある話題性がある訳でもなければ、専用機さえありません。どんなに頑張っても、彼と違って二番手でしかない私は、これからも出てくるであろう男性操縦者と同じ、その他大勢にしかなり得ません。決して一番になれないのであれば、彼を支えた者としての立場を確立した方が、まだ日の目に当たる可能性はあると思いますよ?まあ、そんなつもりで接触したわけでもないんですけど」

「結局、貴方は野心があるの?ないの?」

「——私の夢はですね。定食屋でよくあるトンカツ定食をいつでも気兼ねなく食べられるぐらいの給料が稼げる職に就いて、平凡でも家族を大事にしてくれる女性との子供を授かり、そんな家族に見守られて老衰で逝くことなんですよ。もしその夢の妨げになるのであれば、名声なんて必要ないと思っていますし、その考えはこれからも変わるこ

はないでしょう」

「……欲があるのか、ないのか分からない夢ね」

呆れた、というよりも毒気が抜かれたような表情で嘆息する楯無さん。

「欲張りだと思えますよ？何せこの中のひとつでも欠けてもいけないのですから」

事実、平凡というのは最も近けれど、決して手を伸ばせば容易く手に入るものではない。

仮に腕に抱けど、些細なことですり抜けていく。

私が今ここにいるということ自体が、そのすり抜けた末路であるのだから、夢はとうに破れていると言われても仕方がない。

とはいえ、そう簡単には諦めるつもりはない。

立場が変わったなら変わったなりにやるべきことをやるだけだ。

「取り敢えず、貴方のことは少しでも理解出来たと思うし、話を続けましょう」

更識さんは手を叩き仕切り直しの合図を送り、資料を手取る。

「この度貴方がここに派遣された理由は聞き及んでいるわ。けれど、それを傘に無理無茶を要求するつもりはないわ。拘束期間が明確に記されていないこともあって、一般生徒を生徒会の一存で奴隷のように利用しているという風潮が広がるのはたまったものじゃないしね」

「ましてや、I S学園の代表たる私達生徒会が、男性を貶める扱いをしようものなら、その流れに生徒達も乗ってしまいます。それはこちらとしても本意ではありません」

「予め言っておくけど、私は生徒会長でI S学園の生徒代表とはいえ、男性を見下しているとかそういうのは一切ないから。というか、そんな風潮に踊らされている人達を見下しているわね。馬鹿馬鹿しいったら」

「踊らされていると言うよりも、しがみついていると言った方が正しいですね。古来より続いてきた男性優位の思想からの逆転が実現したのです。その威光に縋るのも無理ないかと」

虚さんが溜息を吐く。

「やってることはハイエナそのものだけだね。適正の関係で女にも格差があるのに、あたかも男性だけが無能の烙印を押されているのを見ていると、同じ女として恥ずかしいッたらありやしない」

「お嬢——会長は生徒会長だから、余計に思うところがあるんですよ〜」

「ん？生徒会長だからとは、どう話題が繋がるのですか？」

「ふふーん。それはね、生徒会長は——I S学園での最強の称号でもあるからよ！」

楯無さんはキメ顔でそう言った。

「……まあ、I S学園の頂点が弱いと面子が立ちませんからね」

「一部弱い部分があるのは否めませんが」

「あはは……」

「え、何その優しい目。ちよつと、虚も本音もやめて、やめてください」

いや、それは無理だろう。

だって、あまりにも微笑ましすぎる。

「ごほん！兎に角、うちはえこひいきなしのクリーンな活動をしているから、そこんところは気にしなくてオツケーよ」

「あ、はい。それにしても、書記二人ついている意味あるんですか？」

「ないことはない、けど……代理なら役職無くても出来るし……」

「というか、副会長は不在なんですか？今更な疑問ですけど」

「あー……副会長はいないんだ」

何とも言えない表情で布仏さんが答える。

「はい？」

「あー、えつとね。生徒会長は強さの証みたいに捉えているものだから、必然的に副会長の座は自分の認めた人じゃないと駄目みたいなことを言つて……」

「ああ……」

チラリと楯無さんの様子を窺うと、明後日の方向を向いていじけていた。

「なるほど、アホの子なんですね」

「おいこら、聞こえているぞ」

「聞こえるように言いましたから」

何というか、彼女への接し方が少しだけ分かった気がする。

「はい、アホの会長は置いておいて、建設的な話をしましょうか」

「二度も言った！泣くぞ、しまいにや泣くぞ！」

ガチで涙目になり始めたので、そろそろ弄るのはやめておきましょう。

「うう……なんでこんなに乱されるの……？」

「流石に言いすぎました。申し訳ありません」

「……許す。生徒会長は誰かさんと違って心が広いからね」

とか言いつつ、完全に根に持っていますよね。まあ、自業自得なんです。

「取り敢えず、貴方は入りたてだから、まずは基本的な事項を学んでもらう必要があるわ。難しいことは何にもないから、一週間あれば慣れるでしょうね」

「そうですか。これでも以前は生徒会に身を寄せていましたので、多少は戦力になるとは思いますよ？」

「あらそう？ならそれなりに頼らせてもらうから、そのつもりでよろしく」

「お手柔らかにお願いしますよ？」

「はっはっは。駄目よ」

「そんな……この世に神はいないのですか!？」

「神に縋るな! 大地を踏みしめ、足掻きもがくからこそ人は美しいのだ! 家畜に成り下がりがたくなりたくば、己が意思で未来を掴み取れ!」

「それは強者の理屈です! 貴方の理屈では、弱き者には生きる価値がないと言っているようなものではないですか!」

「弱者が淘汰されるのではない、抗うことを諦めたものが消え行くだけに過ぎない。泥を啜つても、草を食んでも生きること諦めなければ、それは確かな未来への一歩になる!」

「人は理屈で生きていてるのではない!」

「理に沿わなければそれこそ弱者は食い物にされるだけだ!」

「……なにやってんの?」

楯無さんと私の世界に、冷めた声で布仏さんが介入してくる。

「何って……ノリでなんとなく」

「私も」

「あ、そう……。まあ、仲悪いよりはいいかもだけど」

今度は布仏姉妹に呆れた視線を私達二人が受ける羽目になった。

「止めてください布仏さん。その視線は私に効く」

「情けないわね、これぐらい私は慣れっこよ」

「寧ろ会長が一番情けないです」

「何故!？」

そんなノリが終始続き、良好な雰囲気のまま初の邂逅は終わりを告げた。

「……ふう、道化を演じるのも楽しやないわね」

狭間祐一が本音と共に退室したのを見送り、デスクチェアに身体を預けながら天を仰ぐ。

「お疲れ様です」

虚が淹れてくれた緑茶の渋みに舌鼓を打ちながら、資料を読みふける。

その中身は、狭間の経歴が載せられた資料だ。

「直接話してみて感じたのは、掴みどころがないって所かしら。意図的か偶然か、初の対面があんな滑稽なスタートだったせいで、私の中にあつた警戒心が確かに一瞬揺らいだわ。その後の会話にしても、人の好きそうな笑顔とどこまでも自然体な行動。何も知らない人間なら、一瞬で籠絡されそうね」

「事実、彼は年齢だけで言えば三年生です。一人だけの男性という相乗効果も相まって、本来なら打ち解けるのに時間が掛かると思っていたのですが……予想を上回る速度で人心掌握をしましたね」

「それが本来の人柄が成すものだとするなら、大歓迎なだけだね」

「あの子の——本音の話を聞く限りでは、彼に悪意と呼べるものは感じられないと」

「だけど、あの千冬さんが未だに警戒を解いていない。どちらも信用したいけど、どちらも信じるに値するのよね」

「本音にはドライブがありますが、織斑先生のは完全に直感じゃないですか」

「あのね、直感は馬鹿に出来ないのよ？プリュンヒルデになれたのは、あの人が単純に強かったからだけでなくて、運とか第六感とかが優れていたってことも間違いなく要因になっているわ」

「オカルト的な要素も含めて、最強である？」

「ドライブだって、知らない人からすればオカルトよ。人間の潜在能力、という意味ではドライブもまた、シックスセンスみたいなものじゃない？」

「……そういえば、ドライブについてあまり考察したことはありませんでしたね」

「そもそも私達が勝手にそう呼んでいるだけで、この力が一体何なのかはつきりしていないものね」

「と言うよりも、更識の歴史を遡るにしても、あまりにも膨大過ぎるせいで時間が足りなさすぎます」

「そうなのよねえ……」

更識の起源は、かなり深い。

私が十七代目当主だと言う事実だけでもそれが理解できるだろう。

たかだか高校二年程度の人生しか歩んでいない小娘では、周囲の協力があろうともそうそうこなせるものではない。

そもそも、暗部へのカウンターとして存在している更識は、信頼出来る人物以外懐に置くことはない。暗殺やスパイが介入する余地を防ぐためである。

故に、自分の手足のように使える人材は限られている。それだけの事に人材を費やせる訳もない以上、調査が頓挫するのは必然だった。

「初代当主なら間違いなく理解していたと思うけど、今代に至るまで分かりやすい形で纏められていなかったのは、初代以外ともに理解できていなかったか、或いは——」

「——確信に触れる内容に触れさせない為に、敢えてしなかったか、ですね」

いつの間にか空になっていた湯呑に新たにお茶を注ぎながら、虚が私の考えていたことを告げた。

「明らかに異常な力ですもの。それぐらい警戒していても不思議じゃないわね」

「そうですね。狭間さんも私のドライブ能力に多少なり驚いていたようですし、彼自身からもディスプレイが観測された様子もありませんし、ドライブに関しては全くの無理解だと確定してよろしいかと」

「それでも、色々疑念は残るけどね。それは追々分かることでしょう、私達もいることだしね」

「そうですね、あの子だけに負担を強いるのも流石に限界でしょうし」

「それにしても——」

ふと、彼が語った夢を思い返す。

どこまでも質素で、どこまでも欲にまみれた夢。

矛盾した理想はどこまでも人間のエゴを象徴しており、故に好感が持てる。

相手の目を窺って綺麗事ばかり吐く権力者と比べて、欲望まみれだろうが素直な人間の方がまだ信用できる。

とは言え、それも彼の言葉が真実であることが前提になるので、結局の所私達の裁量次第なのだが。

でも——私も、そんな生活に憧れを抱いたことはある。

慎ましくも幸福な生活。それは、一般人としての人生に他ならない。

暗闇を常に見続けて生涯を終えなければならぬ私にとって、その淡い光はどこまで

も眩しく映った。

嫉妬も羨望もない。どこまでも平坦な感情だけど、ふと脳裏を過ることがあるのは、振り切れていない証拠。

更識楯無に、人並みの幸福は不要。どこまでも深淵に身を委ねる覚悟だけさえあればいい。

「どうしました？」

「何でもないわ。彼の夢があまりに普通なものだったから、ね」

虚の怪訝な表情を振り切るように、話題を逸らす。

「定食屋のトンカツって、だいたい千円ぐらいですよね。それを気兼ねなくとなると、中流階級より少し裕福ぐらいでしょうか」

「真面目に考えなくてもいい。——ま、兎にも角にもこれから次第つてところでしょうね」

「そうですね」

「鬼も蛇も出て欲しくないので本音だけど……真実に至るのは時間の問題ね。せいぜい道化芝居を楽しませてもらうわ」

私相手に物怖じしないのは、逆に都合がいい。

距離が近ければ近いほど、本質が見えやすくなるのだから、利用しない手はない。

皮算用を立てていると、虚が読めない表情でぽつりと呟く。

「……でも、あの時の涙目はガチでしたよね」

「……………」

「おい、無視するな」

「だ、だって！私に対してあんな発言する人なんて今までいなかったんだからしょうがないじゃない！」

「逆切れは墓穴掘るだけですよ」

どこまでも冷たい虚の視線に耐え切れず、机に突つ伏す。

「う、うう……思い出さないようにしていたのに……。絶対に暴いてやるんだから、覚えていなさいよ狭間祐一——！！」

「こんな下らない私怨で絡まれる狭間さんが哀れですね……」

私の新たな声を上げた決意表明に、虚の言葉はかき消された。かき消されたつたらかき消された。

第十話

生徒会に所属するようになって、しばらくが経った。

別段大きな話題が周囲で昇ることもなければ、訃報のような悲しい話題がある訳でもなく、ただただ普通の学園生活を過ごしていた。

生徒会の仕事は、別段前の学校と比較してやることに大きな違いはない。

寧ろ書記の二番手ということで、やっていることは実質の雑務。男ならではの力仕事だったり、書類整理といった簡単な案件を処理するだけ。

そんな仕事だが、意外にも私に回ってくる比率は多い。

書類整理などは、布仏さんが戦力外だったらしいこともあって、経験者である私の加入によって作業効率はうんと上がったと、特に虚さんから高い評価を得ていた。

因みに更識会長は、あんまり何もしていない。いいのかそれで、と思わなくはないが、I Sの操縦が出来る。生徒会長の公式で成り立っているこの学園では、生徒会長としての能力がオマケと捉えられていてもおかしくないのです、つまりまあ、そういうことなんでしょうと解釈している。

無論、本人には口が裂けても言いませんが。あ、でも彼女を弄るのは割と楽しそうで

すね。

「……って、何てことを考えているんでしょう、私は」

誰もいない廊下で、下卑た意識を振り払うように頭を振る。

どうにも、最近こんなサディスティックな感情が沸々と湧きあがってくる傾向がある。

更識会長の雰囲気がそうさせているのでしょうか。それなら私に罪はありませんね。

「ユウく〜ん」

ふと、声を掛けられる。

聞き慣れた柔らかい声の先には、布仏さんが手を振る姿がある。

「どうしました?」

「今から生徒会室に来てって命令。重要な話らしいよ?」

「分かりました。では、一緒に行きましょう」

「うん」

思えば、こうして彼女と一緒に生徒会室に向かうのも日常と化している。

同じ部屋で寝起きし、放課後も同じ活動で時間を共有し、再び同じ部屋で過ごす。

寮生活という点を考慮に入れても、かなりの頻度で共に居るのは、誰の目から見ても

明らかだ。

恋仲なのか？と勘繰られるような距離だが、意外にもそんなことはなく、寧ろ兄妹のやり取りとして認識されている節がある。

普段から笑顔を絶やさないコンビということもあり、似た者同士という評価がより兄妹っぷりに拍車を掛けている。

生徒会に所属したこともあって、以前よりも行動を共にする時間が増えたのも要因だろう。

傍から見れば、慕う兄の後ろをついて歩く妹、あるいは自由奔放な妹の後ろを困り顔でついて歩く兄、という二パターンの光景が繰り広げられるのだから面白い。

今、一番青春している人達は誰かと聞かれれば、大半が二人をセットで指名することだろう。それほどまでに、仲睦まじかった。

「失礼します」

ノックして一呼吸置き、生徒会室へと入室する。

先に待機していた楯無と虚に出迎えられ、早速本題に入ることとなった。

「悪いわね、貴方達も忙しい身でしように」

「心配してくれるのなら、もう少しお手柔らかにお願いしたいのですがねえ。男手とは言え、荷物整理も楽じゃないんですよ。関係のない一夏君に頼る訳にもいかないですし」

「んん？こんな美少女三人と密室でウフフな状況になれるっていうのに、贅沢だなあ」
「それを言うなら、教室と言う名の個室に9・9・0・1の割合で過ごしているのが日常なんですが……」

「もー、シチュエーションが違うじゃんかそもそもー」

「……会長？」

虚に流し目で睨まれ、文字通り小さくなる楯無。威厳なんて、これっぽっちもありません。
「……で、呼び出した理由なんだけど、これを見て頂戴」

だが、そんなやり取りも最早日常。何事もなかったかのように話題が切り替わる。

虚の手から渡されるは、二枚の資料。

そのどちらも、簡易的ではあるが個人情報掲載された資料で、顔写真には見知らぬ女生徒二名が貼ってある。

いや、片方の金髪の方は男性と記載されている。それにしても、女性的過ぎる容姿な気もするが。

そして、もう一枚の方に載っている青紫色のロングヘアをポニーで括った女性。

こちらは一見問題ないように見える、が——何故か違和感を感じる。

「その金髪の子がシャルル・デュノア。フランスの代表候補生で、IS開発企業である

デユノア社の御曹司——というのが表向きなんだけど、そうじゃないのよね」

「と、言いますと?」

「ぶつちやけると、シャルル・デユノアなんて存在しないのよ。その代わり、デユノア社社長の妾に当たるシャルロット・デユノアというシャルル・デユノアに瓜二つの少女がいることが判明しているわ」

「……それはつまり、身分を——と言うよりも性別を偽って編入してくる腹積もりだと?」

「そゆこと。大方、男性操縦者という箔が欲しくてと言うところでしょうね。デユノア社は第三世代のISの開発が滞つてて、株価も右肩下がりになりつつある落ち目の企業。逆転を狙う為にそんな頭の悪い行動を取つてきても、不思議ではないわね」

「随分と辛辣ですね、私としてはラファール・リヴァイブはお気に入りなので、デユノア社の低迷には心を痛めていた次第ではあります」

「……推測ばかりになっちゃうけど、妾の子とは言え、親の世代の負債を子供に清算させようだなんて、碌な親じゃないわよ。それが彼女の能力を買つてのものならともかく、これじゃあただの傀儡として扱われているだけ。ましてや、こんな穴だらけのプラン。最悪この子を生贄にして切り捨てることだつて考えていても不思議じゃないわ」

「……それが本当だとしたら、悲しすぎるよ」

場に重い空気が流れる。

こんなのは、ありふれたトカゲの尻尾切り。

世界に目を向ければ、規模の差こそあれど社会的地位を持つ者ならば誰でもやっていること。

——それでも、納得できるかどうかは別問題。

精神的に大人であることと、そういった行為を割り切れるかどうかは、決してイコールでは成り立たない。

だからこそ、半端に現実を知る四人は納得と理解の板挟みに喘ぐ事しか出来ない。

「——まあ、その話はいいでしょ。取り敢えず、えーと……デユノアさんの目的の確認をしても?」

狭間の一声を皮切りに、話を戻す。

「目的までは把握していないけど、このタイミングでの転入となれば、名声だけじゃなくてもっと別の目的があるでしょうね。そう——例えば、織斑一夏に接触して、彼の専用機の情報を探ったり、弱みを握ったりしてデユノア社に有利になるように働きかけるとか、ね」

「オリムーの? ユウくんは違うの?」

「私の場合、彼と違って専用機もなければ織斑先生のような分かり易い後ろ盾もありません」

せんからね。絶対に狙われないとは言いい切れませんが、少なくとも優先順位は低いでしょうね」

デユノア社の目的はある程度絞ることが出来る。

ひとつは、数少ない男性操縦者と接触し、懇意になること。

下衆な手段を講じるのであれば、機密情報の塊である専用機のデータ奪取やハニートラップによる一夏さんの強行確保。

IS学園特記事項『第21項 本学園における生徒はその在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。本人の同意がない場合、それらの外的介入は原則として許可されないものとする。』などとあるが、逆に言えば、それは卒業後には機能を失うと言うことで、一度関係を持つてしまえば楔となってしまうハニートラップは、ただでさえ不安定な足場に立つ一夏さんにとっては、地盤を失いかねない致命傷にさえなり得る。

とは言え、単純計算であと三年の猶予があることを思えば、その間に対策をするのは容易。寧ろ、性別偽装による不正入学がバレて芋蔓式にデユノア社の倒産までこじつけられる方が速い。

事実、この段階で性別偽装がバレている時点で詰んでいる。そもそも、何故バレないと思ったのが理解できない。

馬鹿にしているのか、それほどまでに余裕がなかったのか、それとも——それらはブラフで別の目的があるのか。

あまりにも脇の甘さを感じる作戦を前に、裏があると勘繰らざるを得ない。

それは会長達も同じなのか、渋い表情で資料を紐解いている。

「取り敢えず彼女は、此方が何にも気付いていないという体で入学させる予定よ。この事実は、ごく僅かな人間しか知らない極秘事項として取り扱われているから、口外は厳禁。それこそ、教師でさえ伝えられていない人がいるレベルだから、その意味を理解して頂戴」

「……なんでそういうことは事前に言わないんですか。完全に私、巻き込まれているだけじゃないですか」

「大丈夫、君ならやれるさー!」

「うわー、すっごい良い笑顔でサムズアップ。殴っていいですか?」

「暴力反対!」

頭を抱えて机に突っ伏す会長。

本当、彼女の真意はいまいち読めない。

如何に普段ちゃらんぽらんでも、こんな重要な案件を意味もなく晒すとは考えにくい。

虚さんが道化芝居に反応しないことから、これは予定通りの流れなの分かる。食えない人だ。

「それに、貴方が関係ないというのは間違いよ。男性操縦者だから、つてのは確かにあるけれど、問題はこつち」

紫のポニーテールの少女が載った資料を叩きながら説明を始める。

「彼女——なつめさおり 粟早織なつめさおりなんだけど、シャルルⅡデユノアと打って変わって、殆どの情報が開示されていないの。いえ、正確には私達が幾ら探しても一般的な情報しか調べることが出来なかったの」

私達、と言うのはIS学園を通しての発言なんでしようけれど、関係者も殆ど知らない中で得られる情報なんて、そんなものではないだろうか。あくまでデユノア社が露骨すぎただけで、それが普通だと思います。

「そもそも、疑って掛かるのが間違いなのでは？デユノア社のこともあつて警戒するのも分かりますが、クリーンな背景を持つ子が入学しても不思議ではありませんし」

「それはそうだけど……履歴書にもあまりにクリーンな子が、何故今になって入学することになったのか。そこが気掛かりなのよ。病氣していた経歴もなければ、人間関係の不備もなし。お金だつて不都合している感じはない彼女が、一般と同じタイミミングを逃して今入学する意味。それがどうしても気になるのよ」

「だからと言って、この情報では入学を拒むことは出来ない。どんなに粗を探しても見つからないのであれば、いつそのこと懐に潜り込ませてしまえばいい——そう結論付けた、つてことでしょいか？」

会長は無言で頷く。

「虎穴に入らずんば、とは逆のパターンになるけれど、危険を承知で爆弾を抱えることが必要になることもある。まあ、実際それぐらいしか選択肢がないっていうのが理由なんだけどね」

「ままならないですな〜」

「本当、やってられないわよ」

乱暴に背もたれに寄りかかり、天を仰ぎながら溜息を吐く会長。

「相当お疲れな様子だが、こういうった情報捜査は生徒会長と言えども管轄外なのではないだろうか。」

いや、従来の学園と同じ考えで物差しを向けるのは良くない。

「ここは学園と名の付いた、軍事施設のようなものだ。機密に対しての警戒心はただの学び舎のそれとは比べ物にならない筈。」

「新人があまりその辺りを詮索するのは悪いですし、そういうものだとな納得しておう。」

「と言う訳で、彼女達二人をI S学園に入學させることは確定しているのですが……やはり監視の目は必要と言うことで、織斑君のクラスにデュノアさんを、狭間君のクラスに棗さんを転入させるようにするように対処します。長くなりましたが、これが今回貴方を参加させた一番の理由になります」

会長に代わる形で、虚さんが説明を続ける。

「二組には本音が、二組には狭間君がいます。最低でも事情を知る人間がいるのは当然として、狭間君は性別の異なる相手と言うこともあつて、大つぴらな動きが出来ないことが懸念されます。ですので、此方としても信用できる方に最低限の説明だけをして、貴方のフォローに回って戴きます。これは確定事項です」

「最低限の説明、とは？」

「転入生が来ることを事前に伝え、基本的な生活から訓練までを支援し、仔細を報告するように仕向けています。これは相手も快諾してくれたことで、此方の思惑に関しては一切話していませんので、あくまで友人付き合いを前提としてフォローに回ってもらいます」

「それは分かりましたが、一体誰を推薦したのです？」

「それは——」

「失礼します」

虚さんの言葉を遮るように、四回のノック音に続いてドアが開かれる。

姿勢よく軽く一礼。凜とした佇まいと共に入室したのは、クラスメイトであり例の襲撃事件で援軍として駆けつけ、多大なる貢献をしてくれた椿さんだった。

一瞬、椿さんと目が合う。

彼女は軽く会釈すると、そのまま会長の机の前まで進んでいく。

因みに会長は仕事モードにいつの間にか戻っている。こうして見ている分には、凜と
していて映えるんですが……。

「二年二組の椿麻美です。この度、更識会長からお話があるとのこととで出向致しました」
「楽にして構わないわ。今回呼んだのはさして重要な案件ではなく、数日後に一年二組
に転校してくる子の面倒を狭間君と共に見て欲しいと頼みたからだけだから」

「生徒会長に推薦してもらえらるとは、若輩者の身には余る名誉であります」

「謙遜は不要よ。貴方の学園での素行や能力を見る限りでも、優秀な人材であることは
間違いないわ。流石は椿の出の者ね。血は優秀らしくて結構」

「——御存じでしたか」

椿さんの雰囲気、一瞬だけ鋭い刃のようになるも、すぐに霧散する。

はて、椿の出とは……。結構訳アリな家なのでしょうか。

言い方から察するに、古くから存在する名家と言う可能性が高そうですが、実際の所

ははつきりしない。

「ええ。話が逸れたわね。それで、二組に転校してくる棗早織と言う子のフォロー、狭間君と共にやつてもらえないかしら？別に貴方達だけではなく、友人にも一声掛けてもいいわよ？」

「是非そうさせてもらいます」

「ありがとうございます。狭間君、椿さんを送ってあげて」

「分かりました」

「いえ、そこまでしてもらう必要は」

「いいのよ。こつちもお開きにする所だったし、情報の共有と言う意味でも話し合いをする時間は少しは必要なんじゃないかしら？」

「……そういうことでしたら。お心遣い、感謝します」

三人に見送られる形で、私達は生徒会室を後にする。

しばらく歩いた後、椿さんが言葉を紡ぎ出す。

「生徒会は、楽しいですか？」

「ええ、まあ。個性的な方々と付き合っていることもあって、退屈はしていませんよ」

「そうですか。……ならいいんです」

「……まだ、負い目を感じているのですか？」

「そう……ですね。感じていないと言えば、嘘になります。貴方だけが実質罪に問われた形で、関係者である私達は不問となった。学園側の思惑もある程度理解できますが、そもそも先の襲撃事件の端を発したのは学園側が防衛を怠っていたからなつたものであつて、その被害を最小限に抑える一役となつた貴方が、罪人のように扱われた事実。それが、私には納得できないんです」

拳を強く握り締め、悲痛に呟く。

正義感の強い人だ。それに聡明で、だからこそ多角的な視点で物事を考えられる。

そして世界の理不尽に呑みこまれ、苦しみ喘いでしまう。

勧善懲悪なんてものは、政治的観点からすればただの子供騙しでしかない。

個人で思想が入り乱れ、そんな者達が自らの理想に順ずるべくあらゆる手段を尽くして成り上がる場所。それが政治と言う環境だ。

魔女の鍋——いや、闇鍋と言つた方が分かり易いか。

鍋に合うもの、合わないもの、単品で真価を發揮するもの、そもそも食べ物ですらないものさえ時には入つてしまふそれは、まさしく混沌の具現。

政治も同じ。思想、理想、欲望——その悉くを相手の都合も考えずに押し付け、その結果が大多数の運命さえも揺るがす悪魔を召喚することにさえなり得る。

そして、気付けば時既に遅く、その度に世界は良くも悪くも変化していった。

そんな繰り返しを経て今の時代が存在する訳だが、人類は快適さを知るに連れて、学ばずどこか増長している節さえ見受けられる。

その代表とも言えるのが、インフィニット・ストラトス。

私が調べた限り、本来それは宇宙空間での活動を目的としたマルチフォーム・スーツであり、シールドバリアーや絶対防衛は、宇宙の飛来物かや宇宙の極限の環境から身を護る為のシステムであり、拡張領域は火星の開拓等で用いられる削岩機やデブリを破壊する武装を収納するためのものだろう。

IS 同士が識別番号で位置情報を共有できるのも、空気が存在しない宇宙では肉声が届かないことから、安全性や柔軟な連携を可能とする為の手段だろうし、どこまでも宇宙開拓を視野に入れて考案されたものだと言うことが分かる。

そんな夢のある当時はまだ子供であった篠ノ之束のプランを、大人達は現実と言う黒色のペンキで塗り潰した。

その結果、表向きは軍事利用を禁止された兵器として、公にその名を広め、社会の在り方をひっくり返した。

それはいい。軍事利用を禁止している癖に国防の要になっているとか、そういう藪を突くことは今更過ぎて語ることもでもない。

それより気になったのが、その浸透されるスピードにある。

十年。たったそれだけの時間で、今までの社会がまるっと変わってしまったことは、絶対にあり得ないのだ。

過去、政治や軍事その殆どは男性が担う役割であり、女性は全体を見れば針の穴と同じぐらいの存在感しかなかった。

如何にISが革命的な代物であろうともこの男女比がひっくり返ると言うのは、オセロで例えるならば色の比率が1:9で、1が女性だとしてたった一枚の着手で逆転するようなもので、ゲームの性質から見てもそれは絶対に起こり得ないことから、その理不尽さが窺える筈だ。

一手一手、少しずつ盤面を取り返していくならばまだ分かる。ISは女性にとつては切り札。その切り札でちよつとしたイカサマは可能かもしれない。

だが、それは目に見えた変化であつてはならない。

出る杭は打たれると云う言葉の通り、如何に優れていようともそれを引き摺り落とすのが人間の業であり、それがイカサマによるものだと知られれば、それで終わりだ。

だが、そうはならなかった。誰もが理解できるレベルの変化を前にして、人々はISの魔力に呑まれるだけで、その威光に縋る存在を止めることは出来なかった。

それが万人に通用する者ならば、疑問は残れど追求することはなかったかもしれない。形はなんであれ、過去において男尊女卑であつた時代があつたことは事実で、それ

を傘に男性があれこれ言うのはお門違いだと、ある程度丸く収まっていたかもしれない。

だが、このIS。女性にしか使えないと言う、致命的な欠陥を持っている。

如何に優れているようにも、女性にしか扱えず、更にはコアの最大数量の関係上量産できないものが、社会の中心になる？しかもたった十年で？馬鹿にしているとしか思えない。

その事実思い至った時点で、私は神の存在を信じたくなった。『機械仕掛けの神』などと言う、つまらない神の存在を。

思想の浸透に関して言えば、一般人へのそれも気になる。

男性と女性の主権が逆転し、女性が幅を利かせる。これは理解できないことはない。それが、ISを扱える女性に限定しているなら、ではあるが。

ISが扱えなければ、男性と女性の性質が以前と変化するところなど何一つない。

しかし、現代の一般女性はまるで自分達が超越者になったと増長している傾向にある。ISを使えなければ、自分は何も変わっていないと言うのに。

女性の全員がそうだとは言わないが、それでも半分以上はそうであると判断して然るべきだろう。

何故、そんな極論に至るようになったのか？

狐にでも化かされているのでは？と思えるほどに、現実感の無い現実で自分達は生きていく。

誰もが思い至るべきなのだ。自分達の知らない所で恐ろしい変化が起ころうとしているのでは？と言う疑問に。

滑稽だと笑うだろう。しかし、考えてもみる。

急激な変化の中、砂で出来た舞台で踊る女、そんな女達からの理不尽に対し臆病風に吹かれて閉口し不遇を受け入れている男。

そもそもこの関係を作り上げた今の世界そのものが滑稽の極みでしかないと言うのに、今更御託を並べるなど言いたくもなる。

右を向けば馬鹿、左を向いても馬鹿。ああ、馬鹿ばかりで——本当に■したくなる。

「——さん？」

まるで海の底から引つ張り出されるような感覚に、身体がふらつく。

たたらを踏みながらも、咄嗟に椿さんが手を取ってくれたことで転ぶには至らなかった。

朦朧とする意識。先程まで何かを考えていた気がしたが、全然思い出せない。

「狭間さん、やはりお疲れなのでは？慣れない環境に身を置きながら、生徒会で仕事をするなんてやはり無茶だったんです」

「え？ああ、いえいえ。そんなことはないです。ただ少し考え事をしていただけです」「……もし、本当に辛そうなら貴方の意思を無視してでも抗議しますから、そのつもりで。貴方が倒れてしまえば、ノエル達も心配しますし、あの場に居た人達も負い目をより感じるようになるということをお忘れなく」

「だから大丈夫ですってば。心配性ですなぁ」

それから、近藤さん達と合流するまで椿さんの説教が続いた。

そんなことをしている内に、先程考えていたことに関して、すっぱりと忘れ去っていた。

第十一話

椿さんとの軽い議論の下、近藤さん、磯村さん、藤田さんの三人には口外厳禁を条件に事前に伝えることにした。

とは言え、口外せずとも彼女達の雰囲気の変化したことぐらいは察知されるようで、疑問に持つクラスメイトも少なからずいたが、そこは何とか煙に巻くことが出来たので問題は無い。

まあ、バラしても良さそうな気もしましたがね。あくまで転校生が来る、と言う情報だけなら漏れた所で何の痛手にもならないでしょうし。

どんな目的があるにせよ、入ること自体は確定事項なのだから、周囲がどうあろうとも逃げると言う選択肢は有り得ない。

それに、シャルルさんはともかく、棗さんに関しては間違いなくシロだと私の勘が告げている。

しかし、それと同時にどうにも拭い去れない違和感を感じてしまうせいで、ここ数日もややもやしっぱなしである。

そうして、転校生二人が入学する日がやってきた。

クーゲル先生の後に続いて教壇に上がる棗早織さん。

紫の太ももまで伸びるポニーテルと、それを結ぶ大きなリボン。そして同年代の少女達とは一線を画した豊満な胸が特徴的な、所謂美少女である。

とは言え、IS学園は全世界から女性が集まる環境。しかも、何故かその内の半数以上が美少女という作爲的なものさえ感じられる環境なものだから、彼女も十把一絡げの一人に落ち着いてしまうのが非常に勿体ないと思う。

そんな彼女だが、挙動不審——と言うよりも、緊張しているのか、スカートの裾を握り、視線も微妙に泳いでいる。

緊張している？確かにその通りなのだろうけれど……大衆の前に出たからという訳ではなさそうだ。

ふと、視線を泳がせていた棗さんと目が合う。

すると、不安げだった表情がどこか嬉し気に変化していく。

心境の変化の理由は分からないが、そこから棗さんの自己紹介が始まった。

それから授業を経て、休み時間。

ようやく行動開始——と行きたいところだったが、私がすることは特にない。正確には今の段階では、だが。

私はただでさえ数少ない男性操縦者であり、目立つ存在だ。下手に露骨な行動を取っ

て、彼女の警戒を促したくはない。

そう言う意味では、やはり同性である椿さん達を仲介人として、自分へと繋げる流れを作った方が不自然ではない。

私自身、誰かと積極的に友人になるという世渡りの仕方はほぼ経験がなく、下手なことを口走ってしまいそうだと言う点もあるが、基本的には棗さんの警戒を解くのが本命である。

とは言え、手持無沙汰のまま教室にいるのも始末が悪いので、一夏さん達の様子でも見に行くことにする。

あちらにもシャルルさんが行っている事ですし、友人付き合いと言う体で近づく分には問題はないでしょう。

そうして席を立ち、教室から出ようとした時、背中に視線が突き刺さる。

振り返ると、またしても棗さんが自分を見ている。先程と違うのは、まるで捨てられた子犬のような目で見ていること。

何故、そんな目をするのか。離れて欲しくないのか？

だが、理由は思いつかない。下卑た理由なら幾らでも考え付くが、そんな感じとは程遠い。

あれが演技だと言うのであれば大したものだが、恐らくは素。だからこそ、理解し得

ないのだが。

心苦しきはあるが、後できちんと理由を説明した上で謝ろう。だから、ごめんなさい。今は貴方を無視させていただきませう。

一步と廊下への道へ進んでいくに連れて増していく子犬オーラに胃を痛めながら、何とか理性を抑え込みそそくさと一夏さんの方へと向かう——筈だった。

「ぎよえへー!!」

廊下に出た途端に、まるで雪崩に巻き込まれたかのような感覚に襲われる。

もみくちやにされながら、しまいには地面にへばり付く体勢になり、背中越しに規則性のないピストンが何度も叩き込まれる。

数秒にも満たない地獄が終わり、ボロボロな状態で顔を上げると、かろうじて確認できたのは一夏さんとシャルルさんと思わしき二人を追いかける女子達の姿だけ。

最早、何が何だか分からない。おかしい、自分が転校してきたときはあんな騒ぎ立てられていた程ではなかった筈なのに、この差は何だ。

やはり年か、それともこの胡散臭いと友人から幾度と言われたこの表情なのか。

「……こんなのつて、ないですよ。ガクツ」

世の中の理不尽を込めた言葉と共に、私は意識を失った。

「はっはっは!! いやー傑作でしたよハザマさん」

「人の不幸を笑うのは感心しませんよ……」

「そうよマコト。好きであんな……漫画みたいなの……ププツ」

「あー! ツバキだつて笑つたじゃんかー! 前言撤回を要求するー!!」

「いや、でも……ぎよ、ぎよえへーつて……」

「アハハ……ですが、本当に流れるような展開でしたね」

「転校生のシャルルⅡデユノアさんでしたっけ? 彼と織斑さんが追われていたなんて話を聞いたときは驚きましたが、Aクラスの人達は随分とアグレッシブなのですわね」

「クーゲル先生の話だと、Aクラスは問題児——いえ、個性的な人ばかり詰め込まれて心労が絶えないとかなんとか……」

「彼のブリュンヒルデも、ここではいち教師に過ぎないと言うことでしょうかね。多少の欠点があつた方が、親しまれやすくなるでしょうし、仕方のないことだと諦めてもらうしかないでしょう」

あれから時が経ち、今は昼休み。

ゴキブリを踏み潰すが如く容赦のない蹴りをお見舞いされた私は、そのまま保健室へ

直行。今日一日中、安静にすることになった。しばらくはISの訓練は禁止と言うオマケつきで。

まあ、脊髄や腰にダメージがある状態で、あんな加速の出る物を使えば、若い内に老人みたいになりかねないですし、当然の処置でしょう。

「それで、どう？ IS学園は。騒がしいけど、そんな気を張るところでもないでしょ？」

磯村さんがそう問いつける相手は、転校生の棗早織さん。

今も会話に入らず、一步引いたような態度で話を聞いていた棗さんは、突如として話しかけられたことに驚きながらも、しっかりと受け答える。

「うん。当初に比べたら落ち着いたけど、それでもやっぱり慣れない環境はちよつとね」
「そこは人によりけりって所かしらね。すぐに適応できる人もいれば、そうでない人もいる。ここが普通の学び舎とは違うと言う点も、馴染めない理由になっているんですよね」

外国は日本と比べて治安が安定しているとは言いがたい。故に、日本人以外の人は地元でないこともあつて警戒心が強く周囲に適応できないと言うケースが、IS学園設立初期には多くあつたと言われている。

今でこそ安定しているのは、IS学園の名が広まったことで安全を保障することが出来たから、と言うのが大きいだろう。

とは言え、それでも慣れない土地と環境でいきなりオープンでいられる人間など稀であり、そういう意味では棗さんの適応はかなり速い部類に入る。

それもこれも、四人の人徳によるものでしょうか。喜ばしいことです。

「あれ？早織さんのお昼飯、それだけなの？」

椿さんが棗さんの手元に視線を向ける。

そこには、市販されているパック式のゼリー飲料にラベルが貼っていない、それこそ業務用と言つて差支えない質素なものがあつた。

「もしかして、ダイエツトでもしてるの？そんな我儘ボディしてる癖に」

「そ、そんなんじゃないよ。なんて説明すればいいのかな……」

茶化す磯村さんの発言に顔を赤くさせながら、棗さんは事情をぼつぼつと語り始める。

「えっと、多分みんな気になってると思うけど、ボ——私が今の時期にIS学園に入った理由は、入院していたからなんだ」

「入院つて……病気なの？」

「それこそ説明しにくいんだけど、病気と言えば病気だと思う。どんな医者に掛かつても治療できなかつたつてだけのね」

沈んだ表情で告げる事実を前に、全員が息を呑んだ。

「そ、それって大丈夫なの？ 不治の病なら、学園に来るなんて以ての外だと思うけど」
「いや、病気と言っても命に別状はあるものじゃないよ。それに、ここに来たのも決して無意味な理由じゃないし」

そう言つて、蓋の開いていないゼリー飲料を隣にいた磯村さんに差し出す。

「これ飲んでみて」

「あ、うん。ありがとう——つて、うえええ。美味しくない、つていうか味がしない!!」
渡されるが否や遠慮なくそれを口にして数秒後、磯村さんは舌を出しながら表情を歪ませて不快感を露わにした。

「味がしない?……つて、本当だわ」

「ミネラルウォーターとも違いますわね。人工的に無味無臭を作つたようなわざとらしさがあると言いますか……お世辞にも美味しいとは言えませんわね」

女性陣の間で回し飲みが一通り終わり、そこから再び話が再会される。

「これはね、私の味覚がおかしくなっているからなんだ。医学的にもはつきりしてないんだけど、私が何か食べたらまるで記憶を無理矢理植え付けられたような感覚が頭に来るんだ」

「記憶……? 比喻とかじゃなくて?」

「自分でも上手く説明できないと言うか、そもそも未知の要素が多すぎてそうとしか言

えないんだ。実際、情景が脳裏に過るんだ。作った人の想い、使われた食材の記憶、生物非生物問わずに情報が送られてくるものだから、まともに食事なんて出来ないんだ」

「それは……キツイですわね」

「もしかして、屠殺される瞬間とかも視えたりするの？」

「う、うん。でも、ピンポイントでその映像だけ映る訳じゃないのが不幸中の幸いかな。その代わりの情報爆弾って考えると、どっちが良いかって言われると……ね」

げんなりと言った様子で肩を落とす棗さん。

衣食住揃ってこそ健やかに人生を過ごせるのであって、たった一つでも不足すればそれは健全とは言い難い。

ましてや、食は生命の維持に必須の行為であり、どんなに記憶が流れることを避けたいと願っても、生きるのであればどこかで摂取しなければならぬ。

本来楽しい筈の食事が、棗さんにとってはただの拷問。はつきり言って、精神的に狂っていないだけでも、奇跡と呼ぶべきだ。

「棗さんの話から推測するに、その無味無臭な食事は詰まるところ点滴の延長線上にあるもので、棗さんが健常者だと言うことを考慮すれば、含まれているエネルギー量は点滴の何倍にも及ぶのではないでしょうか。味を極限まで削ぎ落としているのも、味覚から記憶を読み取らせない為の措置と考えれば説明がつきます」

「うん、狭間さんの言う通りだよ」

「市販のエネルギー食品でも、毎日ならすぐ飽きるだろうに、こんなのが毎日とか……普通耐えられないよ」

「だけど、それが私にとっての普通だから」

「普通、か……」

後天的な病気であるということは、食事の楽しさを知っているということ。

最初から知らなければ、憧れこそすれど悲観はしなかつただろう。無知である幸福に身を委ねていれば、苦しむことはないのだから。

しかし、それは最早叶わぬ夢。治るかも分からない病気と共に人生を歩み、健全だった頃の記憶を反芻し、美しい筈の思い出が徐々に己が身を蝕む感覚に苛まれながら生きていくしかない。

そしていつしか、生まれたことを後悔する日が来る。

これを妄想だ、考えすぎだなどと言えるほど、人間の精神は強くない。

一度心に罅が入れば、二度と元には戻らない。克服したように見えても、それはあくまで罅を別の何かで覆い固めただけであり、罅そのものは依然としてそこに存在し続けている。

自らの境遇を普通と言い聞かせることで、心の均衡を保とうとしているのだろうか、

所詮逃避の範疇に入る悪足掻きでしかない。

それを理解していても、そうせざるを得ない。何故なら、それしか手段を知らないから。

医者でさえも匙を投げた未知の病。そんなものと共生しなければならぬ棗さんの心中は、私達が考える以上に荒んでいる筈だ。

しかし、それでも彼女は笑顔を崩さない。

満面の笑みとまではいかずとも、傍から見れば何も問題ないように見える程度には明るく振る舞って見せている。

自らを弱く見せたくないという気丈さからか、誰かに迷惑を掛けたくないという優しさからか。

何にせよ、その強がりはいずれ彼女自身を殺すことになる。

どうにかしてやりたい、が——医者でどうしようもないというのなら、私達が出る幕は無いのではないだろうか。

「——うん、決めた」

近藤さんがスクツと立ち上がり、拳を強く握って決意したように呟く。

「私達で、ナツメちゃんの病気を克服させよう！」

言い切った。

この場に居る誰しもが夢想し、無理だと切つて捨てた未来に、彼女は手を伸ばした。「ノエル、それは——」

「分かっている。私だつて簡単にどうにか出来るなんて思つてない。だけど、それを理由に諦めていいなんてことにはならないよ。病気を治すとかじゃなくて、ナツメちゃんの意味に合う食べ物を手に入れるとか作るとか、そういう事なら私達にだつて出来る筈だよ！」

確かに、それならば可能だろう。

しかし、それを為すというのは並大抵のことではない。

ただの味覚障害ならばいざ知らず、記憶を読み取るという前代未聞のパターンともなれば、砂漠で砂金を見つける方が簡単な可能性さえある。

近藤さんの考えている程、事は単純ではない。

しかし——彼女の言う通り、それを逃げの理由にするのは間違っているのも確かだ。

「だ、大丈夫だよそんなことしなくても。きっと、いつか原因が解明されて対策だつて——」

「それっていつ？明日？数年後？しわくちやのおばあちゃんになるまで？」

「う……」

近藤さんの剣幕に、棗さんがたじろぐ。

こんな近藤さんを見るのは初めてだ。

普段の彼女は一步引いているというか、他人に合わせて行動している節があったのだが、今はその逆。

消沈し、妥協しようとする者達を引つ張っていく強い意思を感じる。

「そんなんじや駄目だよ。それに、折角友達になったのに、その友達が苦しい思いをしている時に何もしてあげられないなんて、我慢ならぬ」

「そう、だね。何もしないで待っているなんて、らしくないよね！」

「私達で解決出来るかは分からないけど、出来ることはある筈。それを探せばいいのよね」

「ふふ、そうでなくてはいけませんわね」

磯村さんも椿さんも、近藤さんの言葉に触発される形で考えを改め、前向きな発言をする。

……ほんの少しではあるが、彼女達の関係というものが理解できた気がした。

ムードメーカーの磯村さん、冷静な視点を持つ椿さん、年齢不相応に大人びた貫禄を持つ藤田さん、そして普段は頼りなさ気だがいざという時に彼女達を引つ張るポテンシャルを秘めた近藤さん。

示し合わせた訳でもないのに、面白いぐらいにバランスが取れた関係。

まるで、運命が導いたかのような——そんな柄にもない思考に至らせる程度には、整った関係だと思ふ。

「それじゃ、早速調理室を使えるか掛けあつてみないとね！ 思い立つたが吉日つて言うし。」

「誰に言えばいいのかしら、料理研究部が確かあつた筈よね？ なら顧問もいる筈だけど」
「誰でもいいから聞きまわるしかない、よね」

「でしたら、やはり教師の方々聞くのが一番かと。それ以外でも学園関係者ならば、情報を持っていると思いますし」

わいわいと四人姦しく話し合いをしている中、そんな彼女達を見て棗さんが呟く。
「……どうして、ここまでしてくれるんだろう」

会話に夢中になつている四人には届かない。

しかし、同じく会話に入れていない自分には、確かに聞こえた。

「友達だからではないですか？」

「とも、だち？」

「はい。今はそうでないとしても、そう在りたいと思つていることは確かでしょう。人は余程のことでもないかぎりは見知らぬ人を助けることに抵抗は覚えますが、身内やそれに準ずる人間に対してはその限りではありません」

「友達だから助ける、つてこと?」

「どう解釈するかは貴方次第ですが……私からすれば、鳩が先か卵が先かなど、重要ではありませんよ。友達だから助ける、助けた結果友達になる、どちらも行き着く先は誰かの為の善意であり、尊い意思であることに違いありませんから」

「なんか、話脱線してない?」

「あはは、すみません。まあ、私が言いたいのですね。彼女達は純粋に貴方のことを案じているんです。そこに打算が無いとは言いませんが、その打算が友達になりたい、友達だからつて理由なら、随分と可愛らしいではありませんか。……信じてみたいと、そう思いたくありませんか?」

棗さんの視線は、四人の少女達の先を向いている。

主賓そつちので行われている会話は、とても賑やかで姦しい。

見ているだけで心が穏やかな気分になる光景を前に、悩みなど些細だと言わんばかりに、疑問で陰っていた表情は次第に明るさを取り戻していく。

「今の気持ち、答えですよ」

「……そう、なのかな。実感沸かないけど——うん、悪くない気分だよ」

……やはり、そうなのだろうか。

彼女の諸々の反応から察するに、彼女には友人と呼べる人間がない。

彼女を取り巻く環境がそうさせたのか、彼女自身が拒んだのか、それは分からない。しかし、一般的な感性で言えば当たり前前に納得できることさえも、彼女は受け止められていない。

一步引いた立ち位置から、疑うことを前提にして本質を探ろうとするその姿勢は、怯えつつも手を伸ばしている姿を幻視させる。

踏み込みたいのに、何かが目の前を阻んでそうさせてくれない。そんなもどかしさを感じさせる反応は、高校生とはとても思えないぐらいに憂慮に堪えない。

無知に等しい感情を前にして、それでも一步踏み出してくれたのは、少なくとも彼女達の好意が届いているからと考えてもいいのだろうか。

そうであるならば、私としても嬉しい限りです。

……なんて、どうにも年長者の視点が抜け切らないですね。

年齢はともかく、立場はイーブンなのにこんなでは、自ら率先して距離を開こうとしているも同然ではないか。そんな悲しい学園生活はゴメンです。

「よし、じゃあ先生に許可を取りに、いくぞー!!」

「おー!!」

「お、おー……?」

磯村さんの号令と共に、わいわいと屋上を去っていく四人に、遅れてついていく私達。

もうこれ、完全に当事者のことそっちのけじゃないですか。

……まあ、棗さんに不満はないようですし、いいんですけどね私としましては。

さて、あれからあれよあれよと話が進み、先生方に話を通して見事調理室を借りる許可が降りたのは昨日のこと。

色々と手続きやら準備をする必要もあつたので、そうせざるを得なかつたというのもあるが、やはりぶつつけ本番でどうにでもなる訳でもないということで、図書室やら何やらを借りて情報収集に勤しむことになつたのだ。

そんな感じで、事前準備もそこそこに当日を迎えた訳なのだ、が——
「何ですか、この大所帯は」

調理室内は、先のメンバー以外にも知っている顔ぶれから、記憶に無い人達でごつた返している。

一年生だけに留まらず、二年、果ては三年生までもが少数ながらも混在している。

本来、細々と行われるはずだつた今回の催しは、今では噂が噂を呼ぶ一大イベントのようなものになりつつあつた。

「えっ……と、どうしてこうなつた？」

「私達、別に言いふらしたりはしていないわよね。聞き込みの内容だって最低限のことだけで、真に迫ることは何一つ口外していない筈よ?」

「ですが実際問題、このような結果になっている訳ですし……」

うーん、と頭を悩ませている中に、ひとつの影が割り込んでくる。

「知らないの? 結構噂になってたよ、『一年の転校生を連れて何かやろうとしてい
る』って」

「布仏さん、来ていたのですね」

ほにやら、と言う擬音が聞こえてくる笑みを浮かべた布仏さんはそのまま言葉を続け
ていく。

「うーんとね、ユウくん達最近放課後に色々やってたでしょ? 聞き込みしたり、準備した
りーって。それ、結構目立ってたらしくて、推測から始まって情報が拡散していったっ
ぽいんだよね〜」

「それ、マジ? 全然気付かなかった……」

「知らぬは当人達だけ、ね。なんだか恥ずかしいわね……」

「まあまあ、それだけ皆さんが棗さんの為に尽くそうと思っっている証拠ですから」

100%善意というよりも、面白半分に乗っかっている人の方が恐らくは割合としては
高めだろう。

閉鎖的な環境では、娯楽もまた画一的で代わり映えのないものとなってしまう。だからこそ、こういったイベントには敏感なのだろう。

ましてや、女性は集団心理に固執する傾向がある。余程のアウトローでも無い限り、ハブられるような真似はしたくないだろう。

因みにであるが、この流れは狭間の思い通りの展開だったりする。

今回の問題は、料理の上手い下手で解決するほど底の浅いものではない。

料理の腕とはすなわち個性。十人十色の特徴があると言えば聞こえは良いが、それを歪めて新たな境地に至るのは非情に困難とも言える。

それこそ、男が女になる——それぐらいの変化が起こらない限り、全く別のものとして完成させるのは不可能に等しい。

だからこそ、情報拡散を利用した人海戦術。

狭間は裏で、今回の件を水面下で拡散させるべく暗躍。

そして、かなりの人数が集まることも想定済みだった彼が並行して行っていたのは、資金繰り。

あらゆる手を尽くすにも、人手があつたとして食材無くしては成り立たない。

とは言え、そう簡単にお金を調達出来るのならば苦労はしない。

IS学園側のメリットやら理外の一一致があれば、そこから抽出も出来たかもしれない

が、これはあくまでも私事による会合。

規模から鑑みても割とグレイゾーンな行事になりそうな上に、やっていることはレクリエーションレベルのやり取り。

一般的な学園ならばまだ希望はあったかもしれないが、ここはISについて学ぶための場所。そんなことにお金を使う余裕など、更々無い。

じゃあどうする？

そこで白羽の矢が立ったのが——生徒会長、更識楯無である。

狭間は知らないことではあるが、彼女は対暗部用暗部とかいう、寿司の上に寿司を乗せたような職務を全うする家系の当主で、有り体に言えば金持ちである。

裏稼業を抜きにしても、ロシアの代表候補生としての地位はスポンサーやパトロンが就いていても何ら不自然ではないものであり、事実金銭面でのバックアップは十全と言えた。

だが、その殆どは更識家が管理しており、個人で扱えるお金は微々たるものでしかない。

微々たるもの、とは言ったが全体の比率で言えば女子高生どころか勤務二、三年のサラリーマンよりは持っている辺り、馬鹿には出来ないのだが。

前置きはこれまでとして、結局の所彼女が自由に使えるお金はポケットマネー以外に

は無いということである。

如何に金銭に恵まれた楯無と言えど、個人で負担するにはあまりにも資金が掛かる。塵も積もれば何とやら。狭間達がやろうとしていることを思えば、食料は種類と量、両方が潤沢であればあるほど良い。

そこに更に追い打ちを掛けたのが、主賓が棗早織であるという事実。

棗早織は身元経歴一切不明の監視対象。謎が謎を呼ぶ、不可解な存在。

そんな人間を各国の重要人物が集うIS学園に入学させようとした上層部の考えに頭を抱えましたが、それは今重要なことではない。

狭間は言った。

『この行事を通して、棗さんの秘密の取っ掛かりぐらいは掴めるかもしれませんよ?』
酷い殺し文句だ。

知ってか知らずか、棗の情報や暗部の力を用いても一切掴めていない現状、狭間の妙に説得力のある言葉と立ち居振る舞いは、甘美な毒だった。

ある意味では棗以上に謎の多い彼が告げる言葉は、そのひとつひとつが砂金の如き価値のあるものである可能性が高い。

掴むまでは、ただの砂かも分からない。されど掴もうとしなければ、永遠に分からないまま。

故に、継るしか無い。なまじ説得力があるが故に、見逃すという選択肢は許されない。——実際の所、狭間からすれば「そう言っておけば多少は協力してくれるだろう」ぐらしいの感覚で言っただけなのだが……意識の差がここまであるとは当人達も思っていないなかつただろう。

結局、楯無が全額負担するということで決着。

狭間が部屋を去った後に、恨み言が一室を支配したことは言うまでもないだろう。

「生徒会長には感謝してもしきれませんね。こんな私事でまさか協力してくれるなんて、思いもしませんでした」

「狭間さん」

盛り上がりも半ばに差し掛かった頃、諸悪の根源（笑）である狭間が遅れてやつてきた。

「今までどちらに？」

「大したことではありません。ただ、生徒会長の慈悲に報いるべく、雑事をこなしていただけです」

その雑事の大半は楯無のささやかな報復と言う名のデコイだったのだが、前の学校でやっていた量に比べれば朝飯前レベルのもので、わざわざ用意する労力を裂いた楯無が一番苦労したというオチがいたのであった。

「……別に大したことでもないわ。必要なことだからしたまでよ」

ムスツとした表情を扇子で隠しつつ、狭間の後ろから楯無も入ってくる。

彼女の懐に与えたダメージを思えば、目の前に広がる和気藹々とした光景を素直に受け入れられないのも、仕方ないのかもしれない。

「それはともかく、折角ですから私も調理に参加しましょうか」

「ユウくん、料理出来たんだけ」

「いつでも好きなものを食べたい、という子供染みた執着の賜物ですよ」

「そういえば、ユウ君の好物って何なの？好き嫌いしてる印象って無いけど」

「そんなの、決まってるじゃないですか。ゆで卵ですよ」

さも当たり前と言わんばかりに告げると、そのまま一直線に歩き出す。

視線の先には、新鮮な卵。調理も一切されていない、普通の卵だ。

「とは言え、学食ではあまり食べる機会がないんですけどね。セットメニューにあるのも稀ですし、単品ともなると此方の都合を押し付ける形になってしまいうので。それに、学食の御婦人方は料理のエキスパートではありませんが——ゆで卵に関しては、私の方が上ですから」

「あ、うん………凄いな？」

「今、何言ってるんだコイツって思いましたね？それはゆで卵への侮辱です」

「そんなことは——」

「ただ茹でるだけと侮るなかれ。シンプルな調理方法であるが故に、他の技術でカバー出来ない料理なのですから。固茹でから半熟と、茹でる時間や温度によつて別の料理へと変貌する。一秒の見極めの遅さが、1℃の調整ミスが全てを瓦解させる。味の方ですが、煮玉子のような独自の味付けを行うタイプもありますが、やはり私は王道を征く塩ですね。素材の味を限りなく活かすことの出来る、極限まで無駄を削ぎ落とした起源にして頂点。勿論、他を貶めるつもりはありませんよ？ゆで卵に貴賤無し、シンプルな構成であるが故にその可能性は最早無限大。それを否定するということは、それこそ冒険でしかありません。それと、私はゆで卵だけではなく卵全般が好きですよ？中でもお気に入りには——」

「あ、うん。そうなんだ、凄いね」

饒舌に語り始めた狭間に相槌を打つ本音。

二人の周囲には次第に人が遠ざかっていき、誰もが関わり合いになりたくないと身を以て証言していた。

「……狭間さんは放っておこう。下手に突いたら巻き込まれるだろうし」

「ごめんなさい、布仏さん」

謝罪の言葉も喧騒に呑み込まれる。

しかし、これ以上ボリュームを上げれば意識される可能性もある。

今度改めて謝罪するという心持ちで、ひとまず意識をリセットすることにした。

「あれ？ノエルんは？」

「そういえば……」

ふと、隣りにいた筈の友人がいつの間にか消えていたことに驚く。

そして、彼女を知る者達は直ぐ様思い至る。

「まさか——ッ」

「あ、やつぱり！」

学生の中に混じって、料理を嗜んでいる近藤を確認し、棗以外のメンバーの表情が引きつる。

「どうしたの？二人共」

「あ、うん。えつと……実は、ノエルんの料理は——」

「出来た!!」

「はやっ!？」

近藤のテーブルには、宣言通り料理が出来ており、そのスピードに周りの生徒も目を見開いていた。

「出来ればすぐに食べて欲しかったから、シンプルなオムレツだけど、どうかな？」

そう言つて、棗の前に差し出す。

見た目は普通、匂いも普通、どこからどう見ても普通。

なのに、どうして。こんなにも食指が動かないのだろうか。

それは、料理を見た人間の総意だった。差し出し、差し出された二人を除いて。

「うん、美味しそうだね。いただくよ」

「あつ——」

躊躇いなくスプーンを取る棗に、静止の声が遅れる。

黄金色を纏うソレを口を含み、咀嚼し——飲み込む音が、いやに大きく響いた。

一挙一動を静かに見守る仲、棗はそんな周囲の焦りに気付かないまま、二口目へと向かった。

「……ん？」

その反応は、今まで近藤が作ってきた料理を食べた人間の、誰とも異なるものだった。

故に、信じられないものを見るような目で棗を見てしまうのは、何ら不自然な行為ではない。

「大丈夫、なの？」

「何が？美味しいよ？」

椿が問い掛けるも、棗は気にしてないと言わんばかりにスプーンを動かす手を止めな

い。

その光景を前に、唾然とするのは近藤を除くいつものメンバー。

彼女達は、近藤の料理がデス・ディナーと称されるレベルの決戦兵器であることを体感している故に、棗の無理の無い好意的な反応はあまりにも不自然で、夢を見ていると逃避せずにはいられない、ある種の悪夢だった。

しかし、頬をつねった所でこの光景が現実には依るものだと再認識させられるだけ。

「——つて、美味しいって、味覚！」

「気付いてなかったんかい！」

ビシイ！なんて音が聞こえそうな良いツツコミが磯村の逆手打ちで冴え渡る。

「え、でも……美味しいって、ええ……」

「どうかしましたか？」

騒動の渦中に、狭間が割って入る。

その背後では、少し青褪めた本音の姿。あの顔は、当分卵は見たくないと間違いないと言っている。

「狭間さん、実は——」

「おお、オムレツですか。美味しそうですね」

「あ、よかったですか？ 私が口をつけたものでよろしければ、ですが」

「是非。いやー、卵談義してたので私も食べたくなりまして。自分で作ったのは布仏さんに食べてもらったので」

「美味しかった……美味しかったんだ……でもしばらくはいいです」
虚ろな目でそう呟く本音。

純粹に大量に食べさせられたことにもよるが、どちらかと言えばそのあまりの美味さに女子としてのプライドがへし折られた事が、彼女が死に体を晒す理由だった。

「では、一口」

今度は誰も止めなかった。

それは、『究極の化学反応によって今回は奇跡的に美味しくなったのでは?』と言う可能性を見出したからだ。

しかし、忘れていた。棗の症状の存在を。

棗が美味しいと感じられる料理——それが、果たして正常であるものか。

「――」
起き上がり小法師を無理矢理止めたかのように、食事を口にした瞬間に左右に揺れ出した身体は突如として静止。

石像と化した狭間を見て、一同は察する。それと同時に、ある種の安堵感さえ抱いてしまった。

「どうですか?」

「……ええ、美味しいですよ」

ニコニコ笑顔で狭間に感想を聞く近藤。

張り付いた狭間の笑顔は、アレを食して尚揺るがない。

否、崩れるのを必死に拒んでいた。

ヒクヒクと広角が釣り上がるのを堪え、吹き出る汗を最小限に留め、手の震えを更なる震えで相殺する。

生理現象さえも超越するやせ我慢を前に、周囲は感動さえ覚えていた。

「狭間さん、あんた漢だよ……」

「貴方の犠牲は忘れません……!」

声を出す余裕と、人目を憚ることさえなければ反論していただろう。勝手に殺すな——と。

「なら、もう一口如何ですか?」

「いえ、一口の約束です。折角棗さんが頂けるようなものを、私が奪うような趣味はありませんよ」

尤もらしい言い訳と共に、オムレツを棗に返却する。

そのままゆつくりとした足取りで家庭科室を退散するのを、本音が追いかける。

「ゆ、ユウ君……?」

無言で人気がない道を歩く姿に、思わず声を掛ける。

それにより足を止めたかと思うと、膝から崩れ落ちるようにして前のめりに倒れた。

「ユウ君!」

「……布仏、さん」

「喋らないで!」

弱々しく震える狭間の手を取る布仏。

涙目で訴えるも、その想いは届かない。

否、気付いているからこそ、聞かなければならないのだ。

「私は——彼女の笑顔を護ることが出来たのでしょうか」

「うんっ……うん!出来たよ、カッコよかったよ!」

「そう、ですか。それは……良かった」

儂げな笑みを浮かべる狭間の身体は、次第に重くなっていく。

肉体を支える力が削がれ、今の彼は枯れ葉の枝に等しい。

そんな彼の身体を労るように、布仏は優しく抱きとめる。

「私ね、もっとユウくんの卵料理食べたいな。さっきみたいなのチャワチャワした環境

じゃなくて、もっと静かな所で、二人つきりで」

「それは——いいですね。誰か一人の為ともなれば、腕の振るい甲斐が、あります」
ゆつくりと、今後の展望を言葉にしていく。

決して叶わない夢ではない。日常に隣り合う、有り触れた一コマ。
それがどんなに尊いものなのか、今になってようやく思い知る。

「だったら——」

「ですが……すみません」

しかし、狭間はその未来を肯定しなかった。

自分の置かれている状況を、誰よりも理解しているが故に。
些細な約束さえも、紡ぐことは出来ない。

「なん……で、謝るの?」

布仏の笑顔に一筋の雫が伝い、狭間の頬に落ちる。

理解してしまった。しかし、認められないから問い掛ける。

目を背けてもどうにもならない現実ならば、せめて真摯に向き合うことこそ肝要であると信じて。

「私にとってその願いは、少々眩しすぎる。どんなに綺麗な道でも、瞳を閉じた状態では何の意味も持たないのですから」

「だったら、私がユウくんを支える! 貴方の目になってあげる。だから、そんなこと言わ

ないでよお……!!」

「それは……あまりにも魅力的な提案だ」

布仏の手から、狭間の手が擦り落ちるように解けていく。

遂には重力に従い、腕はだらりと地面に寝かされる。

狭間の幸せそうな笑顔だけが、今際の際に抱いた感情の是非を物語っていた。

「ユウくん……ユウく……ユウくん!!」

遺された者は、ただ慟哭する。

己の無力を嘆き、力無く横たわる彼の肉体を力強く抱き締めた。

「……何やってんの貴方達」

そんな二人の茶番劇にツツコミを入れたのは、後から追いかけて、そのまま遠巻きから白い目で過程を見守っていた楯無だった。

呆れた物言いではあるものの、区切りが良いところまで口を挟まない辺り彼女もまた同類であると言えるよう。

後日、狭間は食中毒で丸一日お休みとなったのでした。

狭間曰く、『布仏さんの作ってくれたおかゆを食べた瞬間、不覚にも卵への愛を忘れてしまうところでした』とのこと。

それだけ彼が糧としたモノが名状しがたいナニかだった、というのは語るまでもない

だろう。

余談ではあるが、この経験もあつて後にセシリアが作る料理を普通に美味いと評価してしまつて新たな惨劇が巻き起こることになるのだが、それは別のお話。